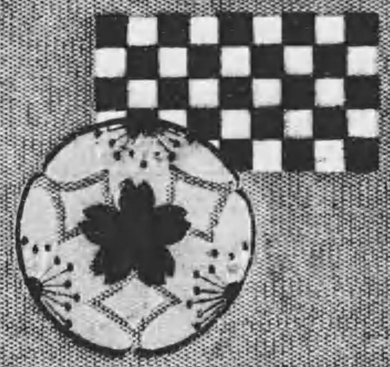
特500
919



0054097-000

特５００－９１９

遊女の時代色

武田完二・著

大同館書店

昭和９．８

AIB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

675

特500-919

閲覧禁止

遊女の時代色

趣味と研究

著者 宍田武

東京神田
大同館藏版

序言

私は悠々二十年の計畫で、「趣味の國民生活史物語」とでも名づくべき尨大な一群の著述をやらうと考へてゐる。本書はそのスタートの積りである。

○

私が、覺束ない足取りで歴史の勉强に專心し初めてから、略々十五六年になる。尤も、その中間に歴史研究から遠ざかつた幾年かゞあつたが、青春の元氣にまかして史書をむさぼり讀み、或は歴史の講義を聽いた年數も、まさに十年に垂んとしてゐる。それも初めは教壇に立つて歴史の講義をするための勉强であつたから、國史ばかりでなく、東西兩洋の歴史（ことに西洋史）の勉强により多くの努力をしたし、その勉强ぶりは專らアカデミックな研究の糟粕をなめることであつた。

その後、教壇を引下つて、青春のアンビションを燃やしながらゝさる、やゝ社會的な活動に志したので、歴史の勉强は中止して、專ら教育教化の問題に關する勉强と、その方面の仕事とをやつ

た。ついで更に、或る行がゝり上、三轉して出版事業界に身を投じた。折から世間一般の不況と、圓本洪水直後の業界の行詰りとのためなどで、私はエラク苦勞をした。しかし、さうした繁激な仕事に携つてゐながらも、元々書齋裡に本を讀み、ペンを握ることを好む性分に生れついてゐた私は、休み日や、人の寢靜まつた三更すぎに、本を讀み、且つペンを執ることは怠ならかつた。そして、俄然、歴史に對する感興が復活し、わけても國史を多角多面的に（あらゆる角度から）見るといふやうなことに、いたく興味を覺えたのであつた。

幾らか社會的な運動に從事したり、猛烈な事業的鬪爭の中に身を投じたりしたことは、私の歴史研究を一時停頓させはしたが、しかしそれは私の歴史を見る目を新ならしめる機緣であつた。私は、それによつて、アカデミックな研究の糟粕をなめる域を超脱し得たのであつた。

さうした開眼の途上に生れたのが、前著『趣味史談・大奥秘史』（七年四月發行）であつた。

その頃私は、「史的事實を人間生活的に觀照して、生きた人間の生活としての歴史を表現せねばならぬ」と考へてゐた。それは、アカデミックな歴史が生きた人間を表現することに缺けて居り、一方多くの興味本位な歴史讀物は、殆んど荒唐無稽な——史實に不忠實な、或は史學的研究に無知なものであることに、痛切な不滿を感じてゐたからであつた。

一體史書といふものは、おしなべての人々に感興のあるものだ。で、適當な著述をこれに提供するならば、興味津々たる中に或は國民精神の眞實相を明確に把握させて、國民的自覺を正當に高めるといふことも可能であるし、また所謂「世態人情」の機微をカミ味はしめることも出來る。概して、生きた人間生活乃至は國民生活の樣相、發達相をヴイヴイッドに味識させることが出來ると、そこはやつぱり教育畑に育つた私であるだけに、大いに人間的教化意識をもつて、考へてゐたものであつた。

しかし當時の私は、今日以上に史的知識が貧弱で、適當な資料的文獻を蒐集するだけの力量も便宜も極めて少なかつた。そうした乏しい知識と資料とで、たど〳〵しい筆致でものした『大奥秘史』であつたのだから、出來たてのホヤ〳〵時代から、それは私にとつて甚だ氣恥しいものであつた。けれど、世の中は不思議なもので、それでも、類書が少いのと、問題が稍々獵奇的であるのと、丹念に多方面な觀察がなされてゐた爲とで、案外に好評を博し、書店でもかなり賣れたし、殊に圖書館などでは最も多く讀まれた書物の一つに擧げられた程であつた。それに大いに氣をよくしたといふわけで、今度は相當資料の蒐集も豐富にし、研究も出來るだけ入念にして著述を思ひ立つたのが、本書の內容を包む處の「本邦歡樂史物語」であつた。

○

我が國の、政治的、社會的乃至は文化的な變遷發達の歴史や、對內的乃至は對外的な競爭的爭鬪史として戰史の類は、國民教育の料として又は少靑年時代の感興的讀物として普及してゐるので、一般大衆にも一通りに知られてゐる。しかし特殊史わけても「我が國民は如何なる生活をして來たか」といふ方面については、成書も極めて少く、從つて大衆的な歴史的興味の中には殆んど取入れられてゐない。そこで私は、この方面の歴史に私獨特の鑑賞の目を向け、それを趣味的な讀物とするために、斧鉞を加へ初めたのである。

折から私は、繁激な出版事業から手を引いて、書齋に籠るやうに、生活が急轉換をした。仕事に從つて急速度に進み初めたのである。

私は先づ、「吾等の祖先はどんなものを食つてゐたか」といふことを調べ初めた。そして、實に愉快なことには、彼等は極めて近代まで案外な程まづい物を食ひながら、然も大いに舌鼓を打つてゐたといふ事實を知つた。その拙い食物しかない時代に、尙且つ彼等は、お粗末なものの中から「口舌の歡樂」を與へるものを追求することいとも熱心であつたことを知つた。私は、さうした粗朴な「口舌の歡樂」の歴史を覺えて、甘黨の口舌歡樂史を追求し、更に甘黨などの到底うかゞひ知るべくもない處の、この世からなる法悅境に遊ばしめる酒と、愛酒の歴史に進んだ。處がそこには、當然、酒興を助けるための美しい女性の歴史が隨伴した。かくて、私は「女のある歡樂」、或は「エロのある歡樂」の歴史に自らなる感興を态にした。面白いまゝに、接する程の親しい人々へその話をして聞かせると、殆んどすべての人々が、「君に左樣なものは書けまい、そんなものは放蕩の味を味ひ盡した人にして始めて書き得るものだ」と評した。「或は然らん。しかし暫く待て、先づ話す處を聞け」と、一通り、その折々の調べの部分を話して聞かせると、彼等は必ず轉向をして、「面白い、實に面白い、是非書け」と激勵した。さうして私の「女のある歡樂」の歴史の稿も進んで行つた。

私は更に、さうした個人的乃至は小人數で堪能する性質の歡樂史の外に、群集的な歡樂生活、つまり、花見遊山、觀劇、歌舞、舞踊、寄席的諸藝などの歴史にも調べをすゝめつゝあるのだが、先づ一通りまとまつて來た「女のある歡樂の歴史」を世に出すことにした。本書に收むる處は、その約三分の一である。

○

本書は、一種の「本邦賣笑史」である。しかし、その全體的叙述ではない。近世になつて大發達

を遂げた三都の三大花街を初め、諸國諸地の所謂遊里に關するものは、本書には殆んど省かれてゐる。それ等は何れ、別冊として世に出す機會があらう。本書に收められてゐるものは、近世の所謂遊里と稱する固定的な密娼地區内に於ける賣笑賣春の女（一言にして云へば所謂「女郎」の類）とは些か趣を異にする特殊な賣笑婦を主として描いたものである。それも近世以後の部分は、江戸に於けるそれ等の女が中心となつてゐて、他地のものは甚だしく等閑視されてゐる形であるが、それは只頁數の關係でかやうな結果になつたに過ぎない。しかし、私の所期の目的は、その爲に損じられる心配は殆んどあるまい。

○

處で私は、本書を單なる賣笑史と考へて貰ひたくない。賣笑史を通して社會生活の側面史を描かうと考へたものである。謂はゞこれによつて世態人情の一面を窺はうとしたのである。各時代の遊女の樣々なすがたを描き、彼女等を伴侶として歡樂を追求した人々の樣を描き出す間にも、常に當時の社會の情勢や、人間のすがたを暗示することに、出來るだけ力を致したつもりである。單なる賣笑史としては不必要な部分にまで大いに筆を進めてゐる所の少くないのは、一にその爲である。

同時に私は、本書を「社會生活の側面史としての遊女史」として、一種の史的研究書として書かうとしたのではない。一つの趣味讀物たらしめることを意圖したのである。その爲に、思はづ脱線し過ぎて、今讀返して見ると、冷汗の流れるやうな個所が甚だ多くなつたやうである。材料のある限り、斯界のナンバー・ワンとも云ふやうな女達の物語を豐富に加へることを心掛けたのもそのためであつた。

○

本書の叙述に當つては、相當古文獻を探つて、要所は適宜引用して本文の中に織込んで見た。それはなるべく當代の實相や氣分を生かし、且つ、當代の識者や通人たちが、どんな風にこの種の女達に關心や感興をもつてゐたかを自らに明かならしめようと考へたからであつた。尤も、引用古文獻の中には、當代人の記述でなくて、後代人のものも多いが、しかしそれには現代人の氣分や感想とは著しく異るものが少くない。それ等を通して、今日と違つた時代の人々の人生に對する感じ方を了解することが出來る。およそ歴史的な事實は、それを直ちに現代人の常識や生活意識で判斷しては、その實相を握捫することが出來ないといふのが、私のかねての持論である。

○

本書をまとめるまでには、手當り次第、隨分各種各樣の新古の文獻を讀んだのであるが、一々そ

れを特記する必要はなからう。たゞ、私がかうしたものに手をつけ初めた時に、大いに水先案内をつとめて呉れた次の二書、宮川曼魚氏の名著『江戸實笑記』及び上村行彰氏の『日本遊里史』は特記して、兩著者に謝意を表しなければならぬ。殊に宮川氏に對して然り。

私は、右の二書及び他の多くの現代本によつて攜導されながら、次第に古いものを漁つて行つたのであるが、中にはついに原稿を手に入れることが出來なかつた爲に、孫引を餘儀なくされたものの少なくない。しかし、及ぶ限り原本について自分流の解釋を加へることに力めた。これだけの苦勞をして、どれだけの社會的意義が生じ、また自らに酬ひられるかと考へると、甚だ心細くなる。

○

尙本書は、『大奥秘史』の版行後間もなくの昭和七年五月から、八年の七月までの間に、調のまとまるにつれて、一章一篇づゝを書いて行つたもので、全體を一度に書き下したものではない。從つて、行文の調子も一杯でないし、多少の重複も出來た。またその中には至極會心の章もあるが、又中には我れながら不快なものもある。しかし今は、そのまゝに仕て置くことにした。

○

以上、讀んで呉れる人々には不要なことまで長々と述べ過ぎた嫌ひはあるが、これが私の「趣味の國民生活史物語」のスタートであるのだから、敢て由來を述べて、記念にしたいと思ふ。諒之。

最後に、本書の公刊を快く引受けて呉れた大同館主阪本氏の御厚意に對して謝意を表する。

昭和九年七月十四日

著者

目次

第一編　奈良時代から室町時代まで

○奈良朝時代……二
〔一〕遊行女婦……二
《萬葉集に現はれた遊女》
〔二〕采女物語……一〇
○平安朝時代……一六
〔一〕水邊の遊女……一六
その一　河尻のうかれめ……一六
難波津—水邊の遊里—江口神崎—蛍島
その二　大江玉淵の娘しろめ……二二
その三　月卿雲客と遊女……二八
その四　遊行風景……三四
〔二〕陸路のあそび……三八
その一　筑紫の檜垣……三八
その二　中古文學に現はれた陸路のあそび……四二
その三　くぐつ……四四
〔三〕遊女名稱考……四八
○源平時代……五五
〔一〕白拍子……五五
その一　白拍子の變遷……五五
その二　祇王と佛御前……五九

その三　靜御前……七三
〔二〕源平時代の遊女……九二
その一　武將と遊女……九二
戰將と遊女—義朝と延壽—富士川の水鳥—範朝と頼朝—三位中將重衡と千手の前—池田の侍從と熊野—
その二　遊女雜話……一一三
伊通卿—寂照法師—近江海津のお彖—西行法師と江口の君—長者—平家の上萬—武藏坊辨慶と遊女—
○鎌倉時代……一三〇
〔一〕著名な遊女……一三〇
虎御前—龜鶴と少將—重忠と淺妻—景淸と阿古屋—遊女淺菊—越後の初音—
〔二〕鎌倉時代の白拍子……一四六
白拍子商賣—微妙—上皇寵妓龜菊—玉壽—
〔三〕鎌倉時代の遊女……一五三
遊女の繁昌—遊君別當—遊君根源—法念上人と神崎の遊女—遊女を醜業婦と觀ずる思想—
○室町時代……一六六
その一　士氣を鼓舞する爲に……一六六
その二　加賀女と桂女……一六九
その三　傾城のいわれ……一七一
その四　室町時代の京都遊女……一七三
その五　戰國武將と男色……一七五
その六　地獄太夫と高間太夫……一七九
第二編　近世以後
〔一〕女歌舞伎のエロチックの商賣……一八六

その一　幾島丹後のレビュー……一八六
その二　出雲のお國……一八八
その三　淫賣女歌舞伎……二〇〇
その四　佐渡島正吉……二一二
その五　風懷の果て……二一〇
〔二〕風呂屋と湯女……二一六
その一　その起源……二一六
その二　江戸の風呂屋……二二三
その三　當局の彈壓……二三二
その四　丹前の名物女勝山……二三四
その五　新吉原新風景……二四四
その六　湯女風呂の傳統……二五〇
〔三〕比丘尼のエロ勤行……二五二
頭を叩けば尻を出す淫賣婦—比丘尼賣笑の由來—比丘尼の中宿—元祿比丘尼の衣裳—中宿入風景—可愛想なお鶴—その後の密淫取締—武士と死恥をさらした比丘尼—比丘尼滅—
〔四〕踊子……二六八
踊子の傳統—遊藝自慢の町娘—プロレタリヤの娘—うぶな踊子—元祿頃の踊子—寶永の禁令—其後の復活—お株を藝者にられて—
〔五〕藝者……二七五
その一　藝者の發生……二七五
その二　吉原藝者……二七六
その三　深川藝者……二八四
その四　一般の町藝者……二八七
その五　寛政改革と町藝者……二九〇
その六　文化文政の町藝者……二九二
その七　天保の改革……二九七

その八　幕末の藝者……二九九
その九　社會狀勢の變化……三〇一
その十　堀の藝者……三〇四
その十一　新柳二橋……三一一
〔六〕水茶屋のウエトレス……三一四
その一　水茶屋の歴史……三一四
その二　笠森お仙……三一八
その三　淺草の水茶屋……三三五
その四　兩國その他の水茶屋……三四七
その五　天保頃の水茶屋とウエトレス檢擧……三四八
〔七〕夜鷹（總嫁）……三五〇
路傍で淫をひさぐ女—辻君は女たかに非ず—夜たかの古名立君—京阪醜婦風景—吉田餃ケ橋—不潔な夜たか—夜たか風俗—夜たかの名の起り—夜たかのお客—西鶴の一代女—
〔八〕船饅頭とピン升舟……三七〇
その一　船饅頭……三七〇
その二　江戸の舟まんぢゆう……三七三
その三　ピン升舟……三七九
〔九〕その他の漂浪的隱賣女……三八三
その一　棉摘み……三八三
その二　竈祓ひ……三八五
その三　提重……三八七
その四　その他……三八八
結論……三八九

第一編——奈良朝時代から室町時代まで——

奈良朝時代

一、遊行女婦

——萬葉集に現はれた遊女——

吾が國で、何時頃から賣色が行はれ、賣女が存在したか。それは判然とは分らないが、恐らく奈良時代以前から、その種の素朴な形態が存在したに違ひないとは、研究者の略〻一致する說だ。その頃、彼女等は、稻束あるひは米などを代償として、求むる男に身を委ねたらしい。

しかし、彼女等が遊女として古文獻の上に朧氣ながらも姿を現はしたのは、萬葉集の所謂遊行女婦としてゞあつた。遊行女婦は「さぶるこ」と訓まれ、また「うかれめ」と呼ばれてゐる。遊行女婦は、(萬葉に現はれてゐる限りは)、頗る高級なもので、稻束や米で淫をひさぐしがない女ではなかつたらしい。

○

聖武天皇の天平二年庚丑二月(西紀七三〇)、太宰の帥大伴旅人は、新に大納言に叙任されたので、住み馴れた筑紫をあとに、奈良の都へ歸ることになつた。それまで旅人の部下として仕へてゐた數多の太宰府の官人や、今日流に云へば邊境守備軍である防人達が、別れを惜みながら、博多街道の水城まで送つて來た。彼等は其處で、互に惜別の歌を贈答した。萬葉集の中にその歌が澤山載せられてゐる。その中に、紅一點、たをやめの歌がある。これこそ遊行女婦兒島の歌だ。

おほ(凡有者)ならば、かも〳〵(兎もかく)せんを、かしこしと、振りたき袖を、忍びたるかも

——あなたが、たゞの人でしたら、どうでもして思ふ存分お別れを惜むことが出來ませうに、何といつても身分のお高いお方のこと、振たい袖さへ振られません、あゝ私しや切ない、察してね、といふわけだ——

大和路は、雲がくれたり、然れども、我がふる袖を、なけれともふな

——旅人は大和の奈良へ歸つて行くのだから——

この二首、つゝましく、然も戀慕の情止みがたき女人の、別れを惜しむ可憐な心根を傳へ得て餘す處がない。これに對する旅人の返歌は、

大和路の、吉備の兒島を過ぎ行かば、筑紫の兒島、思ほえんかも

健兒と、思へる我れや、水莖の、水城の上に、涙のごはん。

旅人は武勇を以て聞えた大伴の武人で、然も卓越した萬葉歌人だ。性すこぶる豪快、大いに酒を

愛した。萬葉集にも「太宰帥大伴卿酒を讃ふる歌十三首」が殘されてゐる。且つ幾多の女人に熱烈に戀されたらしく、やりきれないやうな戀歌がそれ等の女人から贈られてゐると同時に彼氏もまた彼女等に殉情的な强烈な戀歌を、幾多與へたことが萬葉集に殘された歌によつて知れる。かうした旅人が、都を遠く離れて異境（と世人に思はれてゐた處の）筑紫に於て、歌をよくする遊行女婦兒島にめぐり廻ひ、二人の間に、「かも〳〵」しつゝ別れがたなき情愛が交されたであらうことは、敢て想像に難からぬ。

さて、兒島の素生、人となりについては、只「うかれめにして歌をよくす」といふ外には、遺憾ながら傳へられてゐない。

○

旅人の子家持も、武人であると共に歌をよくし、萬葉集の選者だけに、斷然他を壓倒して多くの歌を殘してゐるが、彼もまた「さぶること」との間に贈答した歌を詠じてゐる。

孝謙天皇の天平勝寶三年（西紀七五一）の正月三日は、都に雪が降つて、積ること三寸ばかりだつた。その夜、內藏忌寸鷹の邸で雪見の宴が催された。家持は招かれて席に列つた。遊行女婦蒲生の娘女が、酒席の興を添える爲に呼ばれた。

その時、蒲生の娘子は、サービスよろしくあつて、一首の歌を詠んだ。

雪島の、いはほに立てる、なでしこは、千代に咲かぬか、君がかざしに

やがて、雪の夜は沈々と更けて行つた。しかし、酒宴はいとゞ興をまして、大宮人たち、なかなか切り上げる樣子もない。そのうちに、もう鷄が鳴き初めた。そこで當家の主は、

うち羽ふり、とりは鳴くとも、かくばかり、降りしく雪に、君いまさめや

と詠んだ。なか〳〵以て興は盡きない。家持もい〳〵御機嫌で、それに和した。

鳴く鷄は、彌々頻なけど、降る雪の、千重に積めこそ、我れ立ちがてぬ

さて、この蒲生の娘子も、たゞ天平・寶龜の間の遊行女婦で、和歌をよくし、萬葉に歌を殘してゐる、と云ふ以外には、何等傳へられる處がない。

さる年の四月一日、椽久米朝臣廣縄の館に家持が招かれて宴の催された時には、遊行女婦土師が酒席のサービスをした。その時、時鳥を待ち望む歌を作らうと云ふことになつて、家持は早速

卯の花の、咲く月たちぬ、ほとゝぎす、來なきどよめよ、含みたりとも

とやつた。やがて土師は、

二上の山に籠れるほとゝぎす、今も鳴かぬか、今に聞かせん。

と、たど〳〵しい女ぶりの歌を作つて和した。

○

また萬葉集は、史生小咋と云ふ者が或る佐布流古の色香に迷つて、これに惑溺したあげく、妻子を捨てゝ同棲するに至つたので、大伴宿禰家持がこれを敎誡した歌(長歌並に短歌)を殘してゐる。

大巳貴、少彦名の、神代より、言ひ繼ぎけらく、父母を、見れば尊く、妻子見れば、愛しくそぐし、うつせみの、よのことはりと、かくさまに、言ひけるものを、世の人の、立つること立てゝ松楊の花、咲ける盛りに、はしきよし、その夫のると、朝宵に、笑みつ笑まずみ、うち嘆き、語りけまくは、とこしへに、かくしもあらめや、天地の、神こと寄せて、春花の、盛りもあらむと、待たしけむ、時の盛りを、離りゐて、嘆かす妻が、何時しかも、使の來むと、待たすらむ、心さぶしく、南風吹き、雪消はふりて、射水川、浮ぶ水泡の、緣るべなみ、さぶるその兒に、紐の緒の、いつがり合ひて、にほ鳥の、ふたりならびゐ、奈呉の海の、沖を深めて、惑はせる、君が心のすべもなき

——天照大神、少彦名尊の遠い神代から、云ひ傳へてゐるではないか、父母は尊く、妻子は可愛いゝものだと、これが浮世の人情といふものだ。だのにお前は、何と云ふことだ。なぜかわ

いゝ妻子と朝夕笑み交さうとはしないのだ。お前の妻は嘆きながらも、「何時までもかうではありますまい、何時か嬉しい日も來ませう」と待つてゐるぞ。女盛りを夫に離れて淋しがつてゐるお前の妻は、「もう夫の使が來るだらう」と、そればかり待つてゐるぞ。緣るべもなくさすらう女とちゝくりあつて、二人住居の仲よく契りを重ねるもよからうが、妻子を途方に暮れさすとは、仕樣のない惑溺ぶりではないか——と、まあかう云つたやうな意味だ。さて、それに添えた短歌は、

里人の、見る目恥かし、佐夫流子に、惑はす君が、宮出後姿

○

さて、これ等の歌により、またその前書などによつて、吾々は當年の遊行女婦の何者であつたかを朧氣ながら想望することが出來る。「ざぶる兒」は元來「侍る妓」の意で、宴席に呼ばれて酒間のサービスをしたものに相違はない。一にまた「うかれめ」と呼ばれる處を見ても、それが遊女であつたことが分る。それを後世のこの種の女に譬へれば、藝者に類似する者であつたらう。そして、萬葉に現はれた限りに於ては、貴人の宴席に侍つた、まづ高級な職業女性であつたと思はれる。概して相當な敎養もあつたのであらう、一流の歌人である旅人や家持などに和してともかくも和歌を詠じたくらゐであるから。——尤も當年の詠歌は、後世の作歌と違つて、特殊の敎養乃至は修練をつん

で初めてなし得るものではなかつた。天眞に流露する處の情を、ことさらな技巧に囚はれることとなく、自然のまゝにぶちまける種類のものだから。その故にこそ、萬葉の多くの歌が、衒はず作らさる中に掬すべき自然の情趣を掬むことが出來るのだ。

また、遊行女婦の文字を當て、「緣るべ無み佐夫流その兒……」などゝある處を見れば、借金で身を縛られたり、遊廓にとじこめられて籠の鳥の不自由をかこつたりする後世の賣笑婦とは違つて、およそ自由な、漂々としてさすらふ女であつたであらう。從つて、その賣笑ぶりや、情事の形態も、後世の所謂賣笑婦とは色彩の異るものであつたに相違ない。しかし、萬葉集に現はれた斷片的な資料だけでは、彼女等の風姿や行動を判然と推測すべくもない。

○

『和名抄』には、遊行女婦に「字加禮女」、また「阿曾比」を當てゝゐる。萬葉集では、また「草嬢」の文字を「うかれ女」と訓ましてゐる。草嬢は多分、田舍にゐた下等のもので、後世の所謂「くゞつ」の類で、前述のやうな貴人に侍するものではなかつたであらう。例へば萬葉に「草嬢の歌」として次のやうなものが出てゐる。

秋の田の、穗田の刈りばか、寄り合はゞ、そこもか人の我を言ひなさん。

――今は稻刈の眞最中で、百姓達が忙しく働いてゐる。かう云ふ忙しい、他事などにはかまつてゐられない時でさへも、彼氏と逢曳したら、それでもとやかく私のことを云ふだらうか、と云ふ意味だ。

○

萬葉集には、まだ澤山遊行女婦の歌を載せてゐる。

君が宿の花橘は成り(實)にけり、花なる時に逢はましものを

と云ふのは、單に「遊行女婦」の歌としてあるし、

夕闇は道たづ〳〵し、月待ちて、いませ、わが背子、その間にも見ん

と云ふのは、豐前の國の娘子大宅の歌だ。「遊女考」には對馬の娘子玉槻と云ふのも遊行女婦で、萬葉に歌が擧げられてあると記してゐる。

藤原宇合大老が遷任されて京へ上る時、常陸の娘子が彼に贈つた歌

庭に立ち、麻を刈り干し、しき偲ぶ、東女を忘れ給ふな

と云ふのがある。この種の田舍の娘子たちの戀慕の情や惜別の悲哀を詠んだ歌は、萬葉集に數限りなく出てゐる。しかしそれが素人の娘であるか、或は遊行女婦乃至は草嬢の類であるか、萬葉研

究家でない筆者には、區別がつかない。

二、采女物語

采女といふのは、宮廷に仕へて給仕をつかうまつる下級の女官だ。もと「うなけべ」と云つたのが轉訛したのだといふ。項に領布をかけるのがその裝ひの特色であつた。枕の草紙にも、「おてうずばんのうねめ、青裾濃の裳、からぎぬ、裾帶、ひれなどして」とある。常に主上の側近にあつて、配膳のことを司る者と、宮廷の雜務に當る者とがあつた。

采女の名稱が初めて文献に現はれてゐるのは、仁德天皇の御宇だ。『日本書紀』によると、下つて孝德天皇の大化二年正月、郡少領以下の者の姉妹や子女の中で、十三歳乃至三十歳までの容姿端麗な美女を諸國から貢がせて、これを采女とした。大寶令では、後宮十二司の中に、主水司六人膳司六十人と云ふ二類の采女があつて、采女司が彼女等を檢校することになつてゐる。

宇多天皇の寛平九年正月には、太政官符を以て采女四十七人を改めて貢すべきことを諸國に令してゐる。ついで延喜式では、采女三十七人の食祿を規定してゐる。

中古以後になると、髮上采女配膳采女の二種が出來て、前者は專ら、掌侍典侍等の理髮の用をつとめ、後者は專ら配膳の給仕に當ることになつた。要するに采女は、宮廷のサービスガールである。

○

この采女を、一種の賣笑婦と見てゐる人がある。中山次郎氏は、――采女は神に仕へるのが元の姿であるが、その新しい姿として宮中の雜用に使はれた、そしてその雜用の主たる部分は、直言すれば神妾としての用務であつた。さてその神なる語は、言葉は同じでも內容は時代によつて異つてゐる、と云ふ意味のことを述べて、暗に、貴き方に仕へる美妾なることを示し、且つ必要に應じて他の高貴の人々にも侍する女であるとして、これを一種の賣笑婦に數へてゐる。

また上村行彰氏も、「日本遊里史」に采女を假に賣笑婦の中に加へてゐる。――采女は、奈良朝時代唐の妓制に倣つて宮中に置かれたもので、采女部に屬し采女正に支配され、內膳のことに携はつたが、唐の官妓が酒宴や大饗に際して興を助け、專ら外賓や功臣の接待に當つたやうに、吾が國の采女も實質はそれと同樣なものであつた。唐その他の使者の來る時は、その接待に當つて、旅愁を慰むべくあらゆるサービスをさせる爲に置かれたもの、一種の官妓であり、接待的賣笑婦であると

してゐる。

二氏の指摘するやうな事實は、恐らくはあつたであらう。たゞ併し彼女らの總てが、それ等の人々の爲の淫樂の具として奉仕したものと解釋すべきではあるまい。殊に、それを以て一種の賣笑婦と見るのはどうであらうか。少くも今日の常識として考へられる所の賣笑婦乃至は接客婦とは、およそ色彩を異にし、種類を別にするものであることだけは明瞭だ。

○

『大和物語』には、有名な采女の物語が載つてゐる。

奈良のさる帝に仕へる一人の采女、容姿いみじく清らかで、高貴の人々から朝臣までが、頻りによばふたけれど斷じて許さうとはしなかつた。それは、彼女が帝をひたすらに戀ひ奉つてゐたからであつた。處が、仕合せにも、或る夜帝のお召を受けて、年來の思ひがかなひ、この上もない幸福にひたることが出來た。しかし、その後は、幾ら待つても、終に再度のお召はなかつた。彼女は限りなく憂きことに思つて、夜も晝もたゞ帝戀しさにやる瀬なく侘びしく過してゐた。

帝は、一度は彼女を召し給ふたけれど、何も別段の御愛憐があらせられたわけでもなかつたので、日頃彼女を御覽になるにつけても、何かと御用を仰せつけられるに當つても、それ以前と何の變りもあらせられなかつた。

彼女は、とゞかぬ戀の悲しくて、とても世に長らへる心地もせず、終に或る夜、密かに宮中を忍び出て、猿澤の池に身を投げ、果敢なき戀を葬つた。

帝は、少しも左樣なことは御存知なかつた。或る日、或る人が事の序を以て彼女のいじらしい心根を帝へ言上に及んだ。初めてそれを聞召された帝はいとゞ哀れがり給ふて、或る日猿澤の池へ行幸遊ばされ、お伴の人々に、彼女をいたみ慰める歌をお作らせになつた。

その時、お伴の中にあつた柿本人麿が先づ一首詠じた。

わきも子が、ねくたれ髪を、猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき。

帝も

猿澤の池もつらしな吾妹子が、玉藻かつがば、水ぞひなまし

と御製あり、池のほとりに采女の塚を立てることを命じ給ふて御歸還あそばされた。

謡曲の「采女」は、この物語を脚色したものだ。

○

小野小町は、出羽の郡司の女で、采女として宮仕へした。

仁明天皇がまだ皇太子で、正良親王と仰せられたころ、小町を憎からず思召され、小町もまた只管に皇太子をお慕ひ申上げて、いとゞ身にしむ纏綿たる情緒に、或はほゝゑみ、或は泣いてゐたわけだつた。忍ぶれど色に現はるゝは戀の常で、小町の戀はやがて藤原氏の忌む處となり、皇太子から遠ざける爲めに、小町は宮廷を放逐された。

失戀に泣く小町は、宮廷を退くと、比叡山の麓なる小野の莊に佗び住ひをして、孤衾寒枕、昔に變る寂しい月日を送りながら、尙ひたぶるに皇太子を慕ひ奉つてゐた。當時、上流の人々、大宮人や宮女たちは、朗らかに交際をし、戀歌を贈答し、誰かれの差別なく性の戯れをエンジョイしてゐた絶世の美人の典型と謳はるゝ小町の隱栖にも。折々大宮人は打ち連れて訪れて、屢々戀歌の贈答をした。そして、あはよくば小町と假の契りを結ばんものと、いとも長閑に情事をもちかけた。しかし小町は、斷じて戀歌以上には進まなかつた。誰とも絶對に許し合はなかつた。これは當時の宮廷女人に見る能はざる驚くべき事實だつた。そのために終に、小町は彼氏らから不具だと斷定されねばならなかつた。そして、千百餘年後の今日の人々にまで、當時まだ外科醫術の發達してゐなかつたことを哀れがられてゐる

けれど、斷じて小町は不具ではなかつたらしい。たゞ小町は、只管に戀ひ奉る尊き方のために、身の貞潔を全うしたのだ。

正良親王も、いとゞ小町を哀れがり給ふてゐらせられた。その御心情と、小町の生活振りとを組合せ、且つ、『古今和歌集』に出てゐる「讀人知らず」の歌

あかつきの鳴の羽がき百羽がき、君が來ぬ夜は我れぞ數かく

を三字モジつて、

あかつきの榻の端しがき百夜がき、君が來ぬ夜は我れぞ數かく

と改めて、つひに假想人物「深草の少將」が、小野の小町へ百夜通ひをする物語がデッチ上げられたわけである。

これ等の物語によつて、采女が敢て賣笑婦的存在と一口に蔑すまれべき者でないことを、理解することが出來るであらう。

平安朝時代

一、水邊の遊女

その一、河尻のうかれめ

難波津　難波とは大阪地方の古名だ。神武天皇御東征のみぎり、瀬戸内海から東に進んでお舟を大阪灣へ入れ、流れを溯つて河内へと進軍遊ばされた時、波浪いとゞ速かつたので、この地を「波速」と命名された。後にこれが轉化して「なにば」となり、文字も浪花と用ひたり、また浪華などと華稱するやうになつた。

この地方は、古今の地形を甚だしく異にしてゐる。今日大阪城のある邊りは當時の丘陵地で、その以西の平坦部は、秀吉時代以前までは殆んど葭芦のしげる低濕地や滿潮時海面下に姿を沒する處であつた。その以東とても、古い頃は入江が深く灣入して、古歌で人々に膾炙してゐる「難波江」あるひは「難波潟」をなしてゐたのだ。その丘陵地は、南から北へ延びて入江の口を擁する「難波崎」であつた。そして、淀川、大和川、河内川などが流下する土砂によつて出來た砂洲が、あちこちに散在し、「難波江の八十島」と呼ばれてゐた。またその砂洲には蘆荻が叢生して、難波江の寥々

とした景物をなし、「難波江の芦」は、八十島の間に隱見する澪標と共に、古歌にこよなき歌枕を與へてゐた。

そのかみの八十島は、年々に發達し、平安、鎌倉、室町、安土・桃山、江戸と時代を經過するに從つて終に廣大な平野となつて、今日眼のあたりに見るが如き狀態になつて仕まつたのだ。

さて難波津は、古から海路の要津となつてゐた。殊に三韓との交通が開け、つゞいて漢土と往來するやうになつてからは、こゝは愈々重要な地となつた。應神天皇の時すでに難波の大隅島に離宮が設けられたと古書にあるが、ついで仁德天皇は、こゝに高津宮を營まれた。多分、丘陵地、今日の大阪城南附近がその宮趾であらうと云はれてゐる。その頃、淀川は、東北から流れ下つて、今日の新淀川の流路を取つて海に注いでゐた。また、河内川は大和川の水を合せて、丘陵の東を北流し、淀川へ合流してゐた。しかし淀川の下流はすでに土砂のために川底が淺くなつてゐて、甚だ水の疏通が惡く、霖雨の時にはその水が河内川を逆流して附近の田園に氾濫し、被害甚大であつた。で、仁德天皇は、宮北の郊野を堀らせ給ふて、南水（河内川）を直ちに西に向つて海に落すやうにした。これぞ卽ち難波の堀江である。そのために、附近の田園は氾濫の厄を免れたばかりでなく、淀川の水も堀江川を通つて海に流入するやうになつて、まるでこれが淀川本流の姿を呈するやうに

なつた。

それから四百餘年、桓武天皇の頃には、堀江川も水の疎通が悪くなつてゐたので、延暦七年、時の攝津職大夫和氣清麿は、二十三萬の人夫を使役して、荒陵（今の天王寺）の南に、南北に連亘する丘陵を横斷する水路を造つて南水を海に落さうとした。しかしひどい難工事のために終に成就することが出來なかつた。かくて、元祿年間、新大和川が開鑿されるまでは、河内平野の頻繁な洪水は、天然の御意に任せられてあつたのだ。

さて、淀川の舊本流は、堀江川の開鑿されて以來、何時か支流のやうに考へられるやうになつて、名も長柄川と呼ばれ、何時の頃からか、有名な長柄の橋もかけられた。孝德天皇の大化の改新に當つて、都を難波に移し、長柄の豐崎の宮を營み給ふたが、それはこの邊りであつたらしい。ついで奈良朝時代には、そこに難波の離宮が設けられた。（長柄川は今の新淀川だ）。

長柄川の北に三國川（今の神崎川）がある。これはもと淀川とは何等の續がりもない別の川だつたが、桓武天皇が延曆三年山城の長岡の宮に御遷都の後、鯵生野（味生）のあたりを堀らせ給ふて、淀川の水をこれから落すやうにした。それ以來、三國川が淀川の本流の觀を呈し、長柄川と堀江川とが支流の地位に落ちた。

これだけのことを豫備知識として、さて、難波津の遊里の光景を點描することにしよう。

水邊の遊里　桓武天皇が平安京を營み給ひて、都が愈々繁華になつた頃は、西國から京へ上るものは先づ難波の入江に集り、それから三國川（神崎川）を遡つて、鳥飼へ出たのである。この川も、味生開鑿の後百五十年ばかりもたつた頃は、もう舟をやることもなか〳〵困難であつたらしく、紀貫之の『土佐日記』には難航の記錄が殘されてゐる。しかし、尙三國川が唯一の交通路になつてゐたのだから、その川岸には夙に村落が出來てゐた。殊に、神崎（今の川邊郡小田村神崎橋附近）、對岸の蟹島（大阪市西淀川區加島町）のあたりは船着場で、なかなか繁昌してをつた。更に三國川が淀川に合する江口（大阪市東淀川區江口町）は、旅人が海船から淀川の川舟に乘り換へる場所で、一層賑はふ所であつた。

古往今來、船着場は旅人や水夫の旅愁を慰める女の必ずゐる處、神崎も、蟹島も、特に江口は、かくて遊君の花やかな姿を見せる場所であつた。

平安朝の碩學大江匡房撰するところの『遊女記』には、その邊りの遊君のことが述べられてゐる。

山城の國與渡（淀）の津から大川に浮び、西に一日行程の所を河陽といつて、山陽、南海、西海の三道を往き返りする者の必ず通らねばならぬ處だ。その兩岸には所々に村落があるが、川が岐

れて河内の國に向ふ處を江口と云つて、典藥寮や掃部寮の大庭莊がある。さて、攝津の國に入れば、神崎、蟹島などがあつて、人家櫛比し、娼婦が群集し、小舟に棹しながら碇泊の船を訪れて、しきりに一席の情をすゝめる。その聲、雲を起し風を呼ぶかと思はれる。この地を過ぎる旅人は、みな故郷を忘れ家を忘れる。かうした人情の機微に乘じ、女共は、行商の舟の往來する間を、浪を切つて、芦間をわけて釣舟が横ぎるやうに、右往左往、水面は全く彼女らの小舟で埋まつて水さへ見えないと云ひたい程だ。まさに此處は、天下第一の樂土――と書いてゐる。

尙、その光景をはつきりさせるために『古今奇談繁野話』を援用すると、――昔、江口の色里といはれる地は、岸に沿ひ流れに臨んで家を造り、あそこに二三軒、こちらに二軒と、蒲柳ひき結び籬をたゝんで繞らした墻の門から、春ならば桃李笑ひ楊柳媚びて春宵の景を弄び、夏の日盛りは涼を納れ、誘はれ來る人々は霜氷る夜にも胸を焦し、秋月に背きながら星をさぐり、雨につけ雪につけ、身の勞を知らず通ひ來るウカレ人等は、愚痴を病んでゐるのである。水干に袴を着て、章台（妓樓）へと馬を早めるのは、下司めきたる人で、世間を廣く渡り歩いてゐる者だ。やんごとなきお方は、九重の霞をわけて、君（遊君）見んと打ちひそまりながら渡らせ給ふ、と見れば、宮仕へしない者達は、此處へ通ひ來るのを自慢らしく、大聲に合言葉など街にひゞかせ、次郎三郎などゝかしづく者を呼びながら來る、うとましいことだ。……わけてこの里は、都に往きかう川船を招きとめて、そにしのともづなを結ぶ手に、しばしの情をたのむのを主意としてゐる。筑紫のはて、吉備（山陽）のこなた、數限りなく都へ往き還りする人々は、神崎、橋本などにも遊君の家は多いのだが、やはりこの里に泊る船が多く、互に知る知らぬ同船の人々も、後は同じ思ひ出をもつ者となるのも、よほどの宿世の縁であらう――原文が細工澤山なので思ふやうには書き改め得ないが、まあ、かう云つたやうなことを述べ立てゝゐる。

とにかく、それ等の記載によつて察するに、水邊にゐる遊女等は小舟に棹さしながら客船に至つて媚を呈し、驛路に散在する娼家の女は、客席に侍して酒間の興を添へ、今樣の一節や朗詠をやつて歌舞し、或は琴、琵琶などを彈じたものと見える。身輕なお客は、水上デモによつて娼家に誘ひ込みもしたのであらう。かうして、三國川岸の諸所の遊里は、都が繁華となり、官人の往來頻繁を加へるに從つて愈々活況を呈し、その名も高くなつた。我が國に於いて、遊里或は花街と稱せらるる密娼地區の出來たのは、こゝが嚆矢であらう。

大江匡房の『遊女記』には、江口、蟹島、神崎の名ある遊女の名を擧げてゐる。「江口は則ち觀音を祖となし、中君、□□、小馬、白女、主殿。蟹島は則ち宮城を宗となし、如意、香爐、孔雀、三

枚。神崎は卽ち河菰姫を長者となし、菰蘇、宮子、力命、小兒の屬、是れみな俱尸羅の再誕、衣通姫の後身なり」と。

○

以上記した處によつて分るやうに、三國川の沿岸には、江口、神崎、蟹島、橋本などに娼家があつて、往き來の客――それも主として身分のある官人や、都の大宮人を相手に商賣してゐる遊女がゐた。これを總稱して河尻の遊女と呼んでゐた。

その二、大江玉淵の娘・しろ女

『大和物語』に次のやうな一節がある。

亭子の帝（宇多上皇）が鳥養の院に在した頃、例のやうに御宴遊があつた。この邊の遊女どもが幾多召されて侍んべつたが、「この中に、聲もよく、由ある者がゐるか」と仰せられた。遊女ばらの申すやう、「大江玉淵の女と申しまする者が珍らしう參つて居りまする」。御覽あらせられるに、容姿も清げであつたから、哀れがり給ふて、上に召し上げ、「まことに玉淵の女か？」と御意あつた。折柄「鳥養」といふ題で人々に歌を詠ませてゐらせられた處であつたので、「玉淵は歌など上手に詠んだが、若しお前がこの題でよく歌を作つたら、ほんとに玉淵の女と思つてやらう」と仰せられた。

承つた彼女は、即座に

淺みとり、かひある春に逢ひぬれば、霞ならねど立ち登りけり

と詠んだので、帝、いとゞ哀れがり給ふて涙をお流し遊ばされた。人々も、全く醉つた心地で、ひどく醉ひ泣きした。かくて帝には、御袿一襲と袴とを賜ひ、「ありとある上達部、皇子達、四位、五位、これに物脫きて取らせぬ者はこの座を立て」と仰せられた。仰せかしこみ、皆々、片ツ端から何かとカヅケたので、カヅキ（はな）は忽ち山のやうに、集り、二間ばかりに積んで置くほどだつた。

さて、帝はお歸りになるに當つて、南院の七郎君と云ふ方が彼女の住む邊りにお住居の由を聞こし召され、「あれが申すことは院に奏せよ、院より賜はるものは七郎君よりあれに遣はせ。何事によらず、佗しい思ひをさせるな」と七郎君へ御命じになつた。そこで七郎君は、屢々彼女の許を訪れて、何かと世話をしてやつた。

○

大江の玉淵の女と稱する遊女は、遊女名を白と呼んだ。その歌は、『古今和歌集』にも載つてゐ

る。「源のさねが筑紫へ湯あみんとてまかりける時に山崎にて別れ惜みける處にてよめる」と前書して

いのちだに心にかゝるものならば、何かわかれの悲しからまし

尤もこの白女（玉淵の女）と遊女の白女とは別人だといふ說をなす人もある。中島廣足の『白女考』にも、同名異人であると斷じてゐる。然も彼は、「玉淵が女は、時おとろへ身さすらへて、世渡りのたづきなきまゝに心ならず遊女にまじりゐて、さる振舞はしたりけん」と云ひ、また「彼の玉淵の女は、たゞそのかみ一時の遊女にて」などゝ――苟も玉淵の娘ともあらうものが、遊女であつたんでは尊嚴を害すると、なさけなかつたのであらう――甚だ曖昧なことを言つてゐる。しかし、後世のお上品ぶりやが如何になさけながつても、先づ、玉淵の娘、歌よみの白女、卽ち遊女白女であるといふ連鎖は、切れないものと思はれる。

さて、大江玉淵は音人の子で、百人一首で名高い大江千里の弟だ。音人は、淸和天皇に仕へ、從三位に叙せられ、左衞門督、檢非違使の別當などに任じられた人。菅原是善の門弟で、師と共に、政治史上著名な『貞觀格式』を撰し、その上表及び式の序は、音人の作る處だ。また『弘帝範』三卷、『群籍要覽』四十卷の撰もある。江相公と呼ばれる程の人。

玉淵の子朝綱は、書道家で博學家、ことに經史に通じ、すぐれた文章家だ。或る時、朝綱は書道の泰斗小野道風と書道について論爭をし、斷じて下らなかつた。そこで村上天皇が、「朝綱の書道の道風に及ばざること猶ほ道風の文の朝綱に及ばざるが如し」と評されたと云ふ話が傳へられてゐる。何にしても、堂々たる天下の名士だ。參議に任じられ、備前及び美濃の國司を兼ね、正四位下まで進んでゐる。

父玉淵はともかくも、祖父は名だたる大江の音人で、兄また大臣・納言につゞく參議の任にあつた朝綱の妹が、一體何がゆえに遊女などに身を陷さねばならなかつたのか？――へゝ、何れ淫奔で、淪落したんでげせう、なんて、簡單に考へてはいかん。

第一、當年の遊女は、今日の社會的通念となつてゐる淫賣乃至は藝者とは、およそ異なる觀念を以て社會人に考へられてゐた。さうでなくては、如何に遊樂の時代とは云へ、上皇樣が彼女等をお傍近くへ召されて、直々にお言葉を賜つたり、お手づから纒頭を與へられたりなさる筈がない。

次に、當時の上流社會はもう平安頽廢期に向つて驀進しつゝあつたので、名家の子女をかゝる遊女たらしむるに何の不思議もない狀態にあつた。所謂平安盛時は、天下は表面的には頗る泰平で、朝臣もその婦女も、只管に悅樂を追ひ、性の享樂を求めて、文弱などは物かは、男も化粧をし齒を

染め、女に至つては今日の薄馬鹿どもにもまして、終に眉を抜いて黛を描き、衣服の美々しさを何よりも名譽と心得てゐた時代なのだ。貞操觀念などは藥にしたくもない。婦德の權化と思はれてゐる紫式部とても、僞はれる未亡人と云ふ奴で、なか〳〵隅に置ける代物ではなかつた。偶々小野小町が男に靡かねば、あいつ片輪なんだ、と斷定してあやしまなかつた程だ。

藤原基經の妹高子はかねて父良房が清和天皇の皇后にお立て申す豫定であつた。處が夙に在原業平と不檢束な戀をして、頗る評判が高かつた。で、兄たちは五節の舞姫として、ともかくも宮中へ入れ、强いて尊い方へ納め申さうとした。そこで高子は、いたづらものの業平と駈落をした。兄たちは血眼になつて見付け出して、やつと連れて歸つて來た。かうして高子の艶聞今や世間に著聞するにも拘らず、藤原氏はやつぱり高子を天皇の寵妃たらしめようとした。と云つても、流石の藤原氏も皇后にお立て申すなどは憚られるから、叔母の明子皇太后（文德帝の女御、清和帝の御生母）の許に置いて、ついに高子を清和天皇の女御に出した。時に高子は廿五六歳、帝は十六歳であらせられた。

やがて高子は、帝の寵を蒙つて、貞明親王（陽成天皇）を生み奉つた。時に廿七歳。『大日本史』は高子を皇后と申上げてゐるが、『三代實錄』は明確に女御と記し、『大鏡』また高子の入內が尋常でなかつたことを周知の事實として記してゐる。たゞ藤原氏專權時代で、陽成天皇が立ち給ひ、高子はやがて皇太后と稱せられたので、『大日本史』も理論上皇后と申上げてゐるのだ。さて、高子はその後、東光寺善祐の子を生むなどの不始末があつたので、皇太后を廢しられた。然も尙謹愼する處なく、天台の座主幽仙ともよからぬ風說を立てられてゐる。恐れながら陽成院が不檢束に渡らせられて基經の爲に廢立されたのは、生母高子の遺傳に相違ないと、史家は云つてゐる。

藤原繼隆の女、歌人として名高い伊勢も、當時の女の代表的一人だつた。先づ藤原仲平と通じ、やがて宇多天皇の寵妃となつて行明親王を產み、後には更に敦慶親王と密通して女中務を生んだ。そして、たつた三人だけに通じたのでは斷じてないのだ。これが當時の風習であつた。

時はまさに藤原氏にあらざれば人に非ざる時代、世を擧げて愚かなる彼女等は、今を時めく人々に媚をさゝげて名譽とし、且つ榮華に耽らうと心掛けた。この風潮に慨嘆する男共も、只管權門名家の女共を誘惑しては、片ツ端から毒牙にかけて、せめてもの憤懣ばらしとしてゐた。

かゝる淵濁無比の時代に、藤原氏に非ざる大江玉淵の女が、白女と名乘つて遊女稼ぎにいそしんだ處で、殊更に怪ッ體なこととするに足りない。白女はとにかく、中には男千人を念願にして、敢て遊女を志した不心得女さへあつた。

○

その後二百數十年を經た頃の歌人源俊頼の家集にも、江口の白女に關する歌が出てゐる。昔の本にはこれも玉淵の娘しろめとしてゐるが、幾ら何でも白が三百年遊女をした筈がない。何れ、遊女の傳統として白女の名をついだ幾代目かのしろめであつたらう。

――江口にてしろといふ「あそび」の、戸々（遊女の名）を具して、これ又おさなき者なれば哀れにせよ」など申しければ、物語などして遥かに送りて、今宵は戸々女は泊りげに申しければ、なほ折ふしあしとて返しつかはしけるついでに讀める――

とどめずとしろくいへどもをりふしの、あしわけにてもすぐしつるかな

戸々ちやんが、「あたし今晩、×つて行くわ」といふのを、「今夜は具合が悪いからこの次にしよう」と送り出したのだ。

その三、月卿雲客と遊女

當年の宮廷貴人、乃至は月卿雲客の徒が、一筋に性的享樂にいそしんだ一つの理由は、唐土傳來のエロ話の感化だつた。例へば、その美容百の媚ありて六宮の紛黛（後宮幾千の美人）顔色なく、鶯鶯の衾あたゝかにして日たくるまで牽帳紅閨の中を離れがたかつたといふ楊貴妃と玄宗皇帝との驪山宮に於ける物語――玄宗も朝政のことなどは眼中になくなつたと云ふほどの羨ましい悦樂、その後宮に於ける生活ぶりなどが、當年の大宮人達、唐に對する事大思想と、デイレツタンチズムとに膏肓をおかされてゐる公卿たちに、如何に強烈な、新鮮な刺戟であつたか、想像にかたくない。彼等は、白樂天の「長恨歌」などを種にして、云ひ傳へ聞きつたへ、それをやりきれないやうな惱ましいエロ話にデツチ上げて、ホルモンの分泌作用に拍車をかけてゐた。

かくて、藤原氏が御幼君に宮中三所の正妃を奉つたのはともかくとして、攝政關白の身分ともなれば、正妻だけが三人、その他は手當り次第と云ふことになり、これを見習ふ世の男女も、未だその期には及ばざるものと堅造の考へてゐる頃から、すでに淫奔習ひをなして、我れも人も、何等恥かしがる必要を認めざる狀態にまで立ち至つた。たゞ柴式部だけは、いやに勿體ぶつた女だけに、事荷も我が身の性的慾望に關しては、白狀をせず、然も御堂關白といはれ「この世をば吾がとぞ思」つた程の道長が若かりし日に口説いたのを、斷然肱鐵を喰はしたと自慢してゐるお蔭で、後世の人々から淑德高き女と云はれてゐる。でも世のセンサク好きは、式部が誰とも知れぬさる男に戀をして、やりきれない歌を作つてゐた事實に基いて、彼女とても敢て不感性ではなかつたと證

明を試みてゐる。紫式部女史は朗らかに勇敢に男にしなだれかゝるには、些か冷靜に過ぎる女であつたやうだ。それに引かへ、和泉式部は、度々男をとりかへたし、運悪く名がわざわひをして、實質の如何は誰も知らない癖に、欲情コンコンとして泉の如く湧く女の代表者のやうに後代人からはやされて、恥かしい限りの名を殘してゐる。況んや男共に至つては、兄弟、叔姪、互に妻や愛人を私かに姦しあつて、平然として然も内心は大いに嬉しがつてゐた。全く犬猫にも劣り、鶏よりも意地が汚い。それらの實況に至つては、淑徳高いと誇稱する紫式部が、例の世界最古の小説『源氏物語』の中に、いみじくも描き盡してゐる。その物語の結構や、文章や、描寫の巧緻はともかくとして、その内容に至つては、斷じて若い娘などに讀ませられるものではない。

かう云ふ時代に、良家の娘白が江口の遊女になつたからつて、少しも勿體ながる必要はなかつたわけだが、一方また男共は、堂上のお歴々から、下は百官の下ッ端に至るまで、遊女に懇意なものが澤山なくては、斷じて幅がきかなかつた。殊に、藤原氏に非ざる者、たとひ藤原とても世に時めく攝家の馬鹿野郎共でない者は、自ら高貴の家の御令嬢などと思ふさまふざける機會が少なかつたから、江口をさして、大いに遊君の情を求めに行つた。だが、それ等のものゝ遊樂ぶりは、大して花々しく傳へられてゐない。やつぱり、どうしても、いゝことを一人占めにするやうな、貪婪あくなき勢力者どものことが、歴史の上には多く殘されてゐる。

○

紫式部に手ひどく素ッ破ぬかれてゐる藤原道長は、遊女小觀音をいたくも寵愛してをつた。しかし後に法成寺を營んで入道し、前の關白太政大臣となり、世に御堂殿と呼ばれるやうになつてからは、流石に品行もよくなつたと見える。或る時、住吉、天王寺など七大寺詣でと云ふのをやつての歸路、河尻を通る時、小觀音が訪ねて來た。入道の道長、小觀音に甘えられてすつかりテレて仕まひ、赤面しながら慌てゝ衣類をカツギにして追ひ立てるやうにして歸したと云ふ。

○

道長の子、後に宇治の平等院にこもつて宇治大相國と呼ばれた關白頼通は、江口の中君を特に愛してゐたと云ふ。

後冷泉天皇の永承三年（西紀一〇四八）彼氏五十六歳の時のこと、高野へ御參詣のために淀川を下つた。さて、江口を通り、神崎を過ぎるに當つて、遊女諸君は盛に彼氏の船を襲ふた。彼氏、斷じて不愉快ではなかつたが、しかし今は御精進の折柄、佛は生臭味がお嫌ひだ、行きがけは勘辨してお呉れ、その代り歸りには皆々を嬉しがらしてやるぞ」と約束して追ひ歸した。

さて、それから十日餘り、神無月二十日、道霜の白々と置く朝のほの〴〵と明け渡る頃、頼通公の歸り船は鳥養の御牧に着いた。間もなく、御歸りを今や遲しと待つてゐた遊女共が、競ひ爭つて、舟の笠を連ね、棹をたぐつて押寄せて來た。古い馴染は殘んの色香を衒ふべく小皺を白粉でぬりかくし、若さを誇る美しいのは、御意もあらんかと一生一代の粧をこらして姐さん連の後に從つた。かくて、御遊宴よろしくあつて、さて彼女等が引上げる時、關白閣下は女達に桑絲二百匹、米二百石を分與すべきことを係に命じ、特に、觀音、右衞門、阿古木の三女史には小袖を賜つた。この有樣を、その邊りに船を寄せて羨しさうに見てゐた女共にも、近よつた限りの者には、また夫々にはなを出してやつた。

○

小野宮の大臣（藤原忠平の子實賴）は、遊女香爐にぞつこん參つてゐた。處が二條關白が、彼女を掌中の花として仕まつた。大臣たるもの〻恪氣せざるを得ない。さて、二條關白は、長い美髮をいみじく延してゐた。そこで大臣、「麿と髯さんと、ほんとはどちらが好きなんだ、おい香爐」と、しつッこいなんて仕やうのない程聞くのであつた。

○

鳥羽天皇の元永二年（西紀一一一九）白河法皇御院政の頃、九月三日の夜半、さる方は北殿の御前から車に召されて御門を出で、夜のほの〴〵と明け初める頃、船に乘られた。扈從の面々は源相公、伊豫守、權中將、『長秋記』の著者等々〳〵。それに數多の女房（女官）も從つた。彌勒寺の別當圓賢の船を女房の舟とした。江口の遊君熊野、比和君なども、御伴つかうまつつた。彼女等は一舟に同船して笠二つをさし連ね、今樣を歌ひながら、大船にくつついて下つて行つた。神崎を過ぎる時には、金壽、小最、弟黑、輪鶴などの遊女の面々が、夫々の舟に乘つて參會した。そこで暫く遊廻しながら宴遊してゐると、面憎や、晩秋の時雨が細々と降つて來た。やがて段々烈しくなる。仕方がないから女房達の船は遊女白古の家に着け、伊豫守以下の男共は遊君を引率して北前の宅へ行き、夜どうし大いに歌つて、曉かたに宿へ引上げた。そして伊豫守は金壽を呼び、羽林は小最を抱き、その他にも夫々に手配をして、四日と五日は神崎に流連し、六日には神崎を出立して高濱に遊んだ。そこでも六人の遊女を呼び寄せた。かくて、金壽は祝儀に單衣三領を貰ひ、熊野と伊世とは二領、比和と輪鶴は一領づゝ、その他は伊豫守からそこばくの米を頂いた。

○

『十訓抄』には、一條天皇の御代、播州室の書寫山の性空上人は、神崎の遊女の許を訪れて、女の

亂舞する樣を見物した、と書いてある。尤もこれは遊女のエロをのぞく爲ではなかつたさうで、上人は遊女の姿を觀音の示現と觀じたといふ。

同天皇の侍從中納言源顯基は、播州室の遊女宮木を愛して、都につれて歸つてゐたが、やがて飽きたので室に返し、捨てゝ顧みなかつた。宮木はそれを恨み、悲しんでゐたが、その後、卿の家人が西國から京へ歸る途すがら室を過ぎるのを見かけたので、我が髪を切つてその船に投げ込んだ。それには一首恨みの歌を書いた紙が結びつけてあつた。

盡きもせぬ憂きを見るめの悲しさは、尼となりても袖ぞかはさぬ

宮木はそれきり尼になつた。竹岡尼と云ふ。宮木の歌は『後拾遺集』にも入れられてゐる。

津の國のなにはのことか法ならぬ、あそびたはぶれまでとこそきけ

その四、遊行風景

遊女が小舟に乘つて碇泊する船に押寄せる時には、君（遊女）は紛裝美々しく、小鼓など携へて、宮廷の貴女よろしくの格好で眞ン中に座する。一人の女がこれに長柄の傘をさしかけ、今一人の女は棹（或は櫨）を繰つて行くのだ。傘には色々の模樣が描かれてをり、周りには帛をたらし、所々に總角の小房が下つてゐる。大船の側へ來ると、頻りに聲をかけるのだ。

赤染衛門の『榮華物語』には、その狀が所々に描かれてゐる。例へば、船が江口にさしかゝると、「あそびども」が、笠に月を出し、螺鈿、蒔繪などで我れ劣らじと飾り立てた舟に乘つて、押し寄せて來た。その呼び聲は、芦間に打ち寄せる波の音と相和して、何とも名狀し難いものだつた、と。

また、長元四年（後一條天皇の御代、西紀一〇三一）の九月二十五日、上東門院（道長の女彰子・一條天皇の中宮）は、石清水八幡や住吉明神へ詣でのために船に召されて淀川を下られた。關白左大臣賴通、內大臣敎通、以下多數の公卿官女が扈從した。その行裝はいとゞ華麗を極めたもので、船は丹波守章任が承つたが、唐屋形の船に駒形を立てゝ樣々な調度を飾り立てゝあつた。八人の船さしさへも、綠袗（六位の官人が着る綠衣）の狩衣、袴には金泥で繪がかゝれ、蘇芳（紫色）の袍（肌着）が着せてあつた。女房どもの舟も、夫々に劣らじと船を飾り立てゝゐた。それに遊女たちが參り合はせたが、これまた決して見劣りするものではなかつた、と。

これ等の記載によつて見ると、當年の遊女たちは、些か憚る處なく堂々と貴人の中へ押かけて行つたものらしい。自然、その風姿や舟のこしらへも、宮廷貴女のそれに引けを取らない程のものだ

つた。後世の船饅頭やピン升船のやうな、しがない物哀れな存在ではなかつたのだ。

○

當時は、遊女の揚代といふものがなかつた。ハナ（纏頭）として思ひのまゝにかづけることになつてゐた。つまり、チップ制度なのだ。前條記す處の上東門院石清水參詣の折には、召されたあそびどもに門院は「物ども」賜はり、人々はまた「物ぬぎなど」してそれを與へた。宇多上皇を初め奉り、道長、頼通以下の人々が、その都度くさ〳〵のものを與へたのは、皆そのハナであり祝儀であり、且つ今日の玉代でもあつたのだ。匡房の「遊女記」には、「或は纐絹の寸尺を切り、或は米の斗升を分ち、陳平肉を分つの方あり、所得のものを團手といふ」と記されてゐる。また時に酒肴を與へることもあつた。

○

『更級日記』にはかう云ふ一節がある。――高濱といふ處に船を留めてゐた夜のこと、いと暗い夜も更けた頃、船のカヂの音が聞える。「何でせう」と聞けば「あそび」が來るのだとのこと。人々は興がつて、その船を近間にさし着けさした。遠い火の光を受けながら、ひとへの袖をながやかに、扇かざして舞ひ歌ふ姿が、いと興趣ふかく見えた――と。

これによつて見ても、前にいくつかあげた高貴の方々の船遊びに參會した遊女たちのことを思ひ合せて見ても分るやうに、彼女等は必ずしも旅船や遊船に押し上つて行つたわけではなかつたのだ。彼女等が舟を美々しくしてゐたのも、そこを舞臺として歌舞する必要があつたからであらう。

とにかく、昔の遊女は、職業的接客婦であり、また一種の賣春婦ではあつたが、後世の女郎などと違つて、下賤な醜悪な女とは考へられてゐなかつた。

○

平安朝期の男の文人も、遊女を詠じた多くの詩賦を作つてゐる。

家は江河を夾む南北の岸、心は通ふ上下往來の船。（大江以言、詠遊女）

舟を門前に維ぎ、客を河中にまつ。（同、本朝文粹、遊女を見る詩序）

和琴緩く調べて潭月に臨み、唐櫓高く推して水煙に入る（源順、遊女序）

秋水いまだ遊女の珮を鳴らさず、寒雲空しく野夫の山に滿つ。（和漢朗詠集）

以て、當年の遊女風景の一端を想望することが出來る。江戸時代の花街もの『麓の色』には、「すべて昔の遊女は河中に船を浮べて往き來の人を待ちける故、流婦、游女、蜑子など稱せり」とある。

遊女を詠んだ歌も色々ある。

心かよふ往き來の舟のながめまじ、さしてかばかりものはおもはじ（黄門定家卿、遊女に寄する戀の歌）

いかでかく、宿も定めぬ浪の上に、うきてもの思ふ身とはなりけん（玉葉集、遊女に寄する歌）

浪の上にこがれてすぐるたはれ女も、たのむ人にはたのまれぬかは（夫木集、兼家朝臣）

二、陸路のあそび

その一、筑紫の檜垣

筑紫の檜垣は、平安盛時の頃遠國で聞えた遊女であつた。多分、遊行女婦兒島などの流れを汲む種類の女であつたらう。

『大和物語』によると――筑紫にありける「檜垣の御」といふは、いと萬たけたいゝ女で、隨分長生きをしたやうだ。藤原純友の騒動（朱雀天皇の天慶二年、西紀九三六年）に逢つて、家は燒け、家財も取られて、痛ましい有様になつた。それとは知らぬ太宰の大貳小野好古、討手の將として下つた時、檜垣の家のあつた邊りを尋ね廻つて、「檜垣の御といはれし人に何とかして逢ひたい、いづくに住んでゐるだらうか」と聞かれた。「此の邊りに住んでゐたんでしたが」と伴の者は答へた。「可愛さうなことだ。こんな騒ぎで一體どうなつただらうか、何とかして見付け出したいな」など云ひながら探し歩いてゐると、髪の白くなつた老婆が水を汲んでゐた。やがて怪し氣な家の中へは入つて行つた。すると或る人、「あれが檜垣です」。好古はいみじくあはれがつて、一寸來て呉れと使に云はせた。けれど、婆さんは恥づかしいからと云つて出て來ない。一首の歌を讀んで返事に替へた。

うば玉の我が黒髪は白川の、水はくむまでなりにけるかな

好古いよ〳〵哀れがりて、著てゐた柏一襲をぬいで與へた。

また同じ人、とあるから好古のことだらう、大貳の舘で、檜垣に「秋の紅葉」を詠ました。

鹿の音は、いくらばかりの紅ぞ、ふり出づるからに山のそむらむ

この檜垣が歌を詠むといふので、或る時物ずき達が集つて、詠みにくい下の句をつけさせようと、意地の悪い詠みかけをした。

わたつみの中にぞ立てるさを鹿は

と。（成る程、大海原の眞中に立つてゐる小牡鹿とやられたんでは困る）すると檜垣、

秋の山邊や、そこに見るらむ

と附けたですぞ！　これで見ると、檜垣は太宰府附近に住んでゐたものと見える。さぶるこの兒島と同じやうに。

當時の太宰府は筑紫の京都で、太宰の帥以下數多の地方官が居り、防人と稱する邊境守備軍が駐屯して、西國の護りであり、地方行政府であると同時に唐土朝鮮に對する外交の府であつた。そこで高級な遊女の需要があつたし、且つ、官人の京都へ往還する者が絶えないために、その地の名妓が遠く京まで評判になつて、大宮人の好奇心をそゝつてゐた。

天慶の頃檜垣がいゝお婆さんであつたとすれば、菅原道眞が太宰の權帥に左遷されて（西紀九〇一年）間もなくの頃が、檜垣の全盛時代であつたのだらう。隨分著名な女であつたと見えて、檜垣のことは諸書に散見してゐる。處が『後撰集』十七卷には「筑紫の白川と云ふ所に住み侍りける に、大貳藤原興範の朝臣のまかり渡るついで、水食べんとて打寄りて乞ひ侍りければ、水をもて出でゝ詠みはべりける。檜垣の嫗」として

年經れば、我が黑髮も白川の、みづはくむまで老ひにけるかな

とある。『大和物語』に出てゐる歌と、殆んど同じものだ。（大和物語の原文には、小野大貳とあるから藤原興範ではない）。『扶桑拾葉集』二卷に「檜垣の家の集をのせたり」とものゝ本にあるが、まだそれを見る機會をもたぬ。

とにかく、檜垣のことは嫗の話ばかりで、彼女花やかに美くしかりし頃のこまやかな情を描いたものはない。いと口惜うこそ覺えるではないですか。

さて時は遙かに下つて、江戸時代の紀行の大家、橘南谿の『西遊記』に、ゆくりなくも、檜垣の奇拔な逸事らしいものが見出される。——天明癸卯（三年）の春、肥前の國岩戸の觀音の巖窟に、或る人願ひの事があつて五百羅漢の像を石で彫んで安置した。やつとそれが出來上つたので、なほ窟の額にも安置しようと企てたが、容易に行ける處ではないから、石工はフゴに入つて、繩で山の峰から釣下げて貰ひ、やつと額にたどりついて岩を堀つた。俄然、一所柔らかな箇所があるので、不審に思つて調べて見ると、石の筐が一つ埋めてあつた。蓋には「檜垣女形自作」の六字が彫付けてある。開けて見れば、小さな像が入つてゐる。像は陶器らしい。石工は一向何ものか分らないが、何にしても勝手な所分をするわけにも行くまいと、これを携へて熊本の細川家の役所へ屆け出た。藩ではこれを學問所時習館へ下げ渡して調べさせた。學者達は打集ふて研究をし、（とにかくこれが有名な檜垣女のいしくもなしたわざに相違ないと云ふことになつたのであらう）、そのいわ

れを書き記し、且つその像を摸寫して石に彫り、また紙に寫生をして、珍奇なものだともてはやした。その頃南谿、予も熊本にあつて人々からこの噂を聞いたから、その圖を貰つて都へのお土産にした——。

これがうかれめ檜垣女史その人だとすれば、世に「白川の檜垣」と呼ばれる白川、彼女がしきりに歌に詠んだ白川は、熊本市を貫流してゐる白川でなければならぬ。さうだとすれば、太宰府に來る都人たちは、幾山川を越えて三十里、遙々遊びにやつて來たのであらうか。そしてまた若かりし日の檜垣女も、かよわい足で道なき道を折々太宰府へ通ふて、帥の館や大貳少貳の邸へ訪れたのであらうか。いや、さうではなくて、初めは太宰府に住んでゐたが、もう容姿も衰へて流行らなくなつてから、白川へ隱栖したものに相違ない。

その二、中古文學に現はれた陸路の「あそび」

『更級日記』の著者は、寛仁四年（後一條天皇の御代、西紀一〇二一）九月、上總介であつた父菅原孝標につれられて、一族と共に京へ歸りつゝあつた。その途次、足柄山にかゝつた處で、當時十三歳の少女であつた著者は初めて「あそび」なるものを見た。

——足柄山といふのは、四五日路の山で、恐ろしげに暗がり渡つてゐる。そこまでやう〳〵たどりついた。麓であるのに、空の樣子さへよくは見えず、えもいはず茂りわたつて、いと恐ろしげである。麓に宿をとつたが、月もなく、暗い夜の闇は路ふみまどう程だのに、「あそび」が三人、いづくよりともなくやつて來た。五十ばかりなのと、二十ばかりなのと、十四五のとがゐた。宿の前に、唐傘をさゝして座を占めてゐる。をのこどもは、火を點してこれを見る。昔「こはだ」と云つた者の孫だと云ふ。髪いと長く、額いとよくかゝりて、色しろく、少しも汚なげでない。「さうでもあらう、下仕へかなんぞでもしてゐたのだらう」などゝ、人々哀れがりながら歌を聞く。聲は全く醫へやうもなく、空に澄みのぼつて、愛でたく歌ふ。人々いみじう哀れがつて、そば近くよせて打興じたが、「西國のあそびはとてもかうはないよ」などと客人がいふのを聞いて、あそびは、「難波あたりにくらぶれば」と巧みに即吟の歌を唄つた。見る目にもいと美くしく、聲さへ似るものなく歌ふ女たちが、あの恐ろしげな山の中へと立ち去つて行くのを、人々は名殘惜んで皆泣く。まして幼い自分の心は、この宿りを立つさへ名殘おしい思ひがした——。

——やがて、美濃の國の境になつてゐる墨股の渡りを渡つて、野上と云ふ所へ着いた。そこでもあそびどもが出て來て、夜一夜歌を謠つたが、足柄のことが思ひ出されて、限りなく哀れに戀しい思

ひがした――。

かう云ふ風に、漂々として旅路を歩き、旅人の宿りを求めて一席の歡興を與へて廻る女、今日の所謂旅藝人式な遊女のあつたことが分る。

後鳥羽天皇の御代に出來た源俊頼の家集『散木集』に――鹿島を過ぎる處に「あそび」どもが數多まうで來て、歌を唄つたけれど、「かやうな思ひをしてゐる場合だから、とても遊ぶわけには行かぬ」とわけを話して聞かして、些かの物などこゝろざしに遣はして歸したが、また夜やつて來て遊びをすゝめたから――とあるさうだ。鹿島はしかし水郷であるが、更に同書には、――ふしみの山里で、主があそびどもを寄越したのを、「あそびなどを買うとは」などゝ云つたが、その時六郎大夫孝清は、「あそびをだにもせぬ遊びかな」皆さんおさきに、と云つたので、「さもこそは歌もうたはぬ君ならめ」云々――と云ふ文句もあるさうな。とにかく「あそび」は、各所に存在してゐたのだ。

その三、くぐつ

諸國の陸路を漂々として流して歩く「あそびめ」の一種に「くぐつ」と云ふのがあつた。「くぐつ」は漢語では傀儡子だ。『遊女記』を書いた大江匡房は、また『傀儡子記』をものしてゐる。それは前者と同樣に七六づかしい漢文だから、なるべく平たく書き改めると大體次のやう。

――くぐつには定まつた家がない。テント住居をしながら水草を逐つて流れ歩いて行く。その樣子は頗る北狄（蒙古人）の風俗に似てゐる。男は皆弓馬を習ひ、狩獵を事とする。或は双劍を跳ね上げ、匕を弄び、また木人（人形）を舞はし、桃梗（これも人形）を鬪はせて、まるで生きた人間のやうにあつかふ。或は沙石を變じて金錢となし、草木を化して鳥獸となし、人目を驚かす。女は樣々のメークアップよろしくあつて、みだらな歌を歌ひ、淫樂の友として媚びを賣る。親も亭主もそれを一向苦にしない。行人旅客と逢つて一夜の佳會をなすことも敢て辭しない。客は可愛さの餘り、千金でも與へる。そこで、錦繡の衣類から、金のかんざし裝身具の類まで、何でもかでも持たぬものはない。彼等は一畝の田も耕さず、一枝の桑も採らない者で、縣官の支配を受けないから、土民ではなく流浪の民だ。上に王公のあるを知らず、少しも地方の役人を恐れない。課役もないので、一生を安樂に暮してゐる。夜は百神を祭り、太鼓をたゝき踊り騒いで神の助けを祈る。東國の美濃、三河、遠江などのやからが最も豪貴なもので、山陽の播磨、山陰の但馬などのやからがその次、西海（九州）のやからは最下等とされてゐる。名高いくぐつ（あそびめ）には、小三、

百三、千載、萬歳、小君、孫君などがある。何れも歌舞に妙を得て音聲いとも美しく、聞く者感に堪えざるものがある。今様、古川様、足柄、竹下、催馬樂、里鳥子、田歌、神歌、掉歌、辻歌、滿周、風俗、咒師、別法士の類、何でもやる。これも天下の一物だ。誰か哀れをもやうさぬものがあらう——

これで見ると、くゞつは「山窩」の類だ。男は後世の所謂「くゞつ」(街頭の人形舞し)で、女も地方巡行の「あそび」だ。前節で述べた諸國陸路の「あそび」の中には、この種の女が多かつたのだらう。『更級日記』の「足柄のあそびども」や「野上のあそびども」は、恐らくこれに違ひなからう。

平安詩人はくゞつを賦してゐる。今その一例として藤原茂明の「傀儡子」の詩を擧げて置く。

名を傀儡と稱す何方に有らん、逆旅身を寄するに思ひ遑あらず。
郊外居を移して空處なく、驅中色を衒ひ專ら房を慕ふ。
櫻桃春雨まさに艶を貪らんとし、蘭薫秋風と粧を比べんと欲す。
綠野、草深うして邑里をなし、鏡山一月冷うして家鄉を卜す。
倡歌數曲、生計を充し、微嬖一宵、客腸を蕩かす。

其れ奈んぞ穹廬年暮るゝの後、容華變じ去つて心を傷ましむ。

○

『麓の色』(明和板)は、「くゞつ」の爲にも一項を設けてゐる。

——遊女をくゞつと呼ぶは「くゞつ」卽ち傀儡なり。古は傀儡子遊女の形を木偶に作りて舞しける故、これに因つて異名となれり。(かやうな傀儡師もあつたさうだが、匡房の記を見れば、この語原說は誤りらしい)。和歌の撰集にも、傀儡、河傀、傀儡、傀儡侍、從傀、傀儡摩などゝあり、そして、尙次のやうなことを叙べてゐる。

「くゞつに寄する戀の歌」といふのがある。

また結ぶ契りも知らで消えかへる、野上の露のしのゝめの空

『藻鹽草』に、「傀儡は陸地のあそびものなり、異名をおほよそ鳥といふ」とある。

あはれなる「おほよそ鳥」の心すら、月夜となればさ迷ひ歩りくなり

野上の里、萱津の原、鏡山、大井川などはみなくゞつの在所である。

大井川、岸の苫屋の竹柱、憂かりしふしや、かぎりなりけん

たのむなり、あさけ神しもぬさはせん、君が心や我れになびくと

『無名抄』に「加賀のくゞつ共、俊頼朝臣の歌をうたひける」とある。定家卿の歌に、

ひと夜かす野上の里の草まくら、むすびすてたる人のちぎりを

季經朝臣の歌に

うかれめの、うかれて歩りく旅やかた、住みつき難きものにぞありける

野上の遊女花子のやうに、己が家で客を慰める一夜妻をくゞつと呼んだのだらう。花子のことは謡物にも出てゐる。しかし吉田少將惟定といふ人（花子の物語に出てゐる人か）は、吉田の家系にはないさうだ。大方僞作の類だらう――

これを見れば、くゞつは旅ゆく人を、野や川原のいぶせき苫屋へむかへて、一夜の歡快を與へもしたと見える。

三、遊女名稱考

源順朝臣の『和名抄』には、遊女の和名を宇加禮女、または阿曾比としてゐる。これによつて、少くも平安時代から源平、鎌倉の初期頃までは、所謂賣笑婦を、概して、うかれめまたはあそびと呼んだことが知れる。

「六百番歌合」といふにも、「うかれめのうかれて歩りく旅すがた……」といふ歌があるさうだ。「うかれ」とは「心うかるゝ」の意で、「うかれめ」は「うきたる女」、「浮かれ戯れる女」といふこと。後世の所謂「浮氣女」、「浮氣稼業の女」などと同じだ。

處が、小野小町の歌（後拾遺集）に、

心から浮きたる舟にのりそひて、ひと日も波にぬれぬ日ぞなき

といふのがある。こんなのを淺薄に解釋して、水邊の遊女の水に浮く光景から「浮かれ女」（浮んでゐる女の意）といふ言葉が生れたのであらうなどゝ云ふ者がある。しかしこれは事實ではない。漂々として水に浮く遊女と、「うかれめ」といふ言葉とを一種の言葉合にして、洒落として用ひた事實はあつたらう。それにしても、男共が「うきうき」と朗らかにしてゐる遊女達の外觀を見て、「うかれめ」と稱し、浮氣な女と感じてゐる際に、流石小町は女だけに、「心から浮きたる」やうに見える女達を、「ひと日もぬれぬ日」さへなく、「世の荒波」にもまれぬ日もないせつなさに、涙の袖の「ぬれぬ日ぞなき」哀れな女だと想像して同情してゐる。

次に「あそび」は「遊び」であつて、遊樂を意味し、エンジョイすることだ。

さうした遊びにも色々ある。童兒の嬉戯もあそびであるし、烏鷺を戰はし、麻雀を弄び、或はカルタの類をいじるのも、やつぱり遊びだ。山に登り、川に糸をたれるのも、今日では立派に遊びにまで進化してゐる。平安の貴人は、花の朝、月の夕べに詩歌管絃を弄んで宴遊にふけつた。これも遊びだ。要するに「遊び」は心慰さむわざだ。心理學者は、遊び（遊戯）の純粋なものは、何等の目的意識なく、單にそれ自身に興味を感じてエンジョイするものだとしてゐる。處で、往古の大宮人たちは、遊宴、遊樂をその最も純粋な「遊び」と號してエンジョイした。しかしそれには、男も女も、やつぱり異性がゐなくては物足りなく思つてゐた。意識的にしても、また單に本能的な無意識的なものであつても、それにはエロ氣といふ目的意識があつた。とにかく、大宮人たちは、宴遊を「あそび」と云つてゐた。そして野郎ばかりで遊樂する時には、いや女の加はつてゐる時さへも、遊樂宴遊の興をより多くするために、遊女を召したのだつた。

遊女はまた、敢て招かれなくても、或は旅船に押しかけ、或は陸路の旅人を物色しては、一席の歡興を賞らうとした。しかしそれも、要するに「あそび」の興を助けるためだつた。

かうして、當年の「あそび」に、この種の女が必具のものとなるに至つて、「遊びに招く女」、「あそびの興を添へる女」を、「あそびめ」と稱するやうになり、略して「あそび」と呼ぶやうになつたのだ。

後世でも、そのかみの傳統を傳へて、遊蕩することを「遊ぶ」といふ。殊に花柳界ではより狹義に、かの一事に及ぶことを遊ぶと稱するやうにさへなつた。江戸時代の末に多く出來た「あそび繪」なんて稱するものは、男女の秘戯を「あそび」と呼んでゐるのだ。かくて、「なぐさむ」、「弄ぶ」などいふ言葉が、女を淫樂の犠牲に供する意を表すものとして用ひられるやうになつた。

○

平安朝期の女流文人の書いた物語類――源氏物語を初めとして、榮華物語、更級日記などは云ふまでもなく、その他のものにも、「あそび」なる遊女のことが色々な形で書かれてゐる。

處で、それ等のものを見ると、「あそび」は彼女等の不倶戴天の仇であるにも拘らず、それ等をこつぴどくやつつけてゐないばかりか、屢々あそびどもの歌聲の美くしさや、舞姿のいみじく美しいさまを讃美してゐる。當年のあそびどもは、職業的聲樂家であり、一個の即興詩人であり、舞踊家であり、また管絃の技に長ずる音樂家であつたのだ。敢て、性的享樂の伴侶たることを峻拒するやうなことはなかつたであらうけれど、その主とする處は、一種の藝術家としてまた旅藝人としての藝であつた。後世の、ひたすら肉によつて生命線を護つてゐる遊女たちとは、そのプライドに於て、

社會的存在意義並に地位に於て、且つその素性に於て著しく相違してゐた。

これを後世の遊女に譬へれば、江戸時代中期の、完全に自前であつた藝者は大體これに似てゐる。たゞ、昔の遊女が、多くはレッキとした素性や地位をもつてゐたのに比して、それ等の紅裙諸孃は多く裏長家の貧乏親爺の娘で、しがない女であつた點が違ふ——。とにかく、當年の遊女たちは、平安京の貴族の宴遊にサービスガールとして出て、彼氏らに愛相をつかされない程度の教養と心意氣とをもつてゐた。そしてまた、上流の淑女（女房）に伍しても、敢て見劣りのしない程度のものだつた。

尤も、何事によらずピンからキリまであるものだ。彼女等のすべてが、さうした高級なものであつたか否かは保證の限りではない。

○

「あそび」は大抵「あそびども」と書かれてゐる。物語類などに現はれた處を見ても、大抵幾人かで連合軍を組織して押し寄せるか、ボートレースよろしくの體で、吾れこそ第一着にと競爭しながら押し寄せてゐる。そこで、「あそびども」と複數にしたのであらう。しかし後世「女郎衆」といひ、また「藝者衆」と呼んで、その種の女の一般的稱呼としてゐるのと同じ用法かも知れない。

○

また『宇津保物語』には「あそびめ」と書いてある。「遊女」と書いて「あそびめと讀ましてあるものもある。「あそびめ」については重ねて註釋を加へる必要はないが、「遊女」の文字については、多少の駁說を必要とする

遊女とは、萬葉集に所謂「遊行女婦」を略して用ひたのだ、といふ說がある。或は然らん。しかし「あそびめ」を漢字に當てゝ、遊女と書いたと簡單に考へてよからうではないか。一說に、人生を無爲に「遊び暮す女」だから遊女といふ、とあるが、何れこれは道學先生の牽强附會になる愚說であらう。支那では夙に遊女を「遊女」と稱してゐた事實があるから、これが舶載して日本でも遊女と稱したのかも知れない。

處でこれにも水邊の遊女が問題を提起してゐる。遊女とは「水邊を遊行する女」なるが故に稱したので、正しくは游女と書くべきだといふのだ。つまらぬことを云ふ奴は、表面を游がせずに水の中にむぐらして置けばよろしい。

遊女をまた、「あそびもの」と書いたものがある。『住吉物語』には、「河尻を過ぐれば、あそびものども數多船に乘りつぎて」とあるし、『大鏡』には「亭子院の河尻に在しましゝに、しろと云ふあ

そびものを召して御覽じなどせさて給ひて」とある。源平時代以後は「あそびもの」といふのが習慣であつたのか、『平家物語』の佛御前が入道の邸へ推參した時にも、清盛は「あそびものは人の召しに隨つてこそ參れ」と怒鳴つてゐるし、『增鏡』は賴朝上洛の狀を叙して、「建久の初めつかた都にのぼる。その勢のいかめしき事いへば更なり。道すがら、あそびものどもまゐる」、と書いてある。

源平時代

一、白拍子

その一、白拍子の變遷

『徒然草』第二百二十五段に、「多の久資（樂人）が申しけるは、通憲入道（平治の亂に有名な藤原信西）舞の手の中に興あることどもを擇びて、磯の禪師といひける女（靜御前の母）に教へて舞はせけり。白き水干に鞘卷をさゝせ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞいひける。これ白拍子の根源なり。佛神の本緣（由緣緣起）を歌ふ。その後、源光行多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に敎へさせ給ひけるとぞ。」とある。龜菊は後鳥羽上皇の殊寵を受けた舞姫だ。

兼好法師はかく磯の禪師を白拍子の始祖としてゐるが、しかし彼女よりも遙か前から、既に白拍子は存在してゐたのだ。

これより先、鳥羽院の頃、和歌ノ前、島の千歲などと云ふ双びなき舞の上手があつた。和歌ノ前はまた若御前とも書き、その頃管絃の妙手と謳はれた京極太政大臣家輔の女で、父の遺傳を受けたセイか、いみじくも箏をならした。箏ばかりでなく、歌舞も頗る名人だつた。そこで鳥羽院のお召

しを受けて、一曲天覽に入れた。和歌ノ前といふ名は、その時賜つたのだ。彼女はこの時、男裝をして御前に出た。これが白拍子男舞なるものが史上に出現した初めだ。

白拍子舞を完成したのは、和歌ノ前と島の千歳との二女とされてゐる。しかしその頃は單に男舞と云つた。當時少年の用ひた白い水干を着て、白の鞘卷の刀を差し、立烏帽子を冠つて、朗詠集にある詩歌などを朗詠しながら、扇をもつて活潑に優美に舞ふのだつた。美少女の男裝の舞は、いと好もしいものに思はれて、間もなく、當時全盛の田樂と共に大流行だつた。

○

一體、鳥羽院の頃は朝臣の風俗が愈々柔弱になつた時代だ。一般の史書にもあるやうに、男子までが眉を落して齒を染め、白粉を塗り、紅をつけた。それまでは糊の入つたシャンとした衣類をつけてゐたのが、柔らかくしなしなしたのでなくては優美でないと云ふことになつた。朝臣ばかりでなく、當時ひたすら顯官に取り入つて僅かに幅をきかしてゐた武士までが、朝臣たちに少しでも輕蔑されないやうにと、さうした柔弱な風を眞似て、モダンぶつた。凡そ男が女性化する時、女が男性的風姿をして意氣揚々たることが先端的な流行となる。昭和の今日に於て然り、昔とても人情に變りはない。柔弱な男ほど、女のお轉婆であられもない處に、いやにイットを感じるらしい。處が女は、男が好いてちやほやすれば、それが何より嬉しいので、勇敢なめろは早速男のやうなことをして得意になる。女を女らしくあらせる爲には、先づ男が男らしくあることが先決問題なんだ。

さて、京洛の士民は愈々柔弱になり、華奢を好み、管絃舞樂は益々流行した。平安の盛時を元祿の豪華時代に譬へれば、この頃はまさに文化文政のやうな纖麗巧緻の時代だつた。そのかみの、のんびりとした、花の朝月の夕べに宴遊して、榮華を競ふた朝臣たちの享樂趣味は、より感覺的な、肉慾的なものへと進んで行つた。これは社會の行詰つた、所謂頽廢時代に現はれる現象だ。一大變革の待望されつゝある社會の他の一面に見られる病狀だ。かくて、以前には卑俗なものとして上流社會に顧みられなかつた田樂が、貴族の間に新流行を生み、同時に美少女の新鮮活潑なイットが大歡迎を受けたのだ。

男舞の舞姫は、初期には和歌の前を初めとして名門の子女であつた。彼女等は、藝の至妙を誇つて高貴の人々にお目にかけたが、エロを賣らうなどゝ卑賤なことは考へなかつた。しかし男舞の流行は、自然男共をエロティックに昂奮させて、「何とかならぬものか」と思はせた。要求ある處、新な途が開ける。男舞が次第に職業化するに從つて、つい誘惑に打勝てない女も續出したらうし、それを目當てに代償を得んとするあさましいのも殖えた。かうして、男舞の舞姫は、漸次に所謂「遊

女」と化して行つた。

○

保元、平治の頃になると、もう男舞の舞姫は、難波津の芦間に浮ぶうかれ女と全く同性質のものになつてゐた。お客の方も、江口あたりの遊女を船の近くに寄せて、ほのあかりに舞姿を眺め、夜空に澄み上るいゝ聲に聞きほれるなどゞ云ふやうな悠長なことはしてゐなくて、公卿官人も武士たちも、舞姫を舘に呼び寄せて、夜つぴてしつゝこく愛撫せねば滿足しないやうになつた。

そのうちに、平家にあらざれば人に非ざる時代になつた。清盛を初めとして、老ひたるも若きも、平家は俄成金の心持で、大いに新流行男舞の舞姫たちをやつつけた。平家全盛時代に於ける彼氏等の遊蕩ぶりは、とても大宮人輩の企て及ぶ所ではなかつた。戀歌で女をとろりとさせるよりは、熱情と力とで女をものにしやうとした。たゞ京洛人士の傳統として、歌を用ひ、熱意をこめた文を書く者もあつた。

平相國時代の舞姫は、立烏帽子も鞘卷の刀もさらりとやめて、たゞ白の水干に袴ばかりをつけて、皷、笛、銅鈸子の拍子に合せて、今樣を謠ひながら舞ふのだつた。その水干の白と、囃子の拍子とを合せて、白拍子と呼ぶやうになつた。(尤もこの名の起りについては多少の異說はある)。白拍子の男裝は、かやうにして軟化した。しかしそれは支配階級の男子が男性的な平家の武士となつたからだ。とてもニヤケタ女の男裝などは、見ちやゐられなくなつて來たからだ。

處で、平相國以下、平家の公達が時を得顏に京洛の天地で華やかに宴遊に耽り、白拍子をこよなく愛するやうになると、諸國から、見目美しく、歌を詠み、然もいゝ聲で唄ふことが出來、舞も上手であるといふ娘達は、競ふて京へ上つて來て、諸卿諸公達の見參に入つて、あわよくば名聲を博し、一朝にして玉の輿に乘らんものと心掛けた。自然、京洛の白拍子は、日々にその數をました。そして彼女等は、敢て招かれなくとも、名士名門の邸へ押しかけて「見參に入りたい」と談判を試みるのだつた。『平家物語』の佛御前が淸盛を襲擊したくだりを見ればその狀がよく分る。

その二、祇王と佛御前

平相國時代の最も著名な白拍子は、『平家物語』に出てゐる祇王と佛御前だ。

その頃都に聞えた白拍子の上手に、祇王、祇女といふ二人の姉妹があつた。「とぢ」と云ふ白拍子の娘であつた。姉の祇女が入道相國にいたく愛せられたので、妹の祇女も世の人にもてはやされ、母のとぢも、立派な家を造つて貰つて、毎月米百石に錢百貫目を送られたから、家內は富貴に樂し

く暮すことが出來た。京中の白拍子どもは、祇王の仕合せを見て、羨む者もあれば、嫉む者もあつた。羨む者は、「ほんとに祇王御前は仕合せですわ。同じ遊び女になつたからには誰もあんなになりたいわねェ。きつとこれは祇といふ目出度い文字を名につけたからよ。私達も附けませうよ」てんで、或る女は祇一とつけ、或る女は祇二と名乘り、また祇福、祇德など〻改名する女もあつた。嫉む女たちは、「へん、名や文字に關係があるもんか。あれはたゞ前世の生れ合せがよかつたゞけだよ。祇王なんぞが何ですかッてんだ！」など〻云つてくやしがるのだつた。

——彼女等は、近江の國野洲郡江部の庄（今は祇王村）の江部九郎時久の娘であつた。父は平家の家來であつたが、熊野の合戰に討死したので、とぢ未亡人は幼い姉妹を抱いて涙に暮れねばならなかつた。しかし二人の娘は、成長するに從つて、極めて母思ひで、至孝至純、ひたすら母を勞つた。やがて母子三人は京へ上り、堀川に住んで、娘二人は白拍子になつた。

或る日祇王は、石清水へ參詣をして居つた。その途中、清盛が牛車でドライヴしてゐるのに會つた。祇王の美しい姿を見た清盛入道は、直ちに家來に命じて、彼女を我が館へ連れ込ませようとした。祇王はこの頃頻々と行はれる暴行監禁の沙汰を知つてゐたから、「いけませんわ。よして下さい。お母さんが病氣なんですから。今日はとてもお伴出來ませんわ。よしてよう、アレ、いけませんたら」ッて、やつと虎口を逃れた。しかし、結局は逃れることが出來なかつた。

やがて祇王は、一人では危險と思つたから、妹の祇女と、三人の弟子とを用心につれて、西八條の入道の邸へ上つた。入道は、祇王の「紅顏いろ鮮かにして白粉媚を作り、容貌しなこまやかにして蘭麝の匂ひなつかし」、風情に愈々イツトを感ずるのだつた。さて、舞を所望された祇王は、

蓬萊山には千歲ふる、萬歲千秋重なれり。松の枝には鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ。

と、い〻聲でなごやかに歌つて、仙女の袖も妙なる風情で舞つた。

終りもはてず入道は祇王を引つさらい、別間に入つて暴行を加へた上、監禁して仕まつた。しかし、大事にして呉れて、然るべく道を立て〻呉れたので、祇王を初め一同は大へん滿足であつた。

祇王はなか〳〵感心な娘だつた。清盛は、祇王が可愛くてたまらず、或る時、「お前の望みなら何でも即座にかなへてやるよ」と云ひながらヤニ ニタ〳〵笑つてゐた。「ほんと？　ではお願ひするわ」ッてなわけで、彼女が云ひ出した話と云ふのは、「日本一大きなダイヤの指輪を買つてよウ」なんぞでは斷じてなかつた。「私の鄕里は水が少なくて困るのよ。旱魃の時には近在近鄕みな稻が枯れて仕まふの、あれでは百姓が可哀さうだと思ふわ、あなた何とかならない？」と云ふのだつた。「よし、俺がきつと何とかしてやる」と云つて出來たのが今も殘る「妓王涌」なる大用水だ。清盛は直

ちに命じて工を起し、野洲川の川水を引いて、江部、北村、永原三村の間に水路を通じ、水利の便を計つた。その爲にその地の田園は潤ひ、餘澤は附近數ケ村にも及んだ。村民たちは彼女の情に感激して、後に追善のため一寺を建立して祇王寺と名づけた。今では村の名さへも祇王村といふ。

かうして三年たつた。この頃また京都で全盛を謳はれる白拍子が現はれた。加賀の國から上つて來たもので、名を佛と云ひ、年はやつと十六であつた。「昔から隨分澤山の白拍子はあつたが、これほどの舞はまだ見たことがない」と京洛の上下に評判されてゐた。佛は、「もう私の名は天下に聞えたし、申分はないわけなんだけど、あれ程榮えてゐる平家の太政入道殿へまだ召されないことだけが殘念だわ。さうだ、どうせ遊びものゝ習ひ、構ふものか推しかけて行つて見ませう」と、或る日、西八條の相國の邸へやつて來た。

取次の者が清盛の處へやつて來て、

「この頃都に評判の佛御前が參つて居ります。」

「何だと。遊びものは人の召に從つて參ればよい。自分から押かけて來るなんて生意氣な。祇王のゐる處へは神でも佛でも來ることは許さぬ、早く歸れと申せ。」

取次は出て行つた。すると、側にゐた祇王が入道へ云つた。

「遊び者の推參いたしますのは普通のことでございます。まだ年も若いのに、折角思ひ立つてやつて來てすげなく仰せられては、可哀さうでございますわ、きつと恥かしう情なう思つてゐませう。自分も昔は白拍子でございますし、人事ではないやうな氣が致しますわ。ね、舞を御覽になつたり、歌をおきゝになつたりなさらなくても、せめて御對面だけしておやり遊ばせ。」

「それじや、お前の言ふことだし、會ふだけ會つてやらう」

と、追つかけてその由を傳へさせた。

佛御前は、取次からすげなく斷られて、仕方なく車に乘つて出ようとしてゐたが、會つてやると云ふ返事でまた立戻つて來た。

清盛は、「今日の見參はならぬ筈だつたが、祇王がしきりにすゝめるから會つてやるのだぞ。しかし折角會つてやるからには、聲なりと聞いてやらずばなるまい。今樣でも一つ歌へ」。

「承知いたしました」。

君を初めて見るをりは、千代もへぬべき姫小松
御前の池なる龜岡に、鶴こそ群れゐて遊ぶめれ

推し返し〳〵三返歌つた。その何とも云へぬいゝ聲に、並ゐる人々は皆耳口を驚かしてゐる。入

道も興を覺えて、

「我御前はなか〳〵今様がうまい。この分だと舞もきつと上手だらう。一番見てやらう。オイ、誰か鼓を打て」

佛御前は、髪、貌は勿論、姿が美しく、聲がよく、節も上手だから、舞とても下手な筈がない。心も及ばず舞ひすました。――その優容たるや、「髪長くして色白く、形こまやかにして媚多く、楊貴妃が花の眼、李夫人が蓮の睫、夏野の萩の風に靡く有樣、翠の山に月の出る裝、琳袖として花の袖ひるがへりて彩雲の翠の嶺を廻るが如し、絢袂と繡物の袂ひらめきて碧浪の蒼濱にたゝめるに似たり」だの、「情を柳髪の色に染むれば春の思ひ亂れ易く、心を蘭室の手に移せば、秋の露しば〳〵もろし。綠のまゆずみ、花の形、繪に書くとも筆に及びがたし」など〻一本には形容してある――

そこで入道相國、忽ち佛に心を移した。

「あれ、いけません。あゝ何をなされます。お待ち下さいませ。私は推參の者、お斷りされましたのを祇王御前のおとりなしで召返されましたのに、そんなことを遊ばしては、私が祇王御前へ恥しうございます。もうお暇を下さいませ」。

「いゝやならぬ。平相國が嫌だと申すか。但しは祇王のあるを憚るか。その儀ならば祇王を出してやる」。

「それはまた。私、どう致しませう。祇王御前と御一緒に召置かれましてもすまないと存じますのに、祇王御前をお出し遊ばすなんぞ。またお召しがあれば參ります。今日はどうぞお暇を下さいませ」。「いゝや、相成らぬ」と、太政入道はジタバタする奴を横抱きにして、帳台の中へ連れ込んで、簾を下して仕まつた。

○

かうして祇王は、一刻も舘へ居れない身となつた。暴慢な權門に寄生する身が、何時かはかやうな運命に陷るであらうことは、祇王もかねて覺悟してゐる處であつたが、さすがに今日突如、こんなことにならうとは、思ひもよらなかつた。「早く出て行け」と頻りに催促されるので、後で見苦しくないやうに、我が部屋を掃き清め、塵一つないやうにして、愈々出て行かうとした。が、流石に三年の間住み馴れた處を出るとなると、なか〳〵に名殘も惜しく、また佛のことを思へば口惜しく、かひなき涙に暮れるのであつた。

「こんなことではいけない」と、心を取り直し、出ようとする時に、せめて後の形見、せめてもの佛への面當てにと、筆をとつて障子に一首書きつけた。

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、何れか秋にあはではつべき

車に乘つて家に歸ると、障子をあけて內へ倒れ込んだ祇王は、ワーッとそこへ泣き伏して仕まつた。母と妹とが驚いて馳けて來て、「どうしたの、どうしたの」と聞けば益々泣入るだけだつた。お伴をして來た女に尋ねて、やつと事情を知つた二人も、また一緒になつて泣くのだつた。

それからは、毎月送られてゐた百石百貫もぱつたり止んだ。そして佛御前のゆかりの者共が、樂しく榮えて行くのだつた。

「祇王が入道から追ん出されたさうな」、忽ち京中の評判になつた。嫉んでゐた者は、「それ見たことか、いゝ氣味だ」と喜ぶし、浮れ男は「祇王を呼んで遊ぶか」、「一つものにして見るか」などと文をやつたり使を出したりした。しかし祇王は今更人に會はせる顏もなく、呼ばれても行かず、文を吳れても貰はうとしなくて、毎日泣き暮してゐた。

その年は暮れて、翌る春となつた。清盛から祇王の許へ使が來て、「その後は如何に暮してゐるか。佛御前がこの頃所在なくて困つてゐる樣子だから、參つて、今樣を歌つたり舞をしたりして慰めてやれ」との命令を傳へた。祇王は何とも返事をしなかつた。するとまた入道から使が來て、「なぜ返事をせぬ。參らぬ氣か。參らぬならそのやうに申せ、こちらにも考へがあるから」と云つて去つた。

母のとぢはこれを聞いて、どうなることかと心配した。「何とか返事をおし、あんなに叱られるぢやありませんか」。「參るのなら返事も出來ますが、參らぬのに返事の仕やうがありませんわ。あゝ云つて來たんですから、參らなかつたらきつと、都の外へ追出されるか、さもなければ命を取る氣でせう。どちらだつて構はない、私、あんなひどい人に二度と會ひたくないわ」と尙も返事をしようとは仕なかつた。母は愈々心配で、「今の世に生きてゐれば、どうしても入道殿の仰せに從はぬわけに行きません。お前は出されたことをひどく氣にしてゐるが、男と女の仲は仕方のない宿世の緣で、千年萬年と契り合つても離れねばならないことだつてあるし、分れたい〳〵と思ひながら離れられぬ者もあるし、思ふやうにはならないものだよ。お前などは、三年も可愛がられたんだから、まあ、情愛のあつたうちだ。お召に應じて命を取られることもあるまいから、いやでもあらうが行つてお吳れ。ね。お前達は若いから、どんな處でも住めやうが、私などは年寄だから今都を追はれては困る、どうぞお母さんを都へ住ませてお吳れ。これが今生の孝行だと有り難く思ふよ」。かう云はれると、祇王もいやとは云へなかつた。

「私、とても一人では行けない」といふので、妹の祇女と、外に二人の白拍子が一所の車に乘つ

て、西八條の邸へ行つた。

處が、通例の座り場所へは座らせられなくて、遙か下座の端近な處に据えられた。

「これは一體どういふ氣でせう。私に何の過もないのに捨てゝ置きながら、こんな所へ座らすなんて、あんまりですワ」と、言つてやりたくツて〳〵ならないのを、じつと齒をくひしばつて我慢してゐたが、口惜し涙がこぼれるのをどうすることも出來なかつた。

やがて、入道は佛御前以下數多の男女を從へて上座についた。佛御前はこの有樣を見かねて、「何故あんなことをなさいますの、こちらへお召しなさいましよ」といつたが、清盛は、「何いゝよ」。「あまりひどうございますわ、それなら私、あちらへ行つて挨拶して來やうかしら」。「ならぬ」。そこで佛も、じつとしてゐる外はなかつた。

「いかに祇王、その後はどうだ。佛があまりクサ〳〵仕てるやうだから、今樣一つ歌つて聞かせろ」。入道は、祇王の心の內などにはお構ひなく、勝手なことを云つて命ずるのだつた。祇王も、これまで出て來たからには、反抗して見た處で仕方はないとあきらめて、落ちやうとする涙をふいて、さて、心を押し靜め、

佛も昔は凡夫なり、我等も遂には佛なり、

何れも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ、

二邊繰り返して歌つて、せめてもの嫌味を聞かしてやつた。情がこもつてゐるだけに、感に堪えざるものがあつた。佛にはよつぽどこたへたであらう。並ゐる平家の一門、公卿、殿上人、諸太夫、侍に至るまで、祇王の氣持を察し、見事さに打たれて、涙ぐんでゐるものさへあつた。清盛は平氣な顏をして、「時にとつての神妙な申しやう。なか〳〵よく出來た。序に舞も見たいが、今日は用事がある。これからはわざ〳〵召さなくとも折々參つて、今樣を歌つたり舞つたりして佛を慰めてやれ」といつて出て行つた。祇王は返事もせず、涙を押へながら邸を出た。

「母の言付けに背くまいとして、二度目の辛い目を見ましたわ、かうして生きてゐたら、又憂き目に逢ふでせう。いつそ私は身を投げて死にます」、「姉さんが死ぬなら私も一緒に死ぬわ」と話合ひながら姉妹は家へ歸つて來た。母はこれを聞いて、「お前の恨むのも無理はない。そんなことゝも知らずにやつた母が惡かつた。しかし、お前が死ねば妹も死ぬといふし、さうなれば、年とつた母一人では生きて行けないから、私も一緒に身を投げませう。でも、まだ壽命のある親に身を投げさすなんて、親を殺すのと同じことだよ。一體この世は假の宿で、辱めを受けたつて、何でもないが、親殺しの罪をもつて先の世へ行けば、お前達はきつと惡道に落ちるに違ひはない。ア、、どうした

らいゝでせう」と、泣くのであつた。

で、祇王も死ぬのを思ひ止り、「都にゐるからこんな目に逢ふのだ、いつそ都を出て尼にならう」と思ひ定めて、嵯峨野の奥の山里に、柴の庵を引き結んで、ひたすら念佛をした。時に祇王二十一だつた。

妹の祇女は、「一緒に死なう」と思つた程だ。姉の有様を見て、存分世の中がいやになつてもゐるし、花の十九で樣をかへて、姉と一處に後世を願ふことにした。母とぢも、若い娘さへ尼になる世の中に、何で老衰するまで白髪頭を伸ばさねばならぬ必要があらうかと、四十五才で頭を切つて、娘二人と一緒に、一向專念に念佛し、後世を願ふことにした。

かうして、春は逝き、夏もたけ、もう秋風さへ立ち初めた。或る夜、親子三人で念佛してゐる處に、竹の編戸をほと〳〵と叩く者がある。尼共は魂を消した。晝さへ訪う人のない山の中へ、夜訪ね來るとは何ものだらう。まさか人間である筈がない。魔性であらうか。私たちの念佛を妨げる爲にやつて來たのであらうか。魔性のものなら引籠つてゐても押し破つて入つて來るだらう。もしまた佛のお迎へなら、棄て置いてはならない。何でもとにかく、一心に彌陀の本願を信じて名號を稱へてゐれば、間違はあるまいからと、出て見ることにして、三人は一所に、互に戒め合ひながら、暗い庭に降り立つた。

恐る〳〵編戸の外をすかして見れば、何と、若い女が一人しよんぼりと立つてゐるではないか。

「おゥ、そなたは佛御前とお見受けするが。夢だらうか、幻だらうか？」

祇王はそこへ立ちすくんだ。

佛御前は、涙を押へながら云ふのであつた。

「こんなことを申上げては今更らしうございますが、申さねば分りませんから始めから申上げます。初めてお目にかゝつた時も、押かけて斷られましたのを、あなた樣のお取なしで、召し返されました程ですのに、女の不甲斐なさ、押し留められまして何ともなりませんでした。どうぞ許して下さいませ。それから又何時ぞや、お召しの時にお歌ひなさつたこと、障子へお書きになつた歌など思ひ合せて、あなたのお心持はよくお察し致してゐました。それに何時かは私の身の上にも廻つて來ることと思ひまして、幾ら可愛がられましても嬉しいとは思へませんでした。その後、ぜひお目にかゝつて、私の氣持を聞いて頂きたいと思つてゐましたが、ゐらつしやる處がわかりませんので、氣にかゝつてなりませんでした。處がこちらへゐらつしやるといふお噂を聞きましたので、お羨ましく存じまして、幾度もお暇を頂戴したいとお願ひしたのですが、入道殿は聞いて下さいませ

ん。色々思ひ惑ひまして、とう〳〵決心して今日そつと逃げ出して參りました。」

と云ひながら、被つてゐるキヌを取つたのを見れば、なんと、實に青々とした比丘尼頭なのだ。

「かうして參りましたのです。私は何時も、あなたをお姉様のやうに存じ上げて、なつかしがつてゐました。どうぞ日ごろのお憤りを許して下さいませ。許して下さるなら、御一所に念佛さして頂いて、一つハチスの身になりたう存じます。若しどうしても許して下さいませんでしたら、これから何處へでも行つて、どんな苔の上でも松の根でも、倒れ伏しながらでもお念佛をして往生の素懷をとげるつもりでゐます。どうぞ、私の氣持も察して下さいましよ」。

と、云ひ終つて、さめ〴〵と泣くのであつた。

聞く三人も、涙をせきあへぬのだつた。やがて祇王は涙の顏を上げて、

「あなたのお心はよく分りました。そんなことゝは夢にも知らずに、悲しいにつけても、どうかするとあなたを憾めしく思つてゐましたわ。こんな氣持では、幾ら念佛をしても、とても駄目だとなさけなくなることだつてありましたの。でも今夜からは、そんな邪念もすつかりなくなつて、往生疑ひありませんわ。ほんとに私、嬉しいですわ、どうぞお入り下さい。ほんとにあなたにくらべれば、私なんぞ、尼になる位なんでもなかつたのねえ」

と、すつかり意氣投合して仕まつた。時に佛、十七才だつた。

こゝで女は四人になつて、互に競爭で念佛を唱へ、朗らかに彌陀を信じて、やがて、夫々に往生を遂げた。後白河法皇の長講堂の過去帳にも、祇王、祇女、佛、とぢたちの尊靈が、四人睦じく入れられてゐると、『平家物語』は物語つてゐる。

――彼女等が籠つた處は嵯峨の往生院だといふ。それは法然上人の弟子念佛房の草創で、今も現存してゐる。今日の往生院は、彼女等が念佛三昧に入つた處を寺としたもので、一名祇王寺と呼ばれてゐる。

その三、靜御前

○

白拍子の中で、最も有名で、然も後世人から最もなつかしまれてゐるのは、何と云つても靜御前に留めを刺す。それは、單に人氣者義經の愛妾だつたからではない。また彼女が美しかつた爲ばかりではない。彼女の精神に凛然たるものがあつたのと、その義經を慕ふ情が可憐であるのと、及び、彼女の運命が哀切を極めてゐるからだ。

靜の素性については、色々と俗說はあるが、結局分らない。たゞ母が白拍子の大先輩磯の禪師であつたことだけは明瞭だ。傳ふる處によれば、彼女の母は讃岐の國大川郡小磯の人で、靜は二條天皇の永萬元年（西紀一一六五年）淡路の志賀津で生れたと云ふ。しかしこれも確かでない。恐らくそれよりも後に生れたのだらう。

さて、母の禪師は、兼好法師に從へば、藤原通憲入道信西に舞の手のいゝ處だけを敎へられて舞姫となつた。處が靜はそれを見習つて、母よりも藝が上手であつた。で、母の年も漸く盛を過ぎる頃から、自分も白拍子として職業戰線に立つた。

靜と義經の馴れ染めについてもよく分らない。或は高倉天皇の治承三年、源三位頼政が擧兵した前の年に、靜は十五歲で義經にヴアージンを破られ、それ以來義經が慕はしくて〳〵ならなかつたのだと云ふ。また、それから五年の後、元曆元年（壽永三年）義經が木曾義仲を討つ爲に京都へ攻め込んだ時、當時滿都に鳴り響いてゐた靜の名を聞いて、呼んで見た處が、聞きしにまさる美人であつたので、有無を云はさず妾にして仕舞つたのだとも云ふ。まづこの方がほんとだらう。その時靜が幾歲であつたか、慥かなことは分らないが、多分十七であつたらう。

だが、靜と義經との愛の生活は、遂しいものだつた。その年正月、一擧に義仲を討滅した義經は、二月には一の谷で平家を打ち破つた。翌年の二月には、屋島へ出かけた。そして三月の廿四日には、ついに壇の浦で平家を滅亡させたのだ。義經はしみ〴〵靜を愛してゐる暇がたんとはなかつた。當時の武將の習として、義經も幾多の婦女を側に引寄せ、戰陣の暇とても遊女と戲れた。だがしかし彼が最も鍾愛し、都にゐる間常に身邊に置き、且つ最後の如何ともならなくなる時まで連れて廻つたのは、唯一人靜だけだつた。

○

その五月、義經は壇の浦で捕虜にした平家の總大將宗盛父子を具して鎌倉へ下つた。しかし旣に頼朝は義經を忌んで、鎌倉へ入れなかつた。熱涙を込めて送つた腰越狀も、効がなかつた。義經はついに奮然として都へ歸つた。兄弟の仲は全く危險に頻した。果然、同年の冬十月十七日の朝まだき、頼朝の命によつて上洛した土佐房昌俊が、義經を堀川の邸に襲ふた。その時の狀況についても色々傳はつてゐて慥なことは分らないが、前夜、土佐の房上洛の趣を聞いた義經は、何れ何かの企に相違ないと思つたので、土佐の房を有無を云はさず召し寄せて詰問した。昌俊は百方辯疎に力めた擧句、起請文まで書いた。義經はそれで半ば安心し、半ば疑ひをもつたがしかしその夜のうちに襲擊して來やうとも思はなかつたし、來たとて何程のことがあらうぞと、高をくゝつて、武藏

坊以下郎黨を各自の家へ引取らして、堀川の邸には殆んど人がゐなかつた。『義經記』の如きは、義經と靜と、喜三太と女童だけしか居らず、然も靜を相手に遲くまで酒を飲んで、愛撫して、前後も覺えず寢て仕まつてゐたやうに書いてある。

しかし靜は賢い女であつた。「これ程の大事を前に控へながら、これ程に私を愛して下さるのは嬉しいことながら、或はこれが御運の末ではなからうか」と思つた。とにかく樣子を見させようと、秘かに女童を土佐の房の宿所へやつた。けれど、その女は擧動不審のために敵方へ捕へられて拷問にかけられた上、殺されて仕まつた。

使の者が歸つて來ないので、靜は愈々怪しいと思つた。胸騷がして、なか〳〵寢付かなかつた。側には義經が何事も知らずに眠つてゐる。やがてうと〳〵してゐる處に、何となく騷がしい氣配が感じられた。むつくり起上つた靜の耳に遽しい人馬の音が聞えた。すは大事！

靜は判官を搖り動かしながら、

「あなた、あなた、大變です。」

それでも判官は身じろきもしない。

駄目だと思つた靜は、急いで唐櫃の蓋をあけて物の具取り出し、判官の體の上に落しかけた。

「何だ！」

「敵が押し寄せました。早く御用意を！」

「女と云ふ者は仕やうのないものだ。土佐めでも來たんだらう。オーイ、土佐めが來たと云ふぞ！誰か追ツ拂へ！」

「何を仰せられます。侍衆は皆歸へしたではございませんか」

と云ふやうなことで、義經は靜御前の介添で、忽ち物の具で身を堅め、僅かの兵と共に防ぎ戰ふ所に、急を聞いて家來達が馳せ集つたので、事なく土佐房を擊退することが出來たゝといふことになつてゐる。

○

兄弟の不和は炸裂した。義經は叔父行家と連合して賴朝追討の院宣を請け、兵を集めて一擧に鎌倉を攻めんとしたが、すべては徒勞であつた。義經の身は刻々に危險に瀕した。その月の下旬には、もう京都を出奔せねばならなかつた。行家、義經、それに數多の郎黨と、靜以下の多くの女達が從つた。十一月六日には、大物の濱から豐後へ渡海せんとして船に乘つた。しかし疾風のために船が覆りさうなので、これも思ひ止まらねばならなかつた。そしてこゝで一同は分散し、義經はた

だ、靜と、伊豆右衞門尉、堀彌太郎、武藏房辨慶の四人を伴れて流浪を初めた。この時義經は、靜の外の女達を皆すてた。――都より相具しける女房達十餘人、住吉の浦に捨て置きたれば、松の下、砂の上に袴ふみだしき、袖を片敷いて泣き臥したりけるを、住吉の神官共あはれんで、皆京へぞ送りける――と『平家物語』には記されてゐる。

それから義經等は吉野山へまぎれ込んだ。しかし賴朝の手はすでに至る處に及んでゐた。義經は如何とも仕やうがなかつた。そこで、とても女を連れてゐたんでは逃げのびることが出來ないと、終に最後の靜をも都へ歸すことにした。義經は靜に金銀財寶を與へて、二人の雜色（下郎）をつけて雪の中に殘して立去つた。靜は死んでも判官の側を離れたくなかつた。しかし、女の足では後を追ふことも出來なかつた。仕方なく泣く、歩みかぬる雪の中を、たど〳〵しく歩いた。處が雜色は、俄に惡心を起して、靜の金銀財寶を掠奪して、彼女を雪の中に突き離したまゝ、逃げて行つた。

靜は、如何ともすることが出來なかつた。雪の積つた道なき山の中を踏みわゝらひながら、只麓の方へとたどつて行つた。

『東鑑』にこの夜のことが記されてゐる――十一月十七日。豫州（判官）が大和の國吉野山へ籠つたと云ふ風聞があるので、執行（吉野山）は惡僧共を催して毎日山林を探しもとめたけれども、その實證をつかみ得なかつた處が、今夜亥の刻（午後十時）豫州の妾靜が、當山の藤尾から藏王堂へ下つて來た。その樣子が如何にも怪しいので、衆徒がこれを見咎め、相具して執行の坊へ向つた。執行は具に子細を問ふた。靜は曰ふ、私は九郎大夫判官の妾です。大物濱から判官は此の山へ來て、五日間逗留しましたが、衆徒蜂起の風聞がありますので、判官は山伏の姿に替へて逐電して仕まひました。その時私に、と金銀數多呉れたことから以下のことを述べたと。

そこで執行は、彼女を義經搜索のために京都に來てゐる北條時政の許へ送つた。時政は急使を以て事の由を鎌倉へ報じた。同時に、念のために吉野山を探して見よと、軍兵が發遣された。鎌倉からは、靜をこちらへ送れと云つて來た。彼女を詰問したら、義經の行方が分るに相違ないと考へたからだ。

○

翌文治二年の三月一日、靜は京都から送られて鎌倉へ着いた。一人娘の身の上を案じて、母の禪師も一緒に下つて來た。そこで主計充の命によつて、安達新三郎の宅にこれを入れたと『東鑑』に記錄されてゐる。

同六日、靜は呼び出されて尋問された。處がその供述が京都で時政から調べられた時の答と違ふ

と云ふので、愈々怪しいと云ふことになつた。ついで二十二日にも調べられた。靜は「斷然私は知りません」と云ひきつた。それッきり、幾ら聞かれても、知りません、存じませんと云ふだけだつた。賴朝は調べることを諦めて、靜を放免することにきめた。然るに、「靜の腹が大きい」と云ふ者があつた。慥かに靜は姙娠してゐて、もう袖ではかくせぬ六ケ月腹になつてゐた。そこで、賴朝は母子の京都へ歸ることを差し止めた。靜に滅多な子を産ましてはならないからだ。

賴朝の妻政子は、かねて靜が舞の上手であることを噂に聞いてゐた。幸今鎌倉に來てゐるのだから、是非一度見たいと望んだ。幾度か政子は靜に使を出して懇望したが、靜は、その都度「體の具合が惡いから」と云つて謝つた。靜は、姙娠中の大切な體を、若しものことがあつてはいけないと思つてゐた。殊に、以前の白拍子時代ならとにかく、一旦判官殿と相許す仲になつた身が、人の娯みに舞を舞ひなどしては夫の面目にかゝわると思つてゐた。

四月八日のこと、賴朝夫妻は鶴ケ岡八幡宮に參拜して、その序を以て靜を召した。この機會に靜の舞を見ようと考へたのだ。參拜を終へた一同は廻廊に並んで座つた。政子は早速靜に舞を所望した。靜はまたしても、「姙娠中ですから」と云つて斷つた。もう姙娠が人に知れて仕まへば、何も恥かしがる必要はなかつた。それを盾に、斷り切らうとした。しかし政子は、どうしても見せて呉れと懇望して止まなかつた。そこで靜は、吾が夫の名譽のために、かやうな晴がましい所で衆人に顏や姿を晒すことを好まぬと云つた。「でも」、と政子は引かなかつた。「そなたは當時天下に名を知られた舞の上手。はからずも今當鎌倉へ下つてゐるのに、この機を失つてはまた見ることが出來ませぬ。それでは口惜しい、是非見せて下さい」と、切に望んで止まなかつた。

今はもう、靜も辭する言葉がなかつた。やむを得ず、承知した。當年のモダーン紳士、工藤左衞門祐經が皷を打ち、秩父の庄司畠山二郎重忠が、銅拍子を承はつた。やをら立上つた靜は、まづ歌を詠ずるのだつた。

吉野山、峰の白雪ふみわけて、入りにし人のあとぞ戀しき

折返して二度歌つた。賴朝の顏に、サッと不快の表情が浮んだ。靜は一向平氣だつた。やがて一曲歌つて舞ひを舞つた。『東鑑』にも、叛逆人義經の妾である靜の歌舞を激賞して、誠にこれ社壇の壯觀、梁塵も動くかと思はれたとか、聲も姿も絶妙、衆みな感にたへたなどゝ云ふ意味のことを記してゐる。さて、最後に靜は、また和歌を朗詠した。

しづやしづ、しづの苧だ卷くり返し、昔を今になす由もがな

これでは、斷じて夫判官の面目にはかゝわらない。絶世の美人、天下の名妓と謳はれた靜が、こ

れ程惚れて惚れ抜く程、判官殿はいゝ男でございましたと、頼朝初め天下の強者列座の面前で、臆面もなくのろけたやうなものだ。頼朝が不愉快がつたのも無理はない。「八幡宮の寶前にて藝を演ずからには、關東萬歳をこそ祝すべきに、我が面前をも憚らず、謀叛人九郎義經を戀慕する歌を歌ふとは奇ッ怪至極」とブリ〳〵怒つて仕まつた。

この有様を見た政子が、今度は頼朝をなだめねばならなかつた。そしてこれもまた、只では聞いちや居れないやうなものだつた。

「そりやあなたが無理ですよ。ねェあなた、思ひ出して御覽なさい。私たちの昔のことを。あなたが平家の流人になつて、伊豆に埋もれてゐらした頃、ふとしたわけからわたしたちは、契を結びましたわねェ、そして生涯變るまいぞ、エ、決して變りませんと誓を立てましたわね。父が平氏を憚つて、わたし達の戀路を堰かうと致しました時には、わたしはどんなに悲しかつたか知れませんでしたわ。わたしはとう〳〵雨の夜にまぎれて、あなたの處へ馳け込んだぢやありませんか。それから亦あなたが石橋山で兵を擧げなさつてからと云ふものは、わたし獨りで伊豆山に殘されて、心配やら、あなたが戀しいやら、夜もろく〳〵眠れませんでしたわよ。あの時のことを思へば、靜が豫州を戀しがるのは無理でないと思ひますわ。これが反對に、若し靜が豫州を思はないと云ふことになつたら、それこそ靜は恩知らずで、貞女でないことになりますわ。貞女を見て怒るなんて、わたしは女性の立場から不贊成よ。あべこべに讃めておやりなさい」。

かうまくし立てるのを聞いて、流石の靜も顏まけした。頼朝も一寸キマリの悪いやうな顏をして、苦笑しながら、「ウン、やつぱり女でなくては女の氣持は分ンないさ」と云ふことになつて、やがて頼朝は着てゐた卯の花重ねを脱いで、褒美として靜に與へた。

○

靜の美貌は鎌倉でも大評判で、當時のモダンボーイ共は、何とかして口說落さうとしたらしい。『東鑑』にさへその片鱗が現はれてゐる。五月十四日のことだつた。工藤左衞門祐經が御大將で、梶原三郎景茂、千葉平次郎、八田太郎頼重、藤判官代邦通などエロボーイの面々が、若黨などを伴につれて、靜の旅宿へ押しかけ、酒宴を催した。醉の廻るにつれて、皆大いに歌舞音曲を試みて景氣をあげた。いや靜君に鮮かな處をお目にかけては、チラリと横目で、反應や如何にと觀察してゐたのだ。しかし靜は、しよんぼりと座つてゐて一向浮立つ樣子がなかつた。その代り母の禪師が、昔とつた杵づかで、都の手振りを見せてやつた。

一座は、すつかり醉が廻つて、全く亂れて仕まつた。かねて野心をもつてゐる三郎景茂は、頻り

に靜の側に寄つては怪しげな樣子をしてゐた。

昔の人はこれを「艶めかしいことを云つて言ひ寄つた」と申してゐるが、今時の人ならモーションをかけたと云はふ。とにかく色男景茂は、「一體全體女と云ふものは、お上品さうな樣子をしてゐても、……と心得てゐた。體驗に基く浮氣哲學をもつてゐた。靜も今は、若後家同然だ。醉ひ痴れたふりをして、靜御前に寄りかゝつた景茂は、巧に彼女の手をとつてキューッと握りしめ、何のことか分らないが「ね、いゝだらう」と云つた。

トタンに靜が、その手をいやと云ふ程振りきつて、

「エ、汚らはしい。そんなことは人を見てなさい。豫州殿は鎌倉殿の御連枝でござりますぞ。わたしは豫州殿の妻です。世が世であればお前などは、わたしに面會することさへ出來はしません。それに云ひ寄るなどゝは、無禮でありませう」

ハラ〳〵と涙をこぼしながら、景茂を見据えた。景茂は醉もさめはてた樣子で、頻りに、「醉うての戯れ、勘辨して下さい」とあやまつた。並居る連中も、靜の凛然たる態度を見て、急に襟を正した。

○

かう云ふ不愉快な日々が續いたが、それには何の拘りもないやうに、靜のお腹のほふは一日々々と無事に發達して行つた。初め賴朝は、靜が姙娠してゐると知つた時、ゑらい腹立ちで、逆賊の子を生ませることは出來ないから直ちに靜の腹を割いて孕み子を引出せと命じた。しかし諫める者があつたので、とにかくお產のすむまで靜母子を鎌倉に留め置くと云ふことにした。

やがて靜は月滿ちてお產をした。生れた子は、男の子だつた。

『東鑑』閏七月二十九日の記錄にはかう書かれてゐる――庚戌。靜が男の子を產んだ、豫州の息子だ。この期を待つために今まで靜を留め置いたのだ。その父が關東に背き奉つて謀叛を企て逐電したのだから、その子が若し女ならば早速母に與へるが、男子たるに於ては許すわけにいかん。今こそおムツの內にあれ、いかでか將來の怖れとならざらん。そこで未熟の時に命を斷つがよろしからうと云ふことに評議が定まつたのだ。よつて今日、安達新三郎に仰せて、由比ケ濱に棄てさした。これより先、新三郎はお使としてかの赤子を請取らうとしたが、靜はどうしても出さなかつた。衣に纏つて抱いて臥てゐて、「許してよ！」と叫んだり、何事か喚きながら泣いたりして、幾時

間待つても出さなかつた。そこで安達は磯の禪師を叱り付けた。彼女はひどく恐れ入つて、赤子を靜から奪ひ取つてお使に與へた。その樣子を聞いた御臺所（政子）も御愁嘆で、宥してやつて呉れと賴朝公に申上げたが叶はなかつた、と。悲慘極まる。

夫の行方も知れず、唯一のかたみ、最愛のみどり子は、無慘にも由比ヶ濱で殺されて汚物のやうに棄てられた。普通の女なら、氣が狂ふか、產後の肥立が惡くて死ぬかしたゞらう。しかし靜は、さう云ふこともなく、やがて體が平常になつたから、母と共に京都へ歸ることになつた。政子は、お別れに來た靜母子に、心をこめた慰めの言葉を與へたと云ふ。

○

都に歸つた靜はその後どうなつたか。當時の最も正確な日記式記錄である『東鑑』には、鎌倉を立ち退いた靜は都へ歸り、洛外嵯峨の片山里、人跡絕えた庵室に籠つて只管夫の前途を祈り、又我が子の菩提を弔ふたが、幾程もなく歿した、と報告してゐる。時に文治三年の秋の末つ方、靜は二十歲であつたと云ふ。

尙、室町時代に出來た『義經記』の作者は――翌くれば都にとて上りて、北白川の宿所に歸りてあれども、物をもはかゞしく見入れず、憂かりし事の忘れ難ければ、訪ひくる人も物憂しとて、たゞ思入りてぞありける。母の禪師も慰めかねて、いとゞ思ひ深かりける。明け暮「持佛堂」に引きこもり、經を讀み佛の御名を唱へてありけるが、かゝるうき世に長らへても何かせんと思ひけん。母にも知らせず髮を切りて剃りこぼし「天龍寺の麓」に草の庵を引結び、禪師共に行ひすましてぞありける。姿、心、人にすぐれたり。惜しかるべき年ぞかし。十九にて樣をかへ、次の年の秋の暮には、思ひや胸に積りけん、念佛申し往生をぞ遂げにけり。と物語つてゐる。

○

靜の末路については、『東鑑』の外には信ずべき確實な記錄がない。他にもこれぞと云ふ證據物件もないのだ。「いゝやある、色々書いたものがある、また遺跡もあれば、昔からの云ひ傳へもある」など、素人は云ふかも知れないが、それ等は何れも後人の作つたもので、想像によつて書いたものや、意味もなく只面白半分にこしらへたものや、何等かの目的で製造したものやが多いので、物語としてはとにかく、歷史事實としては必ずしも信用していゝか惡いか分らないものだ。今日靜の遺跡だとか或は遺物だとか云つて殘されてゐるものに、或はほんとの物があるかも知れない。しかしそれが、間違のないものだと云ふ確實な證據がない以上は、やゝ信ずるに足る處のものを正しいとして置くより仕方がない。さうなると結局『東鑑』と云ふ鎌倉幕府の書き殘した記錄を眞或は眞に

近いものとして置く外はない。歴史家は、さうした理由によつて、他の各種の異說、書き物や遺跡を、俗說として參考に供するに止めてゐる。實際、名所だの、社寺の寶物だのと云ふもの程あてにならないものはないので、何か少し曰く因緣があれば、早速まことしやかに色々のものを製造して、人寄せやお賽錢集めに使ふのだから、油斷がならない。

處で、俗說の生れるのにも何かの根據がなければならない。てんで問題にならないやうな愚人の傳說や信仰にも、必ずや何かの因緣があるか、誤り傳へられた理由は存在する。(尤も生臭坊主や詐欺師のやうな神官の造つた迷信的なものは別だが。)

そこで、學者の以て俗說とする物も、必ずしも捨て去ることは出來ない。どうかすると、學者が寸分間違ひのないこととしてゐるものが、確かな新事實の發見された爲に却つて俗說と主客を轉倒することだつて、少なからずあるのだ。と云ふわけで、我が國民の共同の戀人、靜御前のために俗說と稱せられてゐるものを擧げて、彼女の靈を慰めやう。

先づ、それ等俗說に共通な一點は、靜は嵯峨の奥で死んではゐないと云ふことだ。今日のインテリなら、せめて靜に、餘念なく義經のことだけを戀ひ焦れさして、ありし日の嬉しい思ひ出に存分ひたらして、義經に會へた夢でも見さして早く嬉しく死なしたいと思ふだらう。しかし、さうした耽美的な感覺をもたない昔の一般人は、せめて靜に長生きでもさせて、平安に往生を遂げさせたかつた。

淡路に殘された傳說によれば、靜は京都で藤原能保に預けられてゐたが、彼の領地が淡路國志筑濱村にあつたのを幸、そこへやつて貰つて、長閑に餘世を送り、順德天皇の建曆元年七月六日、(鎌倉は三代實朝の頃)、四十七歲で往生を遂げたことになつてゐる。今でもその海岸から十町ばかりの山の裾に靜の墓があつて、土地の人々は毎年忌日に香花を手向けて、薄幸の佳人の慰靈を行つてゐるのである。

埼玉縣栗橋在にも靜の墓があり、それにからまる傳說がある。これは靜傳說の中でも最も大がゝりのもので、尤もらしい理由もあり、頗る歴史的由緒もある。『成吉斯汗は源義經也』の著者――蒙古の大英雄、西歐を震憾させ、大帝國を建設し、元の祖となつた成吉成汗こそは奥州から蝦夷に逃れ更に沿海州から大陸に渡つた九郎判官義經に相違ないと、驚くべき熱心と勇氣とを以て、學者の向ふを張つて獅子吼する小谷部全一郎氏は、全幅の信賴を以て、栗橋在の靜の遺跡の眞乃至は眞に近きものなることを力說する。

埼玉縣北葛飾郡栗橋町の西方靜村に靜の墓が現存してゐる。これは享和二年(德川十一代家齊の

頃）關東郡代中川飛驒守が靜の遺跡に建てたもので、「靜女之墓」と記されてゐる。その側には、子爵杉孫七郎題する處の「靜女象碑」と銘する高さ六尺餘りの碑もある。

昔、この近くに高柳寺といふ僧空海開基の由緒の深い古刹があつた。（その後は先年の洪水で流失した爲に、對岸の新郷村中田に移轉してゐる）。平治の亂に義朝が破れて、源氏が殆んど擊滅された時、義朝の弟義廣は、一族の菩提を弔ふために、こゝで僧となり、住持になつた。その後、甥の又太郎國村なるものがやつて來て、剃髮して、弟子となり法燈をついだ。國村はかの多田滿仲（源氏）の後で、父を土岐出羽守光行と云ひ、母は義朝らの姉妹であつた。初めは後鳥羽法皇の禁裏の「北面の武士」だつた。高柳寺はもと眞言宗であつたが、國村がそこの住持になつた後、彼が一向宗（眞宗）に歸依して親鸞の弟子になつてから、眞宗寺になつた。彼は師の僧から西親坊と云ふ法號を貰ひ、寺號も光了寺と改めた。それから現在まで二十五代、源氏の血統が連綿と續き、現住持も姓を土岐と稱してゐる。

そこの寺傳によれば、義經は高野で靜と別れる時、「武州栗橋在の高柳寺に叔父がゐるから、そこへ落ちて行け。叔父には俺の在處を知らして置く」と云つて、後日の再會を約した。靜は鎌倉を立ち退くと、急いで栗橋の高柳寺を訪ねた。そして義廣から義經が奥羽の藤原秀衡に賴つてゐることを聞いた。飛び立つ思ひで、奥州平泉へ下つて行つた。しかし運命は靜に對して餘りに苛酷であつた。彼女は、途中で義經が殺されたことを聞いた。がッかりして高柳寺へ歸つて來て、尼になり、二年の後、文治四年九月十五日こゝで病歿した、となつてゐる。

これでは、愈々靜が可愛さうだ。一度は義經に會へる喜びに胸を躍らしたではあらうが、結局、より悲しい運命を見なければならなかつたのだ。最後の望みであり、そしてセメても安穩であつて呉れと祈つてゐる愛人の、悲慘な最後を聞かされてゐるのだ。彼女に運命がより意地惡であらうとなからうと、それが事實であれば仕方がない。それにしても、これが眞實であるとするならば、何故靜は今一歩奥州へ踏み込まなかつたのだらうか？　たとひ殺されたのが事實であつたとしても、靜の場合は、せめて義經の形見でも見たいと思ひさうなものだ。それを、死んだと聞いて、すぐあきらめて歸るとは、甚だ不思議に思はれる。然も歷史の傳ふる處によれば、義經が秀衡の子泰衡に殺されたのは、靜の死んだと云ふ文治四年の次の年、即ち五年閏四月のことで、靜が奥州に志した時にはまだ生きてゐたことになつてゐる。この辻褄の合はない處はどうなるか？

さもあらばあれ、同寺には靜の遺物だと云ふ後鳥羽天皇恩賜の舞衣その他がある。舞衣は、元の容器が毀れたと云ふので、江戸時代に再製された巾二尺二寸、丈三尺四寸、厚さ三寸五分の桐箱に

收められてゐる。表には白河樂翁公の箱書があり、寛政十二年庚申九月と書かれてゐる。舞衣を包んだ袱は二重になつて、内は中川飛驒守忠英の寄贈、外は奥州佐竹侯の寄贈だと云ふ。なほ、舞衣の織地や刺繍は、確に七百年前のもので、高貴の御料に相違ないと云ふ鑑定附だ。畏くも明治天皇は、德大寺侍從長の奏上で天覽あらせられたと云ふ光榮にも浴してゐる。だが、それが果して靜が後鳥羽天皇から頂戴したものであるか、彼女が此處までもつて來て遺したものであるか、どうかその確證があるかどうかは知らぬ。

二、源平時代の遊女

その一、武將と遊女

戰將と遊女　昨日は叛軍を擊滅せんがために遠征の行路をつゞけ、今日は朝敵に備へんがために都の内外を堅む、と云ふ有樣にあつた戰時の武將たちは、常に家にあつて團欒の樂しみにひたつたり、堂上長袖者流のやうに翠帳紅閨の逸樂に耽つて、營養の補給に日もこれ足らぬと云ふやうな眞似は望み得ない處であつた。しかし、師輔の三人妻、兼家の三妻錐などの話は、彼等にも羨ましい限りのことだつた。そこで彼等は、征戰の間にも到る處の長者（遊女宿の主婦）の宿で遊女に接し、元氣にまかしてツヤ種や子供の胤をまいて歩いた。そのまいた女が至極よかつたとなれば、これを妾に準ずるものとして置いて、「めつたに俺の繩張を人に荒させてはいけないぞ」と云ひ含めるのであつた。また、都には美しい白拍子などを「これも吾輩の所有だぞ」ときめてあつた。

それ等の日にも、吾が國の武將たちは、西歐騎士の十字軍遠征の時などゝは違つて、妻妾の腰部に鋼鐵製の貞操帶を結びつけて出かけると云ふやうな、無慈悲なことはしなかつた。女にしても、彼地の女が、夫が出て仕まへば早速合鍵をこしらへて、不自由な腰の金物を脫ぎすてゝ鬼の留守に命の洗濯をすると云ふやうな眞似は決してしなかつた。また彼地の甲斐性のない女が、夫には戰地で討死されるし、鍵がないので貞操帶ははづすことが出來ぬし、あたら柔い弱い腰を鐵と共に腐らして、とう〳〵哀れな死に樣をせねばならぬと云ふやうな意氣地のないものではなかつた。吾が愛人討死と聞けば、彼女等は直ちに出家して愛人の後世を弔ふことをこの上もない樂しみとした。

とにかく、平安末期の諸國の騷擾や、源平の戰など絶えず繰返されてゐる間、武將たちは諸國で遊女を慰安と歡樂の具に供することに專念したので、自然各地に遊女が出來、名高い君の長者が出現した。（封建君主とも云ふべき住人のゐる地も、自ら遊女を發生させた）。

○

義朝と延壽　源義朝は三十八歳の若さで尾張長田の庄司に殺されるまでの間に、隨分澤山な子女を養殖したが、そのためにはまた少なからぬ腹を借用する必要があつた。例へば長男の惡源太義平と四男の義門とは遠江の橋本の遊女の腹、三男の賴朝は本妻熱田の大宮司藤原季範の女の腹、蒲の冠者範賴は遠江池田の宿の遊女の腹、そして今若、乙若、牛若の三人は常盤御前の腹、その外に朝長、希義（賴朝と同母）義圓などの男子があり、別に數人の女子があるが、少くもその女子の中の一人は江口の遊女の腹で、今一人のものはこゝに記さうとする美濃の國の遊女延壽の腹であつた。さてそれ等の女達の中、常盤御前は誰知らぬ者もないほど有名であるが、これは歴史物語のいゝヒロインながら遊女ではなかつたから省き、『平治物語』に名をとゞめてゐる延壽の君だけを、こゝでは御紹介に及ぶことにする。

延壽は青墓、（美濃の國垂井と赤坂の間）の長者大炊女史の娘で、後の池田の侍從とともに「海道の花」と歌はれる遊女であつた。義朝はこの延壽と逢ひ初めてから「心淺からずして」といふ次第で、二人の中には夜叉御前といふ一人の姫さへ出來たほどだつた。（その子は義朝二十七歳の頃生れた）。當時名ある程の遊女は、安淫賣ではござんせんデスから、誰の子だか分らないやうなものは斷じて生まうとはしなかつた。

平治元年十二月、義朝は藤原信賴と共に、清盛父子の熊野參詣の留守に乘じて兵を擧げた。しかし急遽歸洛した清盛に破られて、哀れ落人となつて東へ逃げた。堅田の浦へ打出で、勢多を指して落ちて來た義朝は、こゝで三浦荒次郎義澄、齋藤別當實盛、岡部六彌太、猪俣小平次、熊谷次郎直實等々二十餘人の勇士と分れ、嫡子惡源太義平、次男中宮太夫進朝長、三男右兵衛佐賴朝、佐渡式部太輔重成、平賀の四郎義信、乳兄弟鎌田兵衛政家、金王丸と、親子四人に郎從四人、都合八騎になつて、青墓の延壽の許をさして、落ちて行くのであつた。處が右兵衛佐賴朝は、心は猛しと云へども今年僅かに十三歳、物の具をつけて日もすがら戰つたので、今は疲れ果てゝ馬上で居睡をしてゐた爲に、一人遲れて仕まつた。折から十二月二十七日の夜も更けた眞暗らやみのことだから、遂しい落人たちはそれに心づかず、とう〳〵離れ〴〵になつて仕まつた。

とかくして、義朝の一行は、青墓の宿についた。大炊の許は年來のやど、十歳になる夜叉御前さへある。母と子と孫は、大喜びで一行を迎へた。

義朝はこゝで今後の策戰をした。義平は中仙道を攻め上れ、朝長は信州へ下り甲斐信濃の源氏を催して上洛せよ、我は海道を攻め上る、と云ふことになつた。即刻二人の子は出發した。が二男の

朝長は途中で怪我をして、伊吹山まで行つたが雪のために大事になつてやりきれないので、間もなく引返して來た。その由を聞いた義朝は、「頼朝は幼いがかやうなことはないぞ、仕方がない、汝暫らくこゝに留れ」と云つた。朝長は恐れ入つて、「こゝに居らば定めて敵に生け捕られませう、一そお手にかけて、心殘りをなくして下さい」。「ウン、汝は不覺の者と思ひしが、流石は義朝の子なりけり、念佛申せ」と太刀を拔いて、既に首を打たんとした。側にゐた延壽と母がその太刀に取りすがり、「幾ら何でもわたしたちの眼の前でそんな」と泣き口説いた。「いや、餘りに臆してゐるから氣合をかけてゐるのだ」と云ひながら義朝は太刀をおさめた。朝長は帳台の中へ入つた。女たちも引きとつた。その後で義朝は、朝長の首を討つて骸に衣を引きかけて置いた。

都にゐた江口腹の娘は、もう鎌田に命じて殺さしてあつた。

朝長は我が手にかけ、姫も殺し、最も見込んでゐる頼朝は行方が知れぬので、義朝も流石に悲しんだ。

かうして、義朝は久方ぶりで延壽としみ〴〵語り合ふのかと思へばさにあらず、「かくてあるべきならねば、やがて立ち出で給ふ」のだつた。セイ〳〵語り合つたにしても一夜さであつたらう。そこで大炊は、娘の心を察して、「こゝでお年を送り、しづかにお下り候へ」と申上げたが、「いやこゝは海道なれば悪しかりぬべし、朝長をば見つぎ給へ」と頼んで出かけようとした。そこへ、もう義朝が來てゐると知つた宿の者共が二三百人も押寄せた。佐渡式部大輔はこの樣を見て、「こゝは重成が討死してお通し申します」と、附近の家に走り入つて馬引出して打ち乘つて、「狼藉なり雜人共」と、大いに奮戰し、さて、「左馬頭義朝自害するぞ、我が手にかけたりなど申すな」と、先づ自ら面の皮を削つて、直ぐに身替りのバレないやうにして腹十文字に搔切つた。重成この時廿九歳。寄せて來た者共は、これを大將と思つて、引取つて行つたから、義朝は夜をまつて青墓の宿をまぎれ出た。

さて、次の朝、夜が明けても朝長が出て來ぬので、大炊は、どうしたことかと行つて見れば前條の有樣、「見つぎ進らせよとはお弔ひ申せと云ふことであつたのか」と、泣く〳〵後の竹藪の中へ葬つた。

義朝は海道をさけて、大炊の弟玄光と云ふ野武士の助を得て、舟で、廿九日にはもう尾張國知多郡野間の内海まで來た。それは、長田の庄司忠宗に寄つて、馬や物の具を用意するためだつた。平賀四郎は「長田は野心家ですから危い」と云つた。しかし義朝は、「鎌田の舅だから大丈夫だらう」と鎌田兵衛、金王丸等と出かけて行つた。そして其處で、義朝は、明くる正月三日、長田父子

に欺かれて殺されたのだ。鎌田もそこで三十八歳で殺された。金王丸と玄光とは、數多の敵を切つて、義朝の敵を取らうとしたが得難いので、馬を引出して逃げて行つた。その家にゐた鎌田の妻は、「我れは女の身なれども全く二心はなきものを、如何に恨めしく思ひ給ふらん。親子の中とは申せども、我もこそ思ひ侍れ、飽かぬ仲には今日までに別れぬ、情なき親に添ふならば、またも憂目を見んずらん、同じ道に具し給へ」と暫くは泣いてゐたが、夫の刀を拔いて胸元に差當て、俯伏しざまに伏したので、心臓を貫いて失せた。父の忠宗は、義朝を討取つたのはこの上もない喜びだつたが、最愛の娘に死なれて悲嘆に暮れた。子の景宗は、義朝の首と鎌田の首を斬取つた上、死骸は一緒にして同じ穴に埋めた。「如何に勳功を望めばとて、相傳の主を討ち、現在の聟を害しける忠宗が所致をば惡まぬ者もなかりけり」と『平治物語』も書いてゐる。

さて、馬上に居睡つてゐた賴朝は、暫くあつて氣がついて見れば、唯一人になつてゐる。道は暗くて先は見えない。仕方がないので、只一騎心細く落ちて行つた。一方、義朝は、篠原堤まで來た時、「若者共は下りぬるか」と聲をかけた。「これに候」と返事があつたが、兵衛佐だけがゐない。「無慙や、落伍した。若しや敵に生捕られたのではあるまいか」と心配した。鎌田兵衛、「探して參りませう」と引返して、「佐殿や、在はさぬか」と大聲に呼ばはつて行くが答へる人もなかつた。

賴朝は、森山の宿にたどりついた宿。の者共は「今夜は馬の足音が頻りに聞える。落人ではあるまいか。引留めて見よう」と數多の人々を繰く出した。中に源内兵衛眞弘と云ふ者、馬に腹卷とつて懸け、長刀もつて走り出る處にパつたり賴朝にあつた。忽ちその馬の口に取付き、「落人をば留め申せと六波羅より仰せ下され候」と抱きつかうとする。賴朝は、髭切丸を拔き打ちに、眞弘を眞二つに打割つた。その打倒れる樣を見て二番目に出た男、「しれ者かな」とまた馬の口に取付く處を、これまた小手を打落されて逃げ出した。その後は恐れて近づく者がない。その隙に賴朝は宿を馳け拔けた。

野洲の河原へ來た時、そこで政家にめぐり逢つた。「お、佐殿」と云ふわけで、二人は打ち連れて、さあ「頭殿（義朝）に追ひ着かう」と、ありし事ども語り合ひながら馬を飛ばした。

鏡の宿を拔け、不破の關は敵が固めてゐるからと、小關にかゝつて、小野の宿から海道を右手にして落ちて行つたが、雪は次第に深くなる、「馬ではとても行けない」、「物の具をつけてゐては却つて惡からう」などゝ、何もかも捨てゝ仕まつた。しかし賴朝は、馬上にあればこそ大人にも劣らず馳けれ、徒歩になつては何ともならぬ。とう〳〵また政家とはぐれて仕まつた。

かうして、廿八日の夜も賴朝は只一人雪の中をさ迷つて、廿九日の曙、小平と云ふ山寺の麓の

里へ迷ひ出た。と、一つの小屋がある、これ幸と近寄れば、男、「可愛さうに、此の山にも落人など籠つてゐやう、しかしこの雪ではとても働けまい、一人でも召捕つて六波羅へ進らすれば、御褒美に預らぬことはよもあるまい」と云つてゐる。「これはいかん」と足に任せて逃げ出し、淺井の北郡に休んでゐる處、を老尼が見付けて家に連れて行つて、爺と一緒に何くれと勞つて呉れた。

かうして正月の終りまで匿はれてゐたが、漸く雪も消えたので、また頼朝は、か弱い足に任して立ち出でた。再び小平の邊りを通つたが、人目を忍ぶ身であるから、道もない谷川に添つて歩いた。それを一人の鵜飼に見付けられた。しかし鵜飼は情ある男で、「人目を忍ぶ御事にこそおはしませ、有りの儘に仰せ候へ、何處へも御志の所へ送りつけ參らせん」と云ふから、ありのまゝに語つた上、「青墓へ行かうと思ふ」と告げた。「それでは、この姿ぢやいけません」と、女の姿に仕立てて、持つた太刀は萱につゝんでその男が持ち、男が女を連れた體にして青墓まで連れて行つて呉れた。

やつと大炊の許へやつて來て「頼朝です」と云へば、延壽一通りの悦びやうではなく、「早うお上りなされませ」と、いそ〳〵と夜叉御前の部屋へ御案内をして、心を盡してもてなして呉れた。

しかし頼朝は、こゝで父や兄の悲しい最後を聞かねばならなかつた。固り遊女の長者の屋形へなど居候をする氣はない。大蛇になるほどの蛇は、三寸にして既に人を呑む概があると云ふ、頼朝も十三歳にしてもう他日を期してゐた。「東國へ下る」と云つて、席暖まる暇もなかつた。延壽たちは、飽かぬ名殘を惜むのであつた。頼朝は、源家の寶刀、髭切丸を、大炊に預けて、束をさして出で立つた。

さうして、間もなく平家に捕へられたのだ。

延壽の娘夜叉御前は、父義朝は非業の最後を遂げ、なつかしい兄頼朝も捕へられたと知つて、「女だとて、義朝の子であるからは、とても逃れるすべはあるまい」と考へたので、一人悲壯の決心をして、杭瀬川に身を投げて死んだ。やつと十一になつたばかりの時だつた。

母の延壽は身も世にない思ひだつた。あれほど可愛がられ、これほど思ひ焦れた殿には敢ない御最後、今は唯一の形見として思ひ慰めてゐた我が命より可愛い〻姫には先立たれ、「エ、、生きてはゐられませぬ」と、同じ流れに身を沈める覺悟をきめ、それでも尚悲しさやるかたなく、泣いてゐる處を母に見咎められて、色々と慰め戒められたので、死ぬことは思ひ止り、尼となつて、一筋に亡き夫と姫との菩提を弔つた。

○

富士川の水鳥　治承四年（西紀一一八〇）頼朝擧兵と聞いた清盛は、怒髪をさか立て、勢のつかぬ間に急いで撚りつぶせと、大將軍小松の少將維盛、副將軍薩摩守忠度等に、三萬餘騎を引きつれさして東へ下らした。

平家の軍勢は富士川の前までやつて來ると、そこに陣をしいて、鎌倉勢の攻め上るのを待ちかけることにしたが、それまでの退窟しのぎに、そのあたり宿々の遊君たちを召集めて、連日連夜、賑かにエロチックに酒宴をつゞけた。

然るに或る夜、何に驚いたか、富士川の水禽が慌てふためいて飛び立つた。醉眼朦朧として、然も鼻下を伸してゐた大將たち、慌たゞしい羽音に吃驚仰天。すは源氏の大軍が攻め寄せたぞ、滅多なことをして死に恥をさらすなと、周章狼狽、弓取る者は矢までは考へて居れず、矢を拾つた奴は弓のことは忘れてゐて、我が馬か人の馬かを見分けるなど〻悠長な暇はなく、ひどい奴は、我が乘る馬が木につながれてゐるのを知らずに只その周圍をくる〳〵乘り廻してゐる、と云ふ有樣だつた。まして、かやうな時に遊君などに構つてはゐられないので、すがりつく奴は突き飛ばし、フラ〳〵して邪魔になる奴は蹴倒し、轉がつてゐる奴は頭を踏みつけて置いて逃げ出した。さて遊君にして見れば、敵軍襲來と聞いては身がすくむ程恐しい。「こわいわよ」と取りすがれば振りはなされ、よろよろする處をブツ倒され、息がとまつたかと思ふ程背中をドヤされて、さて痛い腰をさすりながら逃げ出さうとして居れば後から來た奴にどかんと打ツつけられて四ツン這にされ、そこを顏でも頭でも容赦なく踏みつけて行かれるのだから、たまつたものではない。平家の武士でも、命がけで逃げる時には凄いデス。遊君たちは、髮は亂れ、着物もしどろ。わめき泣き叫んで右往左往出來る奴はい〻方で、頭を蹴破られたもの、腕を踏み折られたもの、腰骨が折れて立ち上れないもの、鼻柱の崩れる程すりむいた者、その他怪我人が隨分多く、それが恐ろしいやら口惜しいやらでわめき立て、全く落花狼藉、目も當てられぬ有樣だつた。

この噂は、忽ち海道に電波の如く廣がつた。そこで宿々の遊女達、逃げて行く平家の武將たちを指さしながら、「あな忌々しき大將軍よな、軍には見逃げをするさへあさましきに、平家の公達は聞き逃げするよ」と口々にの〻しりながら笑つた。

範頼と頼朝　戰爭中に遊女を呼んで遊んでゐたのは平家の武士だけではない。源氏とても同樣だ蒲の冠者源範頼も、平家追討の大將として西に向ふ時、播州室や高砂などに逗留して、遊女を集めて酒宴をやつて、なか〳〵おミコシを上げやうとはしなかつた。範頼の軍がはか〴〵しく行かなかつたのも無理はない。

さて義經は殺され奥羽征伐もすんだ後、建久元年（西紀一一九〇）の冬、鎌倉右大將頼朝は上洛の途についた。その行列の勢盛んなこと、街道の人々目をそば立てるばかりであつた。その十月、遠州橋本の驛に宿つた時、そこの遊女が數多見參に入つた。何でも、かり集めたのだと云ふ評判だ。召すとなればOK！續々集つて來る。花やかに打並んだ遊女たちを眺めやつた頼朝、につこりして、

橋本の君に何をかわたすべき

と、傍にゐる梶原平三景時を顧みながら口ずさんだ、景時すかさず

たゞ柚山のくれで過ぎばや

えらいビジネスライクな歌があつたもんデス。或る書によると、これは、その夜の宴遊の席で連歌をやつた時に詠んだのだと云ふ。景時も本氣で「何も臭れずに行つちまいませう」とケチなことを思つたわけでもなからう。そこに幾分ユーモラスな所もある。

果して頼朝は、馬、鞍、紺しぼりなどを運び出さして、遊女どもに與へて追ひ歸へした。女どもは喜び騒ぎながら歸つて行つた。

その後で、ゆつくり、頼朝公のお情を受けた遊女があつた。どんな女であつたか知らないが、後に頼朝慕じた時、彼女は、操を立てゝ尼となり、妙相と號して一寺を建立し、高野山から御本尊を分けて頂いて、生涯堅固に身を守つたと云ふ。この本尊は今も尚橋本村敎恩寺に殘つてゐる、と文化年間に出來たものゝ本に書いてある。

○

貴盛と千手の前　平三位中將重衡は清盛の五男、夙に豪勇を以て聞えてゐた。治承三年（西紀一一七九）廿四才で源三位頼政を討つて以來、或は尾張の墨股で行家を破り、平家西に走つて後も備中の水島、備前の東川などで源軍を破り、また播磨の室山で再び行家に勝つた。しかし一ノ谷の戰で、生田の森を守つたが、味方破れて遁走する時、須磨の浦で源氏に捕へられた。

後白河法皇は、重衡に、屋島へ行つて、宗盛に三種の神器を奉還させよと命じられた。この使命を果したら助けて平家へ返すと云ふ仰せであつた。處が宗盛は、「神器は常に今上のお側に置かせらるべきもの、安徳天皇こゝに在しますからには、斷じて京都へ送ることは相成らぬ。宗盛は重衡一人に替へる爲に、神器を私にはしない」と斷つた。で、重衡は法皇の使の爲に顔へ烙印を打たれねばならなかつた。義經は、重衡を京都へ送つて、土肥の實平の家に監禁した。重衡は出家の望を法皇へ願ひ出たが許されなかつた。やがて、梶原景時が、頼朝の命によつて重衡を鎌倉へ護送した。

『平家物語』によると、頼朝は直ちに重衡に逢つて、「抑々君（主上）の御憤りをやすめ奉り、父

の恥をすゝがんと思ひ立つたる上からは、平家を滅ぼさん事は瞬く間のことではあるが、まさか平家の大將に會はふとは思ひ設けなんだ。この分では屋島の大臣殿（宗盛）に會ふことになるかも知れぬ。さて、南都を燒討ちしたのは、故太政入道殿（清盛）の指圖でござるか、それとも貴殿の時にとつての計らひであるか」と云つた。重衡は、「故入道の指圖による成敗でもない、また重衡の考に基いたのでもない。衆徒の惡行を淨めんがために赴いた處が、はからずも伽羅が滅亡したので、何とも致し方のないことだ」と答へ、平家や吾が身についての述懷をした後、「たゞ〳〵早く首を頸ねて呉れ」と云つたきり、後は何事も云はなかつた。

やがて、重衡は伊豆の國の住人、狩野介宗茂へ預けられた。狩野介は情ある武士で、嚴しい取扱ひはせず、懇に痛はつて、湯をわかして入浴をすゝめた。重衡は、「旅の汚れを洗ひ落させて、身を清めさせて殺すのだらう」と思ひながら、湯につかつてゐた。すると、年の頃二十ばかりの女——色白う清げにて誠に優に美くしきが、目結の帷に染附の湯卷をあてゝ、湯殿の戸を推し開けて入つて來た。やがてまた十四五の女の子が、色々の入浴道具をもつてやつて來た。重衡は、その美しい女の介添へで、ゆつくり入湯して、髪を洗つて貰つたりして上つた。さて例の女が、歸ると云つて暇ごひをして「男はお氣に召すまいから女が行けとの仰せで參りました。頼朝公の仰せでは、何でもお望のことを承はつて歸れとのことでございます」と云つた。「いや、今の身の上には何の望みもない。唯思ふことは、早く出家をしたいといふことだけだ」。しかし重衡の望みは、頼朝にも容れられなかつた。

女の歸つた後、重衡は警固の武士に、「唯今のはいゝ女でしたが、何と云ふものですか」と聞いた。「あれは手越の長者の娘で、きりようがよくて心も優しく、わりなきものだと云ふので、此の二三年頼朝公が召し抱へてゐられるので、千手の前と云ひます」と答へた。

その夜、再び千手の前が、琵琶、琴などもつてやつて來た。狩野介は酒を出して、自分も十人餘りの家來を連れて席に列つた。千手の前がお酌をした。重衡は僅かに受けて、甚だ興なげにしてゐた。狩野介は「鎌倉殿は、よく〳〵お慰め參らせよ、行屆かぬことをして頼朝が恨まれるやうなことがあつてはならぬぞと仰せられました。宗茂は伊豆の國の者で、當地では旅の者ですから、思ふやうにはおもてなしが出來ませんが、出來るだけのことはしたいと思つてゐます。御遠慮なく何でもおつしやつて下さい」と云つた。千手の前は、重衡が酒を飲まないので、酌を止めて朗詠をやつた。それからは重衡も色々話を初め、千手もまた樣々な朗詠をしたり今樣などを歌つた。重衡も快活になつて盃を傾けた。

――一説には、丁度頼朝が伊豆の北條で狩倉をしてゐる處へ重衡が送られて來たが、頼朝は一見して重衡の不屈な面魂に共鳴を感じて、宗茂に「懇ろにもてなせ」と命じたといふ。そしてその夜、藤原邦通、工藤祐經などが、頼朝から贈る酒肴を持つて宗茂の舘へ來て、酒宴になつた。千手の前が琵琶を彈じ、祐經が皷を打ち、今様を歌つた。重衡もまた笛を吹いて打ち興じた。やがて藤原、工藤達は引取つたが、千手の前は後に殘つて、重衡へ盃をさした。その盃は黑漆に三輪の梅花を蒔繪したもので、當時黑塗の盃は鴛鴦の契りを結ぶ式に用ひらるべきものであつた、と云ふ――

さて、重衡は飲んだ盃を千手にはやらずに狩野介に指した。宗茂がそれを飲む時に、重衡は琴を彈きすました。そして「この樂を普通は五常樂といふが、我が爲には後生樂とこそ思はるゝ」と云ひ、やがて「往生の急」を引かうと戯れながら、琵琶を取り、糸を合せて「皇鹿章急」を引いた。夜は次第に更けて、萬ず心すむばかり物靜かだつた。

重衡は、「吾妻にこれ程優なる人がゐやうとは思ひ設けなかつた。何でもいゝもう一つ頼みます」と千手を顧みた。千手は、「一樹の陰に宿り合ひ、同じ流れを掬ぶも、みな是れ前世の契り」と云ふ白拍子を見事に打返して歌つた。重衡も、「燈暗うして數行虞氏の涙、夜深うして四面楚歌の聲」と朗詠した。それは、昔漢土に聞えた楚の項羽が、漢の高祖と天下を爭ひ、合戰すること七十二度、戰ふ毎に勝つたのに、終に最後に破れて垓下に圍まれた時のさまを歌つたものだ。夜深く燈暗き下に、愛妃虞氏は涙に暮れてゐる。四周には漢軍がひし〳〵と攻め寄せてゐる。と、あたりに楚の歌が聞える。それは項羽の本據楚の兵が既に降つて、漢の攻圍軍に加はつてゐることを物語つてゐるのだ。「吾が威勢も既にすたれた。もう逃れることは出來ん。いや、敵の襲ひ來ることは恐れはせぬが、虞や虞や汝をいかんせん」と、項羽は虞氏を抱いて、斷腸の思ひをした。重衡はそれを思ひ出して、千手の前に朗詠して聞かしたのだ。

さて、夜が明けた。武士たちはお暇をして歸つて行つた。千手もやがて歸つて行つた。

頼朝が持佛堂で法華經を讀んでゐる處に、千手は歸つて來た。「只今歸つて參りました」。頼朝はにこりと笑つて、「どうだ、いゝ男に仲人してやつたのウ」と云つた。千手がどんな樣子をしたか、『平家物語』には記されてゐないので、二人の間が前條のことだけですんだものか、それとも君命を幸に堅く契つたものか、知る由もないが、その時傍にゐて書き物をしてゐた齋院の次官親義は、「一體何事ですか」と聞いた。「平家の人々は、甲冑弓箭の外には藝がないのかと思つてゐたら、なか〳〵どうして、昨夜よつぴて側で聞いてゐたが、あの三位中將の琵琶の撥音や口ずさみは、實に

見事だ」と云つた。千手は穴あらば入りたい思ひがしたであらう。親義は、「私も夕べは聞きたいと思つてゐましたが、生憎はづせぬ事があつて聞けませんでした。この次には立聞きしませう。平家は代々歌人才人が多いが、先年彼等を花に譬へました時に、三位中將を牡丹の花に譬へましたよ」。「實際、優なる人だ、あの琵琶の撥音や朗詠ぶりの出來る者は、後にもなか〳〵あるまい」など〻話合つた。

その後、（壽永四年、重衡二十九歳）南都東大寺や興福寺の僧徒が、重衡の引渡しを賴朝に請ふたので、賴朝は彼を奈良へ護送さした。しかし僧達は自ら殺すことを好まなくて首だけ欲しいと云つたので、警固の者が木津川のほとりで首を討つた。これを聞いた千手は、かねて物思ひの種の盡きない折柄、もう堪えきれなくなつて、樣をかへ、濃い墨染の衣にやつれ果て〻、信濃國善光寺へ入つて、行ひすまして彼の後世菩提を弔ひ、我が身もやがて、往生の素懷をとげたと云ふ。

○池田の侍從と熊野　『平家物語』の「海道下り」（重衡捕へられて鎌倉へ送らるる事）の條に――重衡を連れた景時は、遠江池田の宿についた夜、この宿の長者湯屋（熊野）の許へ宿つた。ゆやの娘侍從が三位中將のお伽をしたが、「昔はおたよりをお聞きするさへ出來なんだのに、今日こんな處へいらつしやるとは、またどうしたことだらう」と不思議に思つて、一首の歌を奉つた

旅の空、埴生の小屋のいぶせさに、故里いかに戀しかるらん

三位中將これに答へて

故里もこひしくもなし旅の空、都もつひのすみかならねば

中將は「優しくも仕つたものかな、この歌の主は如何なる者でせう」と景時へ尋ねた。景時は、「君はまだ御承知なかつたですか、あれこそ八島の大臣殿（宗盛）が當國の守でゐらした時、召されて最も御寵愛になつた女です。老母をこの國に留め置いて都へお伴をしてゐたので、頻りにお暇を乞ふたけれどお許がない。三月の初め頃でしたが『如何にせん、都の春も惜しけれど、馴れしあづまの花や散るらん』と詠じたです。これを見て大臣殿も憐に思はれてお暇を給はつたさうです。海道一の歌の名人ですよ」と話して聞かせた、とある。昔の人は囚人護送でものんびりしたものデス。

謠曲の「熊野」はこれを脚色したのだ。しかしそれでは、宗盛に愛されて都へ連れて行かれたのは、侍從ではなくて熊野（湯谷）となつてゐる。何れであつても大した問題ではないが、とにかく、この謠曲のおかげで、熊野は斷然有名になつた。

仁安の頃（清盛執政の初）遠江の國池田の長者は、子のないのを嘆いて、熊野權現へお詣りし

て願かけをした甲斐があつて女の子が生れた。そこで名を熊野と名づけた。三五（少女の頃）の圖俗、雲鬢花顔、一笑千金なり、など〻の説もあるが、今假にそれを事實とすれば、彼女色氣のつく頃は、宗盛はとつくに天下の執政者となつてゐたわけで、なか〳〵遠江くんだりの國守になつて少女を見染めてゐる暇などはない。『平家物語』に據れば、少くも仁安の頃は、娘の侍從がすでに色氣づいてゐなければならぬ筈だ。だとすれば、重衡へ歌を詠みかけた頃の侍從は、三十歳餘りになつてゐたであらう。彼女の母は、謠曲の「熊野」の老母ほどではないにしても、まづソウトウの年齢であつたらう。

とまれ、熊野は斷然有名で、文化板の『北里見聞錄』によれば（これがまた古傳に關する限りは頗る幼稚な本なのだが）、熊野の墓提は今も池田の驛の攝取山行樂寺本堂の側にあつて、建久九年五月三日歿とあり、遊行上人の一世他阿上人眞敬が諸國を廻つてこゝに宿つた時、熊野の菩提を弔つて、この寺を時宗の道場とした、といふことだ。

『羅山文集』にも

池田驛長もと倡家、處子嬋娟天下に誇る
腰は禁王宮裏の柳の如く、面は巫女廟前の花の如し
古今洪河の水は盡ず、淵瀨相移る兩岸の沙
治亂興亡我事に非ず、征鞍暫く憩ひ且つ茶を嘗む

と、熊野を讃美したやうな詩が載つてゐる。近世歌舞伎劇の大先輩出雲のお國女史を、淫婦と罵しり、彼女のために天下擧げて淫風淘々となつたやうなことを云ひ、同じ『羅山文集』の中で彼女の尻をまくつてひつぱたく樣なことを云つてゐる道春先生さへ、昔の遊女をなつかしがつてゐる。なる程、お國のやうに丸ぼちやで、おつぱいがふつくらふくらんでゐて、豐かな腰付をしてゐたんでは、エロチツクだからいかんので、腰は禁王宮裏の柳の如く細つこくしな〳〵してゐなければならないのかも知れぬ。なにしても、「一寸休んでお茶にせう」とは、御愛嬌ものではありませんデスか！

その二、遊女雜話

伊通卿『十訓抄』によれば、崇德天皇の御代に、藤原伊通は官位を人に越されたので恨みに堪えず、自暴になつて官位を辭し、褐の水干に絡の袴を着し、馬に乘つて、神崎の遊女「かね」の許へかけつけて、大いに欝を散じたといふ。

寂照法師　何時の頃か（多分この時代のことであらう）、參州赤坂の宿の長者の娘、千壽といふ遊女は、參河守大江定基に愛されてゐたが、幾ほどもなく死んだ。定基は愁嘆の餘り、ついに出家して寂照と號した、と『麓の色』『道者』（宿驛の遊女）の項に出てゐる。

○

海津のかね　『古今著聞集』に大力な遊女の滑稽な物語がある。近江の國海津に、兼といふ遊女があつた。その地のさる名高い法師と割ない間柄になつてゐた。處が浮氣者の法師め、他の遊女に心を移して、その方へしげ〳〵通ふた。法師の女房は自分だとばかり心得てゐたおかね、すつかり自暴になつて、「畜生！　見てゐやがれ！」と法師の來るのを待つてゐた。ある夜、久々ぶりに法師がやつて來た。そこで、「合宿したりけるに、法師何心なく例のやうにかのことを企てんとして股にはさまりたりけるを、その弱腰を強くはさみてけり」と云ふことになつた。法師もしばしは戯れかと思つて、「はづせ〳〵」といふけれど、なか〳〵以てはづせばこそ、尙一層ひどくはさんで、「わ法師が人あなづりして、人こそあらめ面を並べたる者に心移して妬たき目見ける」この怨み思ひ知れ！とばかりに唯しめにしめまさつたので、法師とう〳〵泡をふいて死にかけた。そこで今度はおかねが吃驚して、あわてゝ股をはづしたが、もう法師はすつかりグタ〳〵になつてゐる、僅かに息だけ通つてゐる有樣だつた。おかね愈々慌てゝ水吹きかけなどしたので、二時間ばかりもたつた頃、法師はやつと正氣づいた。

この遊女は、大力者として頗る有名であつた。ものゝ本に、色々の武勇傳が傳はつてゐる。或る時、暴れ馬が大勢の人を引き倒しながら走つて來た。この有樣を見たおかねさん、はいてゐた高足駄で驅けて行く馬の牽き綱のはしをウンと踏みつけた。それッきり、流石の馬も引き止められて、何としても馳け出すことが出來なかつた。兼好法師は「女の髪には大象もつながる」と云つてゐるが、おかねさんは女のイットで止めたんではない。また決して赤いいまきを出して馬を久米仙にしたわけでもなかつたデス。その代りおかねさんの足は、見る見る下駄が砂中に埋れ、終に足首まで姿を沒して仕まつた。これ以來、俄然おかねさんの大力は著聞した。彼女もそれを自慢にした。生臭坊主のキン玉を絞めつける位、お茶の子サイ〳〵だ。人並四本の指で、あの强い弓を一度に五張も張つて大力の裏書をして見せたこともあるといふ。

○

西行法師と江口の君　謠曲「江口」の本當の話。

『新古今集』羇旅の部に、「天王寺へ參りけるに、俄か雨ふりければ、江口に宿をかりけるに借し侍

らざりければよみはべりける」と前書して、

世の中をいとふまでこそかたからめ
かりの宿りを惜しむきみかな

「返し」

西行法師

世をいとう人としきけばかりの宿に
心とむなと思ふばかりぞ

遊女妙

とある。幾ら西行でも俄雨に會つては困る。幸あたりに遊女の家があつたから、例の洒々落々たる態度で、假の宿りを賴んだ。處が主の女、名は妙と云ふ遊女だが、すげなく斷つて借さうとしない。そこで西行、「わしがまだ俗人で、色氣のある時なら、滅多にとめてはお前が危いと云ふこともあらうが、今は色氣もそつけもない出家の身だ、宿かして困ると云ふこともあるまいに、さては商賣にならぬから一寸の宿も貸し惜しみするのだな」と無遠慮な歌を詠みかけた。すると女は、「どう致しまして、御出家ださうなから、エロ氣の人の假の宿りをする家に、宿かせなんて、エロ氣を出すもんじやありません、と申しましたゞけですよ」とやりかへしたわけなんだ。

更に『撰集抄』なるものにあるさうなが、「治承二年（西紀一一七八年、清盛の極盛時）長月のころ、或るひじりと伴ひ西國へ赴きしに、さして急ぐともなきまゝに、日の傾くに、いそがずして、江口、橋本なんどいふ遊女の住居見めぐれば、家は南北の岸にさしはさみて、心は旅人のしばしの情を、思ふさまもはかなきわざにて、云々、その里を過ぎなんとするに、冬を待ち得ぬ村時雨のはげしくて、人のそともに立ち休らひ、内を見入りはべるに、主の尼の、時雨もりけるを佗びて、板を一ひら下げてあちこち走り歩りきしかば、何となくかく

しづが伏せ屋をふきぞわづらふ

と、うちすさみたるに、この尼さ、ばかり物騒しく走りあわつるが、何とてか聞きけん、板を投げすて

月はもれ雨は止まれと思ふにぞ

と、上の句をつけた、とある。尼のあわて廻る姿を笑つた法師も、これには一寸驚いたに相違ない。「月はもれ雨は止まれと思ふにぞ、しづが伏せ屋をふきぞわづらふ」。立派な歌だ。なか〳〵慾はなのか分らないのだが、世の歌ずきは左樣なことを超越して、とにかくこれを妙さんにして仕ひ、深いがそれも風流のためだ。處でこの尼さんが、果して遊女の妙さんであるか、それとも全く別人こゝに一人の歌詠み遊女妙さんなるものをデツチあげて、なつかしがつたり愛しがつたりして、一

つの物語を創作した。

かうだ――西行法師は江口を過ぎる時、家は南北の岸をはさみ、心は旅人の行き來の船を思ひ、或は遊女のありさま誠に哀れはかないことなどを思ひめぐらしてゐる處に、冬を待ち得ぬ村時雨が一しきり降つて來た。已むなく賤が伏せ屋に立寄つて、晴れ間を待つ間しばしの宿をかして呉れと頼んだ。けれど、主の遊女がなかなか承知しないから、「世の中をいとふまでこそ云々」の歌を口の中でつぶやいた。處が主の遊女がそれを耳さとく聞いて、ニッと笑つて、「世をいとう人とし聞けば云々」と、即座に返歌して急いで奥へかけ込んだ。西行は、たゞ時雨の間しばしの宿をと思つてゐたのだが、今はこの歌の面白さと、遊女の心ばせの奥ゆかしさに心ひかされて、つい一夜の宿を頼むことにした。女は、齢四十路ばかりの、見目あでやかな、優にやさしい女だつた。二人は夜もすがらくさ〴〵の事ども語り明した。遊女の物語るには、「私は幼い時分から遊女になりましたが、誠に頼りなく、心細さがしみ〴〵と身にしみます。女はこと更罪深いと云ひますのに、こんな稼業をしてゐては猶更先の世のことが思はれて、空恐ろしう存じます。この二三年といふものは、殊更さう云ふ氣持が強うなりました。一つは年のせいでありませう。で、今はふつつり稼業を止めました。おゝ、もう夜があけました。お名殘惜しう思ひますが、またの逢ふ瀬を」と云ふやうなわけで、西行は送り出されて行つたことになつてゐる。

まだある。『年山紀聞』なるものに、建仁三年（土御門天皇の御代、一二〇三年）五月十三日の御幸の記に「雨降り時々止む、巳の時參上、少時して還御、遊女着座、神崎の妙、すべりて轉倒す」とあるのもお妙さんださうな。治承二年に四十餘りであつたとすれば、この時はそれから二十五年目だから、もう七十ばかりの梅干婆さんでなければならぬ。すべつて轉ぶのも無理ではない。初めは江口にゐたのだがこの頃は神崎に移つたのだらうと云ふ。何にしても西行に「ふつつり稼業をやめました」と告白したお妙婆さんが、七十になつてまだ遊女をせねばならぬとは、ほんとに宿世の惡業を恐ろしく感じたことだらう。それにしても、貴き方が、しがない婆さん遊女をお呼びなされたとは、よく〳〵の御仁慈であつたと見える。とにかく、お妙婆さんと雨は、きつても切れない緣があると見える――などゝ、つまらぬことまで書き立てねばならぬ程、遊女妙ちやんは人氣者で、後世人は、歌よみの江口の君だの妙だの云ふと、何でもかでも、一人の妙ちやんに仕て仕まはねば承知が出來ない程だつた。

かくて、江口の堤の上に西行と贈答した歌を刻んだ「歌塚」が出來、江口寂光寺普賢院には「君の堂」が營まれて、妙女の像まで据えられ、言ひ傳へ、語りつがれた。謠曲「江口」はそれ等のす

べてをチャンポンにして脚色したものだ。西行の歌を口ずさむ諸國一見の僧の前に、先づなつかしさうに現はれ出づる里の女は實は江口の君（妙）の幽靈で、「それを言はれてはきまりが悪いわ、それ程貸し惜しみはしなかつたのよ」てなことを云つて姿をかくす。僧がその亡魂を弔つてゐると、今度は月澄み渡る川水の上に、遊びの舟を浮べてそのかみの江口の遊女の面影を御覽に入れ、十二因縁の流轉のことを謠つて、さてしみじみとうき河竹の流れの身を嘆く。「思へば浮世は假の宿」と觀ずれば、忽ち普賢菩薩と現はれて、舟は白象と化し、白雲に乘つて西方淨土へと歸つて行くと云ふ趣向で、盛に妙ちやんに早替り狂言を演じさせてゐる。

聞くならく今大阪市淀川區江口町の普賢院寂光寺の境内には、「歌塚」俗に「江口の君堂」なるものがあつて、大阪市とは云へ甚だ邊僻な所であるのに、尙參詣の人が絶えず、土地の名所に數へられてゐるさうだ。エロ一枚を藝當とする女郎はともかく、苟も藝を以て立つと誇稱するほどの藝者なら、旦那にお小遣をねだつてでも、江口の君堂へ御線香を上げに行つて、せめて來世は長襦絆一枚にもならぬにすべつて轉んでも、貴いお方に愛想をつかされぬ程の藝者になるやう、願をかけるがいゝ。三世目には普賢菩薩と一體になれることは確實だ、とものゝ本に書いてある。

○

長者『麓の色』には――長者とは、位貴く年長の人の美稱だ。また在鄕の豪農や大富豪なども長者といふ。しかし古は、娼家の頭を長者と云つた。但し遊女の長者はすべて女だつた。神崎の長者、青墓の長者、池田の長者など皆女だ。「東鑑」に、文治三年正月二十五日、賴朝公三浦介義澄の邸にお出での節、御酒宴があつた。折から信濃の國保科の宿の遊女の長者が、訴訟のことで參つてゐたので、その女を召し出して俗曲をお聞きになつたとあるが、今は娼家の主を長者と云はない、俗に忘八と云ふ――とある。長者が行、人、孝、悌、忠、信、廉、恥の八字を忘れる忘八にまで變轉されば申分はないが、實質も德川期以降さうなつたのだから仕方がない。江戸時代の忘八に比べれば、そのかみの御婦人の長者は餘ッ程よかつた。今日でも待合のおかみや藝者屋のおかあさんは女で、內實はとかくあれ女主人が多い。これは昔の長者と相似てゐる。長者も、今日のさうした女主人たちが多く藝者あがりであるやうに、大抵遊女の姥櫻になつた者であつた。

一體遊女は、前期までは完全な自前で、思ひ〳〵に各自の家を持つて、そこで稼いでゐたのだが、追々各地に遊女が繁殖し、良家の子女でない貧乏人の子や流れ者がだん〳〵遊女になるやうになつて來た爲に、ノレンをかりたり、席を貸したりする必要上、長者といふものが出來て、次第に近世的賣春機構に近づいて來たのだ。

源平時代にはさうした長者が續出したが、鎌倉時代になると益々その傾向が盛んになつて、長者の家には、數人或は十數人も遊女がゐて、それが所謂抱へ遊女と云ふものになつて來つゝあつた。長者も元々遊女が出世したのだから、お馴染さんの前に出れば昔とつた杵束で、歌も唄ひ、鼓も打ち、興を助けた。いや彼女等は、遊女の主人であり、マネージャーであり、また遊藝や客の取廻しのコーチヤーでもあつたのだ。遊女さへ後世のそれとは違つて大いに社會的地位をもつてゐたのだから、腕一本で切り廻して行くほどの長者姐さんたちになれば、誰も敬意を拂ふのだつた。

自前の遊女はどこでも勝手に出かけて行くし、お客と外泊もするが、長者抱えの遊女は、家にゐて客を迎え、外泊はしなかつた。揚代は金錢が多くなり、然らされば衣類や米などで拂つた。そして、長者の家ではお馴染さんを「子夫」(妓の旦那の意か)と云ひ、その對手の遊女を「子君」と呼んでゐた。武將などが妾同樣にしてゐた遊女は、大抵長者の娘などだつた。しかし抱えの遊女とても後世の女郎や見ずてん藝者と違つて、ふりの客でも何でも只滅多無性に轉ばされると云ふやうなことはなかつた。一體遊女と云ふものが、近世の淫賣ではなくて、遊興の席を賑はす者と考へられてゐたのだから。

○

平家の上臈　壇の浦の戰に破れた平家は、將士も女官も殆んど入水して果てたが、男では內大臣宗盛が生き殘り、女では建禮門院に扈從する女官たちが落ちのびた。尤も建禮門院と數人の女官は入水したが、義經に救はれて都へ送られた。しかし殘りの女達は、都へ歸ることも出來ず、赤間ケ關に上つて姿をかくした。

一體赤間ケ關は下の關とも云ひ、周防の上の關やその對岸の室の津(播摩の室とは別)などゝ共に、瀨戸內海西部の良港で、上下往來する船の重要な寄港地だつた。自然、それ等の地には遊女の需要があつて、都近くとは違つて、つとに淫をひさいで生きる女の群がをり、旅人や船人たちにつかしがられてゐた。

さて平家の落人である女たちは、今日は此方の濱、明日は彼方の浦とさまよはねばならなかつた。なまじひに上流社會の人となつた爲に、一旦かうした境遇に陷れば、何ともすることが出來なかつた。初めは情ある人の好意にすがつて露命をつなぎもしたが、多くの女が皆さうして生きて行くことは出來ない。仕方がない、彼女等は、命をつなぐ爲に身を投げ出して情けを賣つた。かう覺悟を定めれば、ねが都の上臈で鄙には見難い美しい女たちだ、遊藝などはお手のもの、買ひ手は至極多かつた。それも初めは一時の凌ぎをするつもりで、むくつけき鄙しき男に、身を切られる思ひをし

ながら身をまかせたり、機嫌氣づまを取つたりしたのだが、馴れゝばそれも大してあさましいとは思はなくなり、時世時節とあきらめて、すつかりそこへ居ついて仕まつた。

それにしても、彼女等の世すぎは悲慘なものだつた。漁村の傍に茅ぶきの小屋をかけて貰つて、そこで朝には漁夫を送り、夕べには村郎を迎へ、或は船頭のために讐でも蓆を下すのだつた。馴れると云ふことは驚くべき力だ。彼女等の中には、さうした相手と何時か馴れ合つて、ロマンスを殘す者もあつた。だが、かうしたしがない身の上になつても、人々は彼女等を「上蔣さん」と呼んでゐた。やがてはそれが淫賣をする女の名稱のやうになつた。後世の女郎なる語は、こゝに發したのだと云ふ。また、彼女等が一所に住む處は、必要上、界に蓆を下げて仕切られねばならなかつた。門口にも蓆を下げた。それが後世女郎屋の目じるしとなつた特殊の暖簾の初まりだと云ふ。

またかう云ふ話も傳はつてゐる。この時一人の女官はしがない苦商人に救はれた。しかしとても彼の力では上蔣を遊ばして養つて行くことが出來ないから、近くの野や山から草花を切つて來て、彼女にそれを賣らした。彼女は、白無垢姿で、碇泊する船へ行つて花を賣つて、辛うじて糊口をしのいでゐた。處が、彼女が船へ行くと、船人たちは何だかだと彼女をからかつたり、或は無態なことをしかけたりした。汚らはしい、厭はしいと思ふけれど、命をつなぐ爲にはそれも忍ばねばならなかつた。かうして月日を送るうちに、どうしても花を賣つてゞは生きて行けないことを知つた。終に彼女は、花賣を表の商賣として、秘かに春情をひさぎ、花は景品としてやるやうになつた。けれども、世間の人は醜骸になり果てた彼女をも、「上蔣樣」と云つた。それは決して何時までも尊敬の言葉ではなかつた。たゞそれが彼女の符牒であつたのだ。かうしてこゝにも女郎の語原が一人出來た。たゞ彼女は、賣春の嫖價を「花代」と稱する元を開いた點に於て、特筆大書すべき存在とされてゐる。

とにかく、建禮門院に扈從した女官たちの中に、下の關や上の關で淫賣をして僅かに露命をつながねばならない者があつたと云ふことは、落日の輝きながら沈むにも似た美くしく偉大な哀史とされてゐる平家沒落史に、一點のみじめさを添えるものだつた。

○

『異本洞房梧園』には又別の話を傳へてゐる。但し、平家の女房に關することではない——昔、一の宮の御息所が何事かあつて、土佐の國昌といふ所へ赴かねばならないことになつた。しかしその方は土佐へは行かずに、藝州宮島へ着いて、そこで落魄した生活をされてゐた。これを聞いた都の官女たちの中に、御息所を慕つて宮島へ下つて來るものがあつた。彼女達は、若君にお會ひして泣

いて喜んだのも束の間、都にゐた時と違つて、只かしづいてゐればよいといふわけには行かなかつた。明日の日から、糊口の道に惱まねばならなかつた。そして終に、彼女等も女の唯一最高の資本を擲つて、細々ながら暮しを立てたのである。これをその地では京上蕨と云ひならはし、彼女等の住を、局とやじつた。これが局女郎の名の起りだといふ。

○

辨慶と遊女　辨慶と女については色々の俗說が傳はつてゐる。芝居で名高い「御所櫻堀川夜討」の「辨慶上使」の段に、播州福井村の本陣の娘おわさが、月待の宵、村の若者たちに襲はれてあわやと云ふ所に通りかゝつた美しい稚兒若衆、所も知らず名も知らぬ人と、つい轉び寢に契つた胤が宿つて、生れたのが今辨慶に義經の愛妾卿の君の身替りに殺された腰元しのぶ。さてその美くしい男を、形見に取つた片袖をたよりに尋ね求めて十八年、やつと見つけ出したのが現在吾が子を槍先にかけた辨慶、そのかみの「書寫山の鬼若」であつた、とおわさが獨白する愁嘆場がある。その時辨慶が、あれ以來、一度も女の肌身にふれたことがないといふ。何時の頃から出來た話か知らないが、この話にあるやうに、辨慶はおわさと轉び寢に契つた外は、女なんて見向かうともしなかつたと云ひ傳へられてゐる。そこで

「なぜだえ」と辨慶しづか（靜御前）に責めらるゝ

辨慶や小野は馬鹿だなア嬶ア

なんて、狂句も出來たやうなわけで。處が辨慶は、「味に別段の變りがないものなら一度で結構、何度も××て見るがものはない」と云つてゐたさうな。

一體辨慶といふ男は、芝居や物語の大人氣男だが、史學者の仲間では抹殺論さへある位で、正確な史料としては『東鑑』の中に、判官奥州落の時のお伴として山伏姿の武藏坊の名が出てゐるだけ。『平家物語』でも、一の谷鵯越の際に、獵師の子鷲尾經春をつれて來たことが出てゐる位なものだ。安宅の關の勸進帳などは、謠曲作者が創作したものなんだから、辨慶一ぺん說などは、歷史的にはてんから問題にもならない話だが、しかし辨慶らしい話ではある。

また、後世一般に信じられてゐる處に從へば、義經は男こそ小さけれ、水際立つた美男、それに引替へ、辨慶は容貌魁偉、力あくまで强く、頗るジヤイアントであつたといふことになつてゐる。處が、それは大邊な感違で、實は義經は小男の、甚だ風丰の擧らない醜男、辨慶は堂々たる美丈夫だつたといふ說もある。自然、御婦人連がワンサと押寄せたさうな。

『義經記』では、辨慶は五條の橋の一件以來、終始判官と行動を共にして、判官のある處必ず辨慶ありといふ狀態になつてゐる。處がこの辨慶は、妻君や妾こそなけれ、毎夜のやうに六條の遊女の許へ通つてゐる。土佐房昌俊が堀川夜討の夜も、判官の云ふまゝに館を引上げて遊女の許へ出かけてゐた。そしてゲップーの出る程女をたゝきのめして、夜明け方高足駄で歸つて來ると夜討の騒動、「チョコ才な」とばかりユーモア交りの活躍をすることになつてゐる。

文化板『北里見聞錄』卷の一によると――「古實三考源平盛衰記」下編七卷略に、臺記に曰く、武藏坊しばらく思案して、只今、福ある者に下知して兵糧を借る時は、是れ卽ち鎌倉殿の御恥辱なり。然るべき仕方ありとて、鰓井六郎重淸と相談して、玉藻、若狹、經書、梶子などゝいふ（神崎の遊女）を大江の岸近き平野の社前へまねき集め、法樂の舞をまはしめ、その後、天王寺の樂田、高麗領の料日（年貢米納入の日に米を借用す、とあつて、次の借用證が載せてある。

要二借米一石五斗一事

一、天王寺樂田高麗領米具米宣旨、壹石五斗借調所嚴明也。仰平野神社法樂舞、神崎遊君玉藻若狹經書梶子彼物不レ足、依レ之返濟令レ致不義有間敷、下年際月切懸二熊野白山一約束狀如レ件

元曆二年正月廿八日　　武藏坊辨慶

高麗領米具賴母殿

これは、軍費と收めるために神崎の遊女を傭つて法樂の舞を興行し、獻金を募つたのだ。辨慶こそは、今日の慈善興行、資金募集興行の大先輩であると云はねばなるまい。

四、鎌倉時代

一、著名な遊女

○

虎御前『曾我物語』で名高い大磯の虎は、その地の長者の娘で、伏見大納言實基の落胤だと云ふ。幼名を於兎と云つたので、大磯の於兎とも呼ばれてゐる。

母は遊女の長者であるし、父は堂上の人であるだけに、於兎ちやん幼時からみやびの道を學んだらしい。例へば和歌の道に心を寄せて、人丸、赤人のあとを尋ね、業平の昔男（伊勢物語）や源氏の君（源氏物語）を讀んで情をうつし――と云ふから、あの物語の淫亂男や淫奔女共のありにしことども讀み耽つて、エロチックに昂奮したものに違ひない。

さて、彼女十七歳にして見初めた男は、本邦仇討史上の大先輩曾我の十郎祐成だつた。その戀、即日に成就して、二人は契りも深き仲になつた。「十八年間も仇討本懷とげる爲に苦勞した十郎が、遊女に馴染むなんて、ベラボー奴、そんなことがあつてたまるかッてんだ、こん畜生！」なんて仰

つしやつてはいけません。曾我へ再嫁した十郎の母が云ふことに、「お前は父河津三郎殿の御無念を晴すため、敵工藤左衛門を討たねばならぬ大望のある軀、とても定まる妻を持つことは叶ひませぬ程に、手越や黄瀬川（共に駿河）あたりに然るべき遊女を見立てて、馴染むがよろしうございませう。しかし、なるべく往還（街道）に近い所を選ぶがよいぞえ。敵を窃ふ便利もありますから。」かやうに同情と理解のある母に許された十郎は、海道を物色した結果、大磯の虎が最も我が理想に合ふと云ふことになつたのだ。分つたかッてんだ。

さて或る日、和田義盛は、一族郎黨を引つれ、大磯の長者（物語には鎌倉とある）の許へやつて來た。黄瀬川の龜鶴、手越の少將などに盃をさして廻つたから、今度は虎に思ひさしをして貰はふと云ふのだつた。和田義盛は當時の大豪傑。武士大名の總監督をする侍所の別當で、斗酒尚辭せぬくらゐか、芝居の話によれば四斗兵衛の別名までもつてゐる大酒豪。力はまた鬼神の如しと云はれた巴御前――木曾義仲の妾であつた別嬪と引ッ組で、くんづもつれつ上になり下になり、とうとう下に組み敷れたけれども、ウンと巴のおッぱいをいぢつてやつた爲に、流石の巴も力拔けがしてゐる處を生捕つたと云ふ、男としては天下無双の大力だ。で、巴も、義盛の奥さんならなつてもよいと云ふので、賴朝公のお許しを受けて夫婦になつたと云ふ、嘘か實か評判のある程の男だ。そ

れがやつて來て、虎に一献差さうと、有り難いお言葉だ。

その時虎は、丁度十郎さんが來てゐて、別室でよろしくやつてゐた。なか〳〵義盛の席へなど出られるところではない。

義盛は豪氣に酒宴を初めてゐる。虎はなか〳〵出て來ない。義盛は頗る不機嫌で、その子朝比奈三郎を彼等の部屋に踏み込ました。「オーイはいつてもいゝかッ」。別段あはてふためかねばならぬやうな場面でもなかつたから、十八歳の朝比奈はどつかと座り込んで、無法も云はづ、「君達に氣の毒ちやが、何分親父がやかまし奴ぢやから勘辨して呉んな。處で虎君だけと云ふわけにも參るめェから、一そのこと、十郎君が吾々に合流すると云ふことに頼まう。親父も喜ぶ。」と云つた。力もあれば情もある朝比奈に頼まれゝば、いやと云ふわけに行かなかつた。

やがて兩人は、朝比奈に從つて、きまり悪さうにその席に加はつた。義盛初め一同大喜びで、一きは元氣を出して酒を飲み出した。

頻りに盃が廻つて、虎の前へ來た時、「どなたにお差し仕ようか知ら」と云ふのを聞いた義盛、「思ひ差しッて云ふ處で行け」。いゝ氣なもので義盛は、そう云へば當然今夜の御大將たる乃公に來るものと思つてゐた。そしたら、「ウン、貴樣も俺に惚れてるかッ」と云ふ處で虎奴を抱いてやらうと云ふ積りであつた。

「思ひ差しですの、わたしのほんとに好きな人にさせばいゝのね。」

「さうとも。ワー樣か。」

皆が一時に虎に顔を向けて、些か座が本氣になつたので、虎も一寸困つた。義盛にさせば喜ぶに違ひはないし、一座もワーッと喝采するだらうが、戯談にもしろ十郎を前に置いて他へさすことは躊躇される。若しまた義盛に差して、抜き差しならぬことになつては、愈々十郎にすまぬ。「やつぱり商買女だ、」などと十郎に思はれては、わたし困るわ、と考へた。だからと云つて、此の際十郎にさしたのでは、この場の樣子では、「俺に恥をかゝせるかッ」て義盛が怒り出して、事が起るに違ひない。とつおいつ、多感にゐます彼女は、もぢ〳〵してゐた。

「早く差さないかッ」

虎はジッと十郎の顔を見た。十郎は他所を向いて、むつかしい顔をしてゐる。

「こんなことならやつぱり出ない方がよかつた」と虎は後悔するのだつた。

「何をグズ〳〵してるんだ。遠慮なく好いた奴にさせ」

と、酔どれて怒鳴る奴もある。虎はふと義盛を見た。もう些か御酩酊の樣子で、刀を前下りにだ

らりとさしながら、

「考へることがあるか、さつと指せ」

と云ひながらもう手を差しのべてゐる。その瞬間、虎は決心がついた。「十郎さんへ差さう、若しものことがあつたら義盛を支へる格好をしてあの刀を奪ひ、一刺しにしてやらう」、と。そこでチラと義盛を見て、それから十郎をつく〴〵見て、「御免遊ばせ」と義盛にお辭氣をして、さて、十郎の前に盃を出してニツコリとした。一座はワーとどよめいた。

この達引にまけた義盛は、頭を掻いて苦笑しながら、

「若い奴にはかなわぬワイ、俺も十郎ほど若かつたらこの分には置かぬがのウ」。

この時、兄の危急と聞いて弟五郎時致が息せき切つて飛び込んで來て、「我が兄者人に危害を及ぼす者あらば」といきり立つのを、朝日奈が五郎の草擢を引いて止めやうとした、五郎はそれでも行かうとする、とう〳〵引ちぎつて仕まつたと云ふ。芝居でやる草擢引は、實は、この時のことださうな。但し、この盃事や草擢引一件は、後人の小說的創作で、事實的根據の薄いものとされてゐる。

建久四年五月、頼朝は富士の裾野で卷狩をした。これは今日の機動演習のやうなものだ。この機に乘じて、曾我の兄弟は十八年の苦勞が報ひられて、不倶戴天の父の仇工藤祐經を討取り、仇討本懷をとげた。この仇討についても色々と面白く作られた話が傳はつてゐるが、事實とはかなり違ふらしい。で、稍々事實に近いと思はれる處を一通り述べて見やう。

五月廿八日、この日は富士の裾野に雨雲が低く垂れて、やがて小雨さへ降つ來た。今夜こそ天の與へたよき日だと、その宵、十郎祐成は先づ祐經の陣屋の模樣を見て置く爲に、さりげなく裝ひながら、定紋打つた帷幕を引廻した陣屋〳〵の間を通つて、工藤の陣屋の側までやつて來た。それを見かけた祐經の長男犬房丸は、急いで父にこの由を告げた。祐經は今、手越の少將、木瀨川の龜鶴などを呼んで、彼の腹心王藤内と酒宴の眞最中だつた。祐經は、「さうか、いゝ處だ、こゝへ呼んで來い」と命じた。犬房丸は、不精無精出て行つて十郎を誘つた。もつけの幸、陣屋の内部を見んものと、祐成は中へ入つて座に列なつた。祐經は、やつぱり仇討のことが氣になると見えて、

「お前の父の死んだのは俺のセイではない」

と頻りに辯解した。機を見て座をはづした十郎は、急いで五郎の處へ歸つて來て、「今夜すぐ決行だ」と二人で萬端の用意を整へ、鄕里の母に委細の手紙を書いて、下郎にもたして發足させた。

夜の十二時頃、降りしきる雨をついて松明をかざしながら二人は進んで行つた。あちこちの陣屋

の陰に、警固の者共が篝を焚きながら護つてゐた。幸の風雨で、二人は見咎められずに工藤の陣屋へ忍び込むことが出來た。祐經はひどく醉ッ拂つて、前後不覺に寢入つてゐた。近づいた兄弟は、兄が太刀先を工藤の胸板に差し當てながら、名乘を上げて祐經を呼び起した。眠りの覺めた祐經が、二人に氣がついて驚いて太刀に手をかけやうと起き上つた時には、もう二人の太刀に指貫かれてゐて、ドッと仆れる外にはなす事も出來なかつた。

同室に寢てゐた大藤內が、ビックリして逃げ出す處を後から十郎が切り下げた。この有樣に驚いた例の遊女たちがあわてふためいて金切聲を上げた。そこで二人は、潔よく大音聲に名乘りを擧げ、「我れと思はんものは出で會へ！」と呼ばはつた。四方は忽ちの大混亂、宿直の侍たちが馳けつける處を、兄弟は無二無三に斬りまくつて、また〻く間に十數人を仆した。しかし十郎は仁田四郎忠常に討ち取られた。かくと見た五郎は、一生の思ひ出に、賴朝の首を討つてやらうと思ひ立つて、その館へ突進した。かくもあらんかと張番をしてゐた小舍人童五郎丸、芝居の御所の五郎丸が、その大力で後から五郎を抱きすくめた。五郎は幾らもがいても、何ともすることが出來なかつた。そこへ馳けつけた者共、一緒になつてとう〳〵時致を取押へて仕まつた。

翌朝五郎は賴朝の前に引出されて、時政、義時、畠山、千葉、宇都宮等々の宿將列座の處で、ありしことども事細かに陳述し、君に對しても、マンザラ怨がないでもないから、とにかく拜謁をとげて言ひたいことを云つて自殺する氣だつたと臆面もなく云つた。そこに仁田四郎が、兄の首をもつて來た。

賴朝は五郎を放免する氣だつた。しかし祐經の伜犬房丸が泣いて口說くし、諸將の中にも色々意見があつたので、又後に遺恨が殘つて同じことを繰返してもいけないからと、賴朝は五郎を犬房丸へ渡し、犬房丸はこれを殺した。

この時五郎が幾歲であつたか分らないが、多分兄より二歲下。十郎は二十二歲であつたなど云ひ傳へるが全く嘘の皮、本當は四十二三歲であつた筈だと云ふ考證がある。

その後、大磯の虎、當時武藏の國府にゐた兄弟の實弟某二十二三歲、兄弟の養父曾我祐信などが參考人として喚び出された。しかし何れも何等の咎めもなかつたばかりか、祐信の如きは、「これから後、曾我の庄の年貢を免除してやるから、末永く兄弟の菩提を弔つてやれ」と恩命を賜つた。

『東鑑』によると同年の六月十八日、虎（故曾我十郎の妾大磯の遊女虎とある）は、髮は下さなかつたが黑袈裟をつけ、箱根山の別當行實坊で十郎のために佛事を營み、「和子のつらね文を捧げ、葦毛の馬一疋をひいて唱辱の施物」とした。この馬は祐成が形見に虎へやつたものだつた。その日虎

は、出家をとげ、信州善光寺へ入つた。その時虎は十九歳だつた、と云ふ。『曾我物語』では、虎は祐成の死後尼となり、富士の裾野へ行つて、處の翁の案内で井手の舘を見、「祐成殿最期の跡はこゝか」とばかりいとゞ涙にくれ、やがて一首の歌を詠んだと云ふことになつてゐる。

霧とのみ消えにし跡を來て見れば、尾花が袖に秋風ぞふく

○

『異本洞房梧園』に、相州鳴立澤の圓位堂の緣起に、虎姫、實は伏見大納言實基の娘だとあり、法名を眞嚴院虎心善尼と云ふ、と出てゐる。

また俳人未得は彼女の爲に狂歌を作り、羅山先生は『大磯の虎の石に題する詩』をものしてゐる。

祐成が、ぼだいのために尼となる、日本の虎は毛をもおします、
十郎慷慨して於兎を愛す、血氣の武人犀甲の軀
妾婦當時星に誓へるや否や、隕此の石となつて望夫に似る

○

五郎の馴染　五郎の馴染は鎌倉化粧坂遊里の遊君だつた。名聲を天下に歌はれる程の名妓ではなかつたらしいが、まんざらの者でもなかつたと見て、梶原源太景季がジャン〳〵通つた。それに反して五郎は、彼女と逢ふことも思ふにまかせず、一人癇癪を起しながら、しみ〳〵貧の辛さを味はなければならなかつた。

さて間もなく、五郎は仇討本懐を遂げてその名は鎌倉にとゞろき渡つた。さて彼女、元々五郎に惚れてはゐたが金の力に止むを得ず梶原へ靡いてゐたものか、それとも金に不自由がなく、いゝ男で、然も名門の若旦那である梶原へ眞實寢返つてゐたのが、五郎の勇名の高いのを聞いて、トタンに五郎戀しくなつたものか、とにかく今はない五郎の死を悼んで、箱根山で佛事を修め、後、生年十六の若い身空で、出家して善光寺へ行つたと云ふ。（おゝ何とその末の大磯の虎に似てゐることか、これはどんなもんですかね）。

○

黄鶴と少將　黄瀬川の鶴、手越の少將の二人は、大磯の虎と並んで、當時海道の美形三幅對だつた。或は、戯曲的別嬪で實はゐなかつたのかも知れないが、その點は保證の限りでない。黄瀬川、手越は共に駿河にある宿。黄瀬川は、沼津の東、現大岡村のあたりにあつた。手越は、靜岡市の西、現長田村の一部。共に海道の沿線だから、遊女が繁昌してゐたのだ。

さて黄瀬川の龜鶴は工藤左衛門祐經の腹心、備前吉備津宮の神主、大藤内の思ひ者で、手越の少將は御大祐經をパトロンにしてゐた。そこで、曾我仇討の夜も、二人の男は二人の女を側へ引付けてあつたのだ。傳へによれば、その夜手越の少將は、曾我兄弟の討入を直覺して、女の童に命じて工藤の寢所の妻戸を開けさして置いた。(また自らハヾカリを裝つて手觸で彼等を導いたとも云ふ)。それは、別段パトロンの祐經が憎かつたからでも、十郎に惚れてゐたからでもなかつたので、同じ遊女である虎と十郎との、しみ〴〵とした悲戀に同情し、ことに虎の、貧しい十郎を一筋に愛して、大望を遂げる日の一日も早からんことを祈つてゐる心根をいじらしく思つてゐたからだつた、といふ。

少將も、虎の出家したのを見て、自分も祐經の靈を慰めるために、綠の黑髪惜し氣もなくそりこぼち、これまた善光寺へ入つた、その時彼の女は廿七だつた、さうな。——とにかく。諸行無常と感じて出家することは、當時の時代風潮だつた。

○

重忠と淺妻　武藏の國秩父の庄司畠山の次郎重忠がまだ若年の頃の話。同國多摩郡小金井戀ケ窪の遊女に淺妻と云ふのがあつて、重忠はそれへ通つてゐた。或る時、重忠は賴朝に從つて戰に出かが、「重忠が討死した」といふ評判が傳づた。淺妻は悲しみの餘り、夜にまぎれて密かに館を忍び出で、玉川の淵に身を沈めて、重忠の後を追ふた、筈であつた。

やがて凱旋した重忠は、この由を聞いていと〻不憫に思ひ、菩提のために塚をたて〻、その印として松を植え、黑金の彌陀を据えた。その像は今、府中「六所の社」の境內にあるが、文字が寂れて只「建久藤原」の四字しか見えない。松は今なほ戀ケ窪に殘つて、枝葉が繁茂してゐる。里人はこれを「傾城の松」または「操の松」など〻呼んでゐる——と、文化年度板『北里見聞錄』に出てゐる。

○

阿古屋　『新古今集』離別の卷に、「尾張の國に、京より下りける男の、語らひつぎ侍りけるに、明日上りなんとしける時、死ぬばかり覺ゆれば、生くべき心地せぬよしいひけるに」と前書して、

死ぬばかり、まことになげく道ならば、命と〻もにのびよとぞ思ふ。

といふ歌がある。讀み人は「くゞつ、あこ」。この「あこ」は、芝居で有名な惡七兵衛景清の愛妓京都五條坂の遊女「阿兒耶」(阿古屋)の實物であらうといふ說がある。

『平家物語』、『源平盛衰記』『盛長私記』などによると、景清は平家の遺臣で、通稱を上總七郎

兵衛と云ひ、伯父の大日坊を殺した爲に俗に惡七兵衛と呼ばれた。體軀長大、剛勇無比で、壽永年中、平惟盛に從つて源義仲を攻め、また知盛に附して源行家を破つた。屋島の戰では美尾屋十郎と鏑引の力比べをして大力を謳はれた。平家が西海で滅びた時には、盛嗣、忠光等と賴朝兄弟に是非一矢を酬ひて死なうと、惜しからぬ命を長へた。建久六年（西紀一一九五）三月十六日、賴朝は上洛の機會に東大寺で大佛供養をしやうとしたが、その前に當つて、どうした心境の變化か景清は鎌倉方へ降參した。そこで賴朝は、彼を和田義盛に託したが、景清は頻りに放埒無賴の振舞をして義盛を困らした。止むを得ず八田知家の邸に移すと、今度は「鎌倉の息のかゝつた物は湯水も咽に通さぬ」と云つて、米一粒水一滴も口にせず、頻りに大佛供養の日を指折り數へて待つてゐたが、とう〳〵それに先立つて三月七日に死んだと云ふ。

この景清の特色ある人物や行動が、劇的興味のある處から、夙に「景清」、「大佛供養」などの謠曲に脚色され、やがて近松門左衛門に「出世景清」として淨瑠璃に作られた。それから、色々の景清狂言に變化されて、江戸後半期の劇界に、「貧我狂言」、「忠臣藏」についで盛に演じられ、民衆の大喝采を博した。一體江戸時代の歌舞伎といふものは、常に趣向を新しくする爲に、一つのネタでも思ふさまに變化を與へ、勝手氣まゝに仕組んだもので、自然同一のものも驚くべき多樣の筋をもつ狂言となつてゐるのだが、「景清狂言」と云へば、まづ「阿古屋」が出るものと相場がきまつてゐる程、阿古屋と景清とは密接に取扱はれてゐる。尤もそれは、剛勇な景清に配するに、美しい、藝の至妙な別嬪を以てして、劇的効果を上げるが爲であつたが。

さて、景清狂言の源泉となつた近松の「出世景清」を改作したといふ福地櫻痴の「武勇の譽出世景清」の筋を述べると、――平家沒落の後、景清は熱田大宮司の許に身を忍ばせ、その女小野の姫を妻として、賴朝に一矢報ふべき機會を伺つてゐた。恰もよし東大寺の大佛供養に賴朝が參詣すると聞いて、武者法師（原作は番匠の由）に身をやつして入り込んだ。そして賴朝の身邊をねらつてゐたが、畠山重忠に見現はされ、わづかに逃るゝことが出來た。景清はそれから五條坂の遊君、かねて馴染の阿古屋の許へ行つて隱れた。處が彼女の兄十藏が妹をそゝのかして、景清を鎌倉へ賣らうとした。それとは知らぬ阿古屋、兄の云ふまゝに景清にます花が出來たと信じて、嫉妬にとりのぼせ、景清を訴へ人した。景清は逃れて清水寺に忍んだが、妻小野の姫が捕へられて拷問にあつてゐると聞いて、自首して土牢に入れられた。阿古屋はやがて兄の奸計であつたことを知り、女心の淺はかさを恥じて、二人の中に生れた二兒を殺し、土牢の前に行つて、せめてもの詫をして自害した。「さては十藏奴が」と知つた景清は、忽ち牢を破つて逃げ、十藏を殺した。その後景清は再び

捕へられ、賴朝の寛仁に感じて降參し、數奇の運命に弄ばされることになつてゐる。

有名な「阿古屋琴責めの段」は、景清狂言中の主要の部分であるが、これは小野姫拷問の場を換骨脱胎したものと云はれてゐる。これにも色々あるが、先づその元をなした「壇の浦兜軍記」のそれでは、(阿古屋の訴人はなく)、景清が牢を破つて逃げたので、馴染の遊君阿古屋は、堀川御所の白洲へ召喚されて、名判官秩父の庄司畠山重忠の調べを受ける。その時重忠は、彼女に、三味線、琴、胡弓の三曲を奏でさせ、靜かに聞いてゐたが、その音が冴えて些かも糸の亂れがないので、これは阿古屋に邪念のない證據、景清の在處を知らぬと云ふのは僞でないと斷定して、彼女を許してやる、と云ふことになつてゐる。

かうした芝居の阿古屋がどれだけ實在性をもつものか、甚だ怪しい。

淺菊　寛喜元年(西紀一二二九年)のこと、鎌倉の四代將軍賴經は、執權泰時等と相州三崎の浦へ出遊した。その地の庄司三浦義村は、船へ迎へて善美を盡した饗應をした。賴經が船へ移つた時、俄然、あたりから妙音が起つた。管絃の調べはゆるやかに浦曲を流れ、海中の魚鱗は鰭をそろへて波に浮び、藻屑にまじる蝦雜魚までが感を催すかと思はれるばかりだつた。

やがて佐原三郎右衞門尉は、その頃隱れなき遊君淺菊をつれて參り、一葉の扁舟に棹さしつゝ行くに乘せて、いゝ聲で歌はした。これまた一同感嘆のヘソを長くするに足るものだつた。將軍も感銘のあまり、お船に召して更に催馬樂を歌はせた。その天生の美聲、至妙を極める聲のころび、名人諸君の伴奏とうまく調和して、愈々以て感に堪えざるものがあつた。一同「どうしてあんない聲が出るのだらう」と不思議がる程だつた。おきれいな將軍樣、は彼女にお盃を賜り、「折々は御所へも參れ」と仰せられた。――淺菊は感涙にむせび、嬉しいやら恥しいやら、顏も上げ得なかつた、であらうと思ふ。

越後の初音　永仁六年(西紀一二九八)の三月、北條貞時が執權の時、藤原爲景は事に座して佐渡ケ島へ流された。その途中、越後の國寺泊に船を寄せ、風波の收まるのを待つ間、その地の遊女初音を呼んで憂を慰めた。初音は爲景の身の上をお痛はしがつて、「きつとお呼び返しになりますわお體をお大事に遊ばしてね」、と、一首を贈つた。

もの思ひ、こし路の浦のしら浪も、立ちかへるならひ、ありとこそ聞け

果せる哉、爲景はやがて御赦免になつて都へ歸つた。後に勅命によつて『玉葉和歌集』を撰した時、ありし日の初音の厚志に酬ひる爲に、この歌をその集に收めた。

二、鎌倉時代の白拍子

白拍子商賣　元來「白拍子」の名は、或る種の舞踊に名づけられたものだ。それがやがて、男裝してそれを舞ふ舞姫の名になつた。舞姫は舞ふ姫で、歌舞を御覽に入れお聽に達するのがその商賣だ。しかし、ともかくもサービスガールとして、召されて行つて、男に性的昂奮を與へる種類の商買女が、たゞ歌舞の藝だけで立つて行くことはむづかしい。第一お客が許さない。お客が許さねば商買が成立たぬ。自然、幾ら何といつても、レッキとしたパトロンでもない限りは、たとい涙をのみつゝでも、時と場合には何とかならねばならぬ。といふわけで、白拍子が職業化した初めから、彼女等が一種の賣笑婦と考へられたのは止むを得ないことだつた。

しかし、一世に名のある程の白拍子、後世に名を殘した程の女は、敢て淫賣はやらなかつたと見える。といつた處で、全然淫賣ではなかつたとも云へぬであらう。それは今日の藝者と同じことだ。非人道的な水揚の最初から、たとひいゝパトロンがついて、斷じて他にお客を取らなかつたとしても、彼女が××をしなかつたとは云はれないからだ。

なんて、七むつかしく議論をする必要もないが、とにかく、和歌ノ前などのやうな太政大臣の娘などは別としても、祇王姉妹、佛御前、靜御前、など、人口に膾炙する程の白拍子は、遊女とは云ひながら素性もあれば、パトロンもシャンとしてゐたわけで、所謂遊女として輕蔑すべきものではなかつた。妾ぢやないか、などゝ云つた處で、當時のさうした人達の妾は、今日のインテリサラリーマン先生の令夫人や、「部下が部下が」なんて、亭主が高等官であるのをひけらかしてゐる味噌コシ奥様なんぞよりは、斷然高貴な、光榮ある淑女だつた。第一そんな女たちは、今時のプチブル令夫人共などよりは、くだらぬ小理窟こそ云はぬ、根性がしやんとしてゐて、志操高雅だ。靜御前などに至つては、凛然たる魂があつた。一體藝者でも女給でも傑出したものになると、とても素人女などの企て及ばないシャンとした根性をもつてゐるものだが。

さもあらばあれ、夜飛ぶ蟲は螢だけではない。光もなく、聲もなく、たゞ夜にまぎれて餌をあさつてゐる蟲のやうに數限りなくうよ〳〵してゐた白拍子共は、下等の遊女と同じやうに、看板はともかくも、最後の生命と賴む處はエロだつた。そこで、『遊女考』の著者の如きは、白拍子なるものは、資性淫蕩で家にあつて婦道を守つてをれぬ女共が、なるものだ、と理解のない酷評をするし、『下學集』の著者のやうに洞察力のある者は、白拍子は歌舞によつて女色を衒賣すると云ふ。

とにかく、鎌倉時代の白拍子は、そのかみの大先輩たちのやうな、凛然たる志操や、男の魂を涙ぐませるに足るすぐれた心やはもう持合せてゐなかつたと見える。もう既に、白拍子の名は單に形骸を止めるだけで、紛々たる下等の遊女共と同じやうなものになつてゐたのだ。そこで鎌倉初期以後のもの丶本には、白拍子と云ふ言葉と遊女と云ふ言葉とを混用してゐる。かうして再び、白拍子なるものは、遊女共の舞ふ或る種の舞の名に還元されるやうになつた。

源平時代以來、白拍子が流行した結果は、一般の遊女たちも、白拍子の眞似をした。江口、神崎、蟹島等、所謂河尻の遊女も、室（播州）、高砂、朝妻などの遊女も。それは丁度、大カフェやダンスが流行すれば、女郎屋までがカフェ然たる構造に變つて、七三耳隱し、訪問着の女給然たる花魁が出來たり、ワンピースにウエーヴたくましき髪をぶつかぶつたダーサー然たる女郎が、緋縮緬の長繻絆に變へるに、肌もすき通るやうなノンズロ・シュミーズ姿で、ダブルベッドの上で怪ダンスをやつたりするのと同じ精神と目的によるのだ。

○

平家全盛時代頃までの白拍子は、大スターともなれば、敢て召されなくとも、どし〳〵名門の人の邸へ押かけて行きもした。さうした所謂「推參」は、一つには宣傳の方便であり、また、あはよくばパトロンになつて貰ふ爲でもあつた。しかしそれは、初期の名家の娘達が、自分の優れた遊藝をひけらかして廻つた傳統的名殘でもあつた。

けれども、彼女等とて、商買はやつぱり、貴人に召されて遊宴の伴侶をして、米錢のチップを貰ふことだつた。そして淸盛のやうな不作法な男はともかくとして、たつてのお望みがあれば、水干や袴をかなぐり捨て丶泊り込みもした。左樣なことは、當時にあつては敢て家庭の神聖を汚すものとは考へられてゐなかつた。

さて、白拍子は、當初の遊女と同樣に、全然自前の商買人だつた。後世のやうに、料理茶屋だの、待合茶屋だのはなかつたのだから、お客の邸で商買をするか、さもなければ吾が宿で商買をしたのだ。

しかしそれでも、同類自ら相集る傾向はあつたと思はれる。それは地の利を占め、近邊に屯することが、商買上必要でもあるし、便利でもあるからだ。かうして、白拍子が次第に下等遊女と同じものになつて來るに從つて、原始的な、密娼地區が形成されて行つた。その結果は、自前の白拍子が減つて、所謂遊女と同樣に、抱へ白拍子なども出來るやうになつた。かうして、白拍子と所謂遊女とが殆んどイコールになつて來た頃には、都市には白拍子町なるものが出來た。それは、近世の

遊廓乃至は遊里の原始的なものだ。その中で最も著名なのは、京都五條東の洞院から六條のあたりへかけて出來た白拍子町だ。これが豐臣時代から江戸時代の初めにかけて活躍した六條の遊女の濫觴をなした。

○

微妙　微妙は源頼家が將軍の頃、鎌倉一と云はれた白拍子だつた。右兵衛尉藤原爲成の女であるが、事によつて白拍子となり、鎌倉へ下つた。父の仇を討つためだつたらしい。建仁二年（西紀一二〇二年）の三月、頼家が花見の宴を催した時、彼女は召されて歌舞を演じた。「歌の聲は梁塵を飛ばし、舞の袖は白雪を廻らし、頼家卿しきりに感じ給ふて、數々廻る盃の、重なる夜半も時ふけたり」と『北條九代記』には記されてゐる。

それから間もなく、八月十五日の夜、微妙は、臨濟宗の開祖榮西の弟子、祖達坊に頼んで髪を下し、名も持達尼と改めて、亡き父の冥福を祈つた。處がこゝに、古郡新左衛門尉保忠といふ武士があつた。かねて微妙と淺からぬ語らひをしてゐた。「水も洩さじ」としがみつき合ふ間柄であつたさうな。折柄彼は、甲斐の國に行つてゐたが、さて鎌倉へ歸つて見れば、微妙が比丘尼になつたとの事、始終を聞いた保忠は、祖達坊の庵室へ怒鳴りこんで、彼を引ツ捕へて散々に打擲した。流石に尼には手をかけるに忍びなかつたと見えて、そのことは何にも書かれてゐない。彼の亂暴を聞いた頼家は、不都合なことゝ思はれ、御勘氣を蒙つたと云ふ。

一說に、微妙は北條泰時がよろしくやつてゐた女だとある。

○

龜菊　京都で聞えた白拍子であつた。後鳥羽院の寵を受けて、常にお側へ置かれ、攝津の國に長江、倉橋の二莊を賜つて、奏言聽かれざることなしといふ有樣なのをいゝことにして、往々政治上のことまで口出しをしたと云はれてゐる。

處が、彼女の領地の地頭が、龜菊などを眼中に置かないやうな行動をした。生意氣なとばかり柳眉を逆立てた龜菊は、しきりに院に泣き附いて、地頭を改易させて賜はれとお願ひした。そこで院は、北條義時に改易方を仰せ下された。義時は、地頭を置いたいわれから說き起して、女などの告げ口などは御用ひなさらぬがよろしうござりませうと言上した。院は、非常に逆鱗まし〳〵、他の色々のこともあつたので、どうしても北條氏を倒さねばいかぬと御決心を堅う遊ばされたのだと云ふ。

その結果は、承久の亂となり、同三年（西紀一二二一年）、院はついに義時のために隱岐へ行幸遊

ばされねばならなかつた。院は、龜菊を從へられて御出立になつた。明石の浦を過ぎ給ふ時、

都をば、くら闇にして出でしかど、月は明石の浦に來にけり

と御製あつて龜菊に示された。龜菊は、

月影はさこそ明石の浦なれど、雲井の秋ぞ、なほもこひしき

と御返歌申上げた。院の隱岐に於ける御暮しは、おいたわしいものだつたが、彼女が常に扈從してゐるので、それを唯一のお慰めとして、淋しい秋雨の夜、心地よい春風の日を、しみじみと送り迎へ遊ばされることが出來た。

○

玉壽　元寇の頃、玉壽といふ白拍子があつた。或る夜、宇都宮貞綱なる者は玉壽と同衾してゐた。そこへ强盜が押入つた。目を覺した貞綱は、太刀を拔いて强盜を威嚇しながら、玉壽を脇に抱へて後庭へ逃げ出し、更に檜の垣を乘り越へて逃げた。これを聞いた人々は云つた。「女が可愛くて斬合ひも出來ずに逃げたとサ」。

貞綱はすつかり浮名を流し、卑怯者扱ひをされた。貞綱はこれを聞いて、「おゝさ、玉壽はとにかく、これからでも强盜に逢へば逃げ出すよ、强盜と取かへられる命ではない。いざ鎌倉といふ時に投げ出す命だからの」と辯解した。「何とか仰つしやいましたね」と、貞綱の評判はすこぶる惡るかつた。處がその後戰のあつた時、貞綱は大いに奮戰し、自害して果てた。

三、鎌倉時代の遊女

遊女の繁昌　賴朝が鎌倉に居を定めて、こゝを本據として平家追討を進めるやうになつてからは、鎌倉は次第に人家も殖えて來たが、同時にそこへ集まる武士達をお得意にする女達も流れ込んで來た。殊に幕府が開け、平家が滅亡し、鎌倉が權力の中心になるやうになつてからは、諸方から白拍子などが集つて來た。京都とは違つて、他には遊樂の設備もなく、且つ左樣なものは造らせぬのが幕府の方針だつたから、酒と女の外には、入れ交り立ち替り來る將士たちの鬱を散ずるものがなかつた。自然、遊女の需要はすこぶる旺盛だつた。戰敗者に味方した者の家族の婦女たちは、糊口をしのぐための唯一の道として、恥を捨てゝ續々遊女として鎌倉へやつて來た。後世の江戸や東京が、青雲の志を抱く男子や喰詰ものゝ乾坤一擲の舞臺となつて、續々男たちが集つたのとは反對に、ゑたいの知れぬ男共の入關を禁じた鎌倉には、女達が青雲を志してやつて來たのだ。

かうして、府の北西、化粧坂には遊里が出來た。それは江戸に於ける吉原を簡素にしたやうなものだつた。程遠からぬ大磯にも遊女が續生した。京鎌倉の間の往來が頻繁となつた爲に、海道の遊女もまた自ら活景を加へた

當時は交通不便な時代だから、現代人の生活を規準にして考へると、減多に旅行などは出來なかつたであらうやうに想像される。しかしそれは一面的な觀察で、當年の男の子共は決して家へ籠居してはゐなかつた。彼等は、輕快颯爽たるお抱へ駿馬に鞭を上げ、或は輕舟の艪杆をあやつつて、盛にノシて廻つた。戰時は戰時で、軍陣の暇に大いに遊女を抱いて英氣を養つたし、戰のない時はまた暇で仕やうがないのだから、よき花あらば手折るべく、先を爭つて遊女へ向つて猛進した。卷狩、狩倉など〻稱する當年の大演習や、機動演習などは、誠に一擧兩得な機會だつた。晝は勇猛果敢に畜生共を狩りたて、夜は夜で、獰猛に女を征伐するのが大將だちの男性的な遊びだつた。「女に戯れるなどと柔弱な」なんて考へるやうになつたのは後世のことで、彼等は英氣を養ひ士氣を皷舞する爲に常に女を引き具して廻り、女を漁つて廻つたのだ。若しそれを嘲笑する者があるとすれば、それは餘りに話の分らない奴で、今日とは違つて、その頃は麻雀もなければ、野球もなければ、ダンスやレビュウは愚芝居も活動もなかつたので、武士達の娯樂といへば、たら腹喰ふか、がぶ〳〵酒を飲むか、女と遊ぶか、然らざれば喧嘩をしなければならなかつたのだ。

○

遊君別當　しかし、獰猛殺伐な當年の武士達が、馬車馬のやうに遊女へ突進したといふことは、往々危險な結果を招いた。彼女の愛に溺れ過ぎて腑拔けのやうになる者が生じたゞけではない。い〻女を吾が手に入れようと物凄い鞘當が演じられたり、それが元で大喧嘩をしたり、果ては問注所へ持ち出して裁判沙汰になるといふものすら少くなかつた。女は女で、私の旦那を取つたゞの取らぬのと、これまた勇敢に競合ふので、幕府もそのまゝ捨て置くわけに行かなかつた。

幕府は夙に「遊君別當」なる官職を設けてこれ等の取締りをやつた。初めは木曾義仲の長男、人質に取つて女婿にしてあつた志水冠者（また清水冠者、源義高）をその職に當てゝゐた。これが我が國に於ける遊女取締役人の始めだ。處が間もなく義仲頼朝の間が不和になり、頼朝は彼を殺さうと企てたので、志水冠者もそれを察して逃げ出したりした爲に、一時その職が絶えた。しかしその後數年、建久四年（西紀一一九三）改めて里見義成をこれに任じた。以來鎌倉時代の末まで、里見家が代々遊君別當を承つて、よろしく女共を取締つた。

『麓の色』によれば、建久四年の五月、頼朝が富士の卷狩をやつた時、手越、黄瀬川を初め、附近

の遊女を參集させて、御前に列べた。その時頼朝は里見冠者義成を召して、「これからお前を遊君別當にする、只今かれ等が集つてゐるから、あちらへつれて行つて藝のよいものを選んで置いて、召しに從つて差し出せ」と命じた。その後、遊君の訴論のことまで、義成が一手に熱心に執り申した、といふことだ。

○

遊君根源　遊女を遊君といふやうになつたのは何時の頃か分らないが、多分、平安盛時以後、鎌倉開幕までの間に、慣用の起源があつたのだらう。

一體「君」といふ文字は、日本では男子の美稱として用ひられ、普通は主君の意味に用ひられてゐるが、支那では君主の意味の外に、これを女子に對する美稱として用ひる用例があつた。漢の古制では、大功があつて高い爵位を與へられた人の夫人には、君號を賜ることになつてゐたといふ。これが終に「細君」(妻君などゝ書くのは物識らず)といふ言葉にまで進化した。處でこれを、カカ大明神をあがめ奉る語と考へたりしてはとんでもない誤りで、荆妻、菲妻なんて云ふのと同じ意味なのだ。支那に「命婦大君」といふ言葉がある。おゑらいお方の奥様のことなんで、それに對して家のカカを、「いえ、けちなアマでござんして」といふ代りに「細君」と云つたのだ。從つて、「うちの細君が」などゝ云つた處で、「あの野郎、カ、から尻に敷れてるに違エねエ」などゝ、嫌疑を受けるいはれはない筈なんだ。

そこで、遊女を、そのかみの「みやびを」たちは、大いに敬意を表して、遊君と稱し奉つた。また、みやび言葉で「きみ」と簡單にいひもした。

○

法然上人と遊女　念佛淨土宗の宗祖法然上人源空が、新宗の故を以て朝廷の忌諱にふれ、建永二年(西紀一二〇七)二月、七十五才の老齢の身で讃州に流される時のことだ。上人は、歸依する京洛の貴賤男女が、道の兩側に滿ちあふれて、御法難を嘆き、涙を流して別れを惜む中を、鳥羽から川舟に乘つて淀川を下つた。神崎まで來た時、こゝで海船に乘り替へるために暫く碇船した。送別のためにやつて來た天王寺の別當大納言律師と對面して法談のある間、そこらに數多の舟に乘つた信者たちが集つて來た。その中に、神崎の遊女、みやき(或は今木ともある)、あづま、かるも、をくら、大にんの五人が上人の船に參つて、身の薄命を訴へ、法の救ひを求めた。上人は、懇ろに淨土法門の教を說いてやつた。遊女たちは隨喜の涙にくれ、一念發起してその場で髮を切り、上人に捧げた。彼女等はその歸路、合掌念佛して、共々に身を神崎川に投じて西方淨土への旅に上つた。

時人歌つて曰く、

あづまぢや宮城の原の露かるも、月の小倉にうたの大にん

やがて彼女等のむくろは、橋杭にかゝつて浮き上つた。村人たちはその心を憐れんで、遺骸を集めて堤の側に葬り、「遊女塚」をたてた。これは一に上蔦塚または傾城塚などゝ呼ばれて、久しく香花が絶えなかつた。遊女達が詣でゝ冥福を祈ると、必ず幸運が開けたと云ふ。今も南無阿彌陀佛と六字の名號を刻した碑だけは神崎にあつて、傍には五人の遊女を葬つた由を書いた木札も立てられてあるが、それは原地にセルロイド會社が建設される爲に原地から移されたもので、今は顧みる者もなくなつた。彼女等の遺髪や引かゝつた橋杭や緣起などは、尼崎市の如來院にあると云ふ。

さて、法然上人は、流される途中播州室の泊（所謂室の津）に着いた。するとこゝでも、遊女が小舟に乘つてやつて來た。それは、決して媚を賣らんが爲ではなかつたデス。

「上人樣のお船と承つて參りました。世にすぎわいの道も樣々ございますに、どうした罪業でかやうなあさましい商買の女になりましたでせう。この罪深い身を、どうしたら後の世で救はれることが出來ませうか」

と、訴へ且つ敎へを乞ふのだつた。そこで上人は、

「そなたの申さるゝ通り、さやうなすぎわいをして世を渡る罪障は、とても輕いことではない。報いのほども測り難い。だから、若しさう云ふ商買をせずに世渡りの道が立つならば、速に廢業するがよい。しかし他に別段の考へが付かないか、または身命を顧みざる程の道心がまだ起らないならば、そのまゝに商買をつゞけて、一心に念佛するがよい。阿彌陀如來は、さやうな罪障ふかき人のためにこそ、救ひの誓をなされたのだから、たゞ一筋に本願をたのんで、敢て卑下する必要はない。本願をたのんで念佛すれば往生うたがひない。」

と、懇に訓へた。遊女はたゞ有難涙に暮れながら聞いてゐた。上人は、じつとその樣子を見てゐた。そして心の中に、この女は信心堅固だ、定めて往生を遂げるであらうと思つてゐた。

それから五年、順德天皇の建曆元年、上人は許されて京へ歸つて來た。その途中、室によつて先の遊女のその後を見た。果して、彼女は上人の敎を受けてから賤しい商賣を止め、程近き山里に住んで只一心に念佛をしてゐた。上人はその翌年入寂したのだが、彼女も幾程もなく臨終正念の往生をとげた。

更に上人は、歸洛の道すがら神崎にも下りて、かの五人のその後を尋ねた。そしてありし事どもを聞いた。上人は、その地の釋迦堂に籠つて、二夜三日、身を投げて西方淨土を志した遊女たち

のために、追善の供養を勤めてやつた。

○

遊女を醜業婦と觀ずる思想　こんな物語によつて、當時すでに遊女稼業といふものが、罪障の深いものだといふ觀念が起つてゐたことが分る。また、遊女稼業に身を落すことを、苦海に身を沈めると考へるやうになつて來たことが分る。源平時代以前の遊女たちが、敢て高貴な商賣とは思はなかつたにしても、一種の藝術家的プライドを以て、貴人と雖も敢て臆する處なく、推參いたしたりしたのとは著しく違つて、如何にも陰慘な感じのものになつて來たのだ。

これはどうしたわけであつたか。

その第一の原因は、佛教の感化であつた。元來佛教は、夙に吾が國に傳來してゐて、奈良時代にも平安時代初期にも、頗る盛大だつた。しかしそれは、現世極樂を欲求する貴人が、一つの道樂としてはやらしたものだつた。一子出家すれば九族浮ぶなどゝ云ふ信仰はあつて、この世で悲境に立ち、悲嘆に暮れるやうな場合には、出家して、この世の憂患を超越し、來世の功德を願ふといふやうなことはあつたが、それにしても厭世的な氣持は極めて稀薄だつた。

處が武士が諸國に興起し、京の朝臣は墮落の淵に沈んで、世の建直しが徐々に行はれんとするやりになつてから、殊に源平二氏が猛烈な正面衝突をし、一朝にして興り、また一朝にして滅ぶといふやうな、驚くべき事態が眼前に展開して、眼のあたりに有爲轉變の世の有樣を見るやうになつてから、社會民心は俄然變化した。動搖不安が民の心を支配した。民衆はこの破滅を思はせる世界を眺めて、諸行無常と觀じざるを得なかつた。今日あつて明日なきはかない命を、何ものか偉大な力にすがることによつて——それがたとひ現世であつても未來であつても——救はねばならなかつた。

この社會の情勢、人心の痛切な要求によつて生れたのが新しい佛教だつた。社會は、そして時勢は偉人を待望し且つ偉人を作る。この人心の待望に應じて、社會の新要求が作り出した宗教的偉人は、先づ僧源空法然上人であり、ついで愚禿親鸞であつた。彼等は舊勢力なる叡山、高野山、南都など、殊にその出身である叡山の僧徒のために、大きな迫害を加へられねばならなかつた。また、敢て彼等に歸依しようと欲しなかつた者も少はくなかつた。しかし、民心は糾然と彼等の新宗教に集つた。彼等は、學に於て識に於て、高く深きものがあつたけれども、それ等を以て民を教へようとはしなかつた。只、念佛せよと教へた。一向專念に念佛すれば必ず救はれると教へた。此の世の仕合せを受けてゐる者や心正しき善人にさへも手を伸べて救はんとする程、の慈悲はかり知れない阿彌陀佛が、ましてこの世の哀れなもの、心曲れる者を救はない筈がないと說いた。如何なる人も

この世に於て悲しみはある、善人と云へども尙邪念はある。彼等が隨喜の涙に暮れながら、この念佛の聲の下に期せずして集つたのに何等の不思議はない。

ともかくも、新しい宗教意識は、社會人心にしみ渡つた。源平爭亂の頃以來、悲しいにつけ、この世の汚れが厭はしいにつけ、出家遁生菩提を志した人心の傾向は、愈々募つた。それは、かの三原山行や、天國に結びもせぬ戀の心中がはやるよりも、更に猛烈なものであつたと思はれる。かくて、武將も事によつては出家を望んだ。まして力を賴む夫を失ひ、思ひ焦るゝ愛人をなくした女達に至つては、水の低きにつくやうに頭をそりこぼつのだつた。

さて、新しいこの宗教意識は、王朝時代や江戸時代のやうな形の信仰ではなかつた。魂の問題だつた。言葉を換へて云へば良心の問題だつた。そして新宗教は、人間の罪障を說いた。漸く貞操念觀がはつきりして來つゝあつた時に、貞操を賣物にする稼業が賤しまれ、殊にその業に從つてゐる女が、――宗教意識の旺盛な女であればある程――自らたまらないやうな良心の苛責を感じたことは當然であつた。彼女等は、慄然として我が身の罪障を恐れねばならなかつた。

第二の原因として、寧ろ彼女らには根本的な原因として、遊女商賣の性質が變つて來たことを擧げねばならぬ。

平安貴族の遊蕩は、たとひそれが性的享樂のドン底まで進むにしても、しかしそこに何となく詩的な、なごやかな氣分があつた。簡單に云へば、のんびりとしたものだつた。しかし武士が權力を握り、殊に無教養な、野蠻な阪東武士がのさばり廻るやうになつてからの遊蕩は、何よりも先づ大いに飲んで、さて旺盛な獸慾を遂げるといふことに終始した。のんびりした詩的な遊蕩氣分は、露骨な、餘りに現實暴露的な、凄まじいものに化した。かくて、お客は遊女を傳統的にまた愛の對照として、或る程度大事がつてゐたとは云へ、多くの、朝には越客を送り夕には呉客を迎へるといふ式の女に至つては、我が身を淺ましい哀れな女と觀じないわけに行かなくなつた。

尙、それまで多くは自前で自由に稼いだ遊女が、次第に抱へ遊女となつて來たことが、彼等の社會的待遇を低め、境遇を悲慘なものにした大原因であつたことを逸するわけには行かない。

とにかく、かうして、鎌倉時代以後の遊女は、近世以後の遊女と餘り變らぬ觀念を以て自他共に見るものとなつて來た。遊蕩史上の女として名を殘す場合はとにかく、いゝ意味で名を竹帛にたれるだの、文學史上に名をとゞめるだの、或は美しい（情痴史）ロマンスを殘すだのといふ者が、漸く數を減じて來た。

前に述べたやうに、西行法師と歌の贈答をした江口の妙は、しきりに遊女の罪障を悲しんだこと

になつてゐるが、それは後人の作つた物語であるからだ。謡曲の「江口」は室町時代の作品だ。

○

東の遊女　弘安三年（西紀一二八〇）といふから大元寇のあつた前年のこと。後宇多天皇は伏見の津へ行幸遊ばされて鵜飼の船を叡覧あつた。その折、白拍子をお船へお召しになつて、歌など歌はせたとものゝ本には書かれてゐる。

また、同八年の七月、野上へ行幸啓のあつた時には、晝の間は四邊の美しい景色を日暮まで御覧になつてお遊びになり、夜は遊船で宴遊があつた。東宮は琵琶を彈かせられ、花山院大納言が笛を吹き、或る者は琴を彈じ、徳大寺大納言は朗詠をした。そこへ大夫殿と云ふがやつて來て、「二位入道が、御ものやどりの刀自と合乘船で、入江の松の下にかくれて琵琶を調べてゐるのにつかまり、そこへ傾城がやつて來て船に乘りたがつて騒ぐので、大遽遅れました」と言譯をした。

これ等によつて分るやうに、その頃までは尚、高貴の人々堂上人たちが、遊女を宴遊の伴侶としてゐたことが分る。彼女達が、年々に賤しい者となり、また社會から下賤醜汚な職業人と考へられるやうになつて行つたとは云へ、まだ決して後世の淫賣婦のやうなものではなかつたのだ。

○

しかし、後世でも現在でも、遊女と云ひ賤業婦と一口に云はれる女達の中にも、ピンからキリまで、様々なものがあるのだ。五十錢も出せば、ルンペン先生のためにでも様々な藝當を御覧に入れるしがない女から、伯爵様か大ブルジョアか、さもなくば社會に聞えた政治家先生でもなければ、ツンと澄してゐて、滅多なことは云はせないぞと構へ込んでゐる女まであるやうに。

京島原遊廓の源をなした五條東の洞院から六條のあたりにかけての遊女町、その頃白拍子町と呼ばれてゐたが、そこには上等の人は勿論、平民のためにも、相當の金さへ出せば情を分つて呉れる女達がゐた。

室町時代

——南北朝時代から戰國時代まで——

○

士氣を鼓舞する爲に　歐米の軍隊は、出征の時に女房や愛人と手を携へて出かけるらしい。その光景は映畫でよく見かける。そこで日本國民は「あんなザマだから戰爭が弱い」と評する。筆者も多分さうに違ひないと思ふ。しかし、日本の勇敢な兵士も、戰地で女を見かけると更に氣が勇むさうだ。我が女房や愛人と一諸に戰地へ行つたんでは命が惜しくなりもしやうが、女ッ氣がある爲に、勇氣が沮喪するといふやうなことはあるまい。戰地に立つた經驗のない筆者には何とも判斷がつかないが、想像する處では、足手まといにならない限り、適當に女のゐることの方が、士氣を旺盛にするだらう。外國の兵士に至つては、支那は勿論、歐米のそれでも、新しい侵入地の女を征伐する樂しみ一つ、で元氣が出るのださうな。

處で日本でも、往昔の武士は出征の時に遊女を引率して行つたり、陣中へ遊女を呼び寄せたりした。それは源平時代や鎌倉時代の章でも述べて置いた通り。千早城に籠つた楠木正成を攻めあぐんだ北條方の大將達が、江口や神崎の遊女を呼び寄せて、陣中の退窟しのぎをしたことが、「太平記」にも出てゐる。

同じく「太平記」によれば南朝の正平十七年、北朝の康安二年（西紀一三六二）、九州の菊地肥後守武光は、新に足利幕府から九州探題に任じられて豐後に入つた今川貞世を打破つた。そこで幕府は、更に尾張左京太夫氏經を九州探題に任じて下向させた。左京大夫は先づ兵庫に下つて、山陽南海の兵に集れと號令したが、一向集るものがなかつた。仕方がないから、悲壯な決心を定めて、僅かに二百五十騎を軍船に分乘させ、寡兵の士氣を大いに鼓舞するために、數多の遊女を狩り出して船にのせた。御大將の屋形船は勿論、士卒の小舟に至るまで、少きも十人、多きは二十人といふ風に、なるべく公平に分配して。

遊女共は何れ、恐れおのゝき、疲れ果て、意氣銷沈したことだらうが、それから先のことは分らない。とにかく將士は、元氣旺盛に豐後へ乘り込んで進軍した。そして忽ち擊退されて、今の大分、別府間にある四極山高崎城へ立籠つたとある。

○

遊女照手の傳說　小栗判官と遊女照手（或は照手姫）の傳說は、江戸時代以來芝居や物語で有名で、今日ではまるで史的事實かのやうに一部の人々には考へられて、色々な遺跡などさへも出來てゐる。

この傳說の元は『鎌倉太平紙』などであるらしい。足利四代將軍義持の頃、常陸の住人小栗孫五郎滿重といふ者があつた。謀叛の噂があつて誅せられたので、その子、小次郎助重は關東を流浪し、會々相州權現堂の或る盜賊の家に泊り合せた。主は助重を毒酒で殺さうとした。席に侍する遊女照手は、助重に危險を告げて、名馬鬼鹿毛で逃がしてやつた。助重は藤澤の道場（寺）に逃込んで、上人の情によつて三州へ落ちることが出來た。その後助重は三州から東へ歸り、遊女照手を尋ね出して、その厚意を謝し、賊共を退治た、といふことになつてゐる。藤澤には、小栗滿重の木像を安置した「小栗堂」があり、同國金澤には「照手の松」があるさうだ。

これを潤色し、脚色したのが小栗判官と照手の芝居であり物語なのだ。江戸時代の初期には、もう說教節に作られ、間もなく淨瑠璃になり、元祿以前から歌舞伎の舞臺にも上された。その小栗判官は、足利七代義政の寵遇を受けた繪師小栗宗丹に附會したものだとされてゐる。

近松門左衛門の「當流小栗判官」（元祿十一年上演）は、藤澤寺の緣起によつて創作したものださうで、幾分變つてゐる。――小栗判官兼氏は流浪中、相州の押領使横山郡司信久の子三郎から遺恨のために毒酒を飲まされたが、彼を戀慕する三郎の妹照手姫の一心な信心の功德で本復し、敵を討つた、といふことになつてゐる。

この情話は、隨分色々な形に改作されてゐるが、元文年間に出來た「小栗判官車街道」といふ淨瑠璃が、後の芝居の種本となつてゐるやうだ。それには藤澤寺の遊行上人が出たり、照手姫が、惡人から遊女に賣られやうとするのを逃れて青墓の遊女屋萬屋の下女になつて、小栗判官に面會したり、足腰の立たなくなつた判官をいざり車に乘せて那智へ參籠したりすることになつてゐる。その物語によつて京畿地方には照手の遺跡といふものが澤山出來た。大阪府三島郡岸部村（吹田驛附近）鶴岡街道の小祠名次の宮は、照手が車を曳いて行く時に綱が切れたので一寸休んだ處だといふし（名次は繩つぎに由來するといふ）、鶴岡街道を一名小栗街道と呼んでゐる。――各地にあるくだらぬ名所舊跡などには、こんな處が幾らでもある。今に逗子の浪子不動（蘆花の不如歸）や熱海のお宮の碑（紅葉の金色夜叉）も、舊蹟となるだらう。

○

加賀桂女と女　平安時代に宮廷や貴人の邸に出入した遊女は、うかれ女だつた。源平時代以後は專ら白拍子だつた。しかし白拍子が安女郎化してからは、彼等は貴人に近づくべからざるものとなつ

た。それに代つて宮廷や公方の宴遊、歡樂の伴侶とされたのが加賀女や桂女であつた。

加賀女といふのは、加賀の國から上つて來る遊女であつた。佛御前以來、加賀では、どう云ふ關係か分明でないが、いゝ遊女が養成されたと見える。『書札雜々聞書』といふものに「公方（將軍）へ白拍子は參らず候、かゞ女と申す遊女參り候。加賀節などとてはやり候」とあるさうだ。加賀節は都の上流社會に流行したらしい。初めは加賀女も陣中などに召してゐたので、「これを殿中に來させて差支ないものかどうか」といふことが問題になつたこともあつたが、何時かそれも普通のことになつた。加賀女の中に、車と名乘る女のゐたことが古記錄に見えてゐる。

桂女は巫子だ。傳へによれば、神功皇后新羅征伐の時に桂（桂姫または桂御前）といふ女も從つたが、その關係で、皇后を祀る伏見の御香の宮にその子孫が奉仕した。石清水八幡の巫子も彼女等の兼職だつた。彼女等の住む地を桂の里と呼んだ。九條の西、大炊（大井）川のほとりで、今もその地には桂川を初め桂の名が殘つてゐる。彼女等の部落は獨特のもので、名主は女系の相傳であつた。その形態は明治初年まで傳へられて諸稅免許であつたといふ。

巫子は一種の賣笑婦であつたと一部研究家は斷定してゐる。近世の漂浪的巫子が特殊の淫賣婦であつたことはやがて述べるが、とにかく神に奉仕し、神前に歌舞する彼女等は、神靈ばかりでなく一部の人々へのサービスガールであつた。桂女も、獨特の巫子姿で、宮廷や公方の御殿などに出入して、歌舞をし、サービスをしたらしい。

○

傾城局　後奈良天皇の大永八年（享祿元年、西紀一五二八）、十二代義晴の時、室町幕府は新に傾城局を設けて、竹内新太郎重信を、その長官「公事」に任命した。傾城局は、遊女に關する一切の取締、裁判などを司る役所で、一面それは遊女から稅金を取立てる機關であつた。室町幕府は、初期の將軍達の濫費と、天下を統制する實力がない爲に諸國からの貢物が入らないのとで、すつかり財政が欠乏し、京都內外及び畿內にあらゆる種類の稅金を課したが、しがない遊女からも稅金を取立てゝ府庫の收入の一部とした。その稅額は、遊女一人年額十五貫文づゝだつた。若し脫稅したり怠納したりするに於ては、忽ち家財一切を差押へて、イマキの末に至るまで容赦なく沒收した。

○

傾城のいわれ　『麓の色』に、大體次のやうに書いてある。

——傾城とはすべて美人のことを云ふ。『詩經』の「大雅」に、「哲夫は城を成し、哲婦は城を傾く」とある。（哲は智慮のある意）。傾城の名はこれから出た。漢の武帝の嬖臣李延年は、音樂の名人

で歌舞をよくしたが、或る時、帝の御前で起つて舞ひながら歌つた、「北方に佳人あり、絶世にして獨立す。一たび顧みば人の城を傾け、再び顧みば人の國を傾く、傾城と傾國とを知らず佳人再び得難し」と。帝はこれを聞いて、「この聖代だ、そんな美人もありさうなものだのウ」と云つた。すかさず平陽公主が側から「ございますとも、李延年の妹が國色無双です」と奏した。そこで早速延年の妹が召された。見れば成る程、無比の別嬪で、然も歌舞が上手と來てゐる。武帝のよろこび斜ならず、いとも恩寵が深かつた。これを李夫人と稱した。延年初め、一族はみな官祿を進められた。『前漢書』、「外戚傳」に詳しく出てゐる。

こんなものが語源になつて、美人を傾城傾國と云ふやうになつた。夏の桀王の末喜、殷の紂王の妲妃、周の幽王の褒似、晋の獻公の驪姫、吳王夫差の西施、衞の懿公の宣姜、唐の玄宗の楊貴妃の類は、みな天生の麗質で、冶容紛然ことく〳〵く人の目を眩し、婀娜婥約として人の心を蕩かし、城を傾け國を傾ける淫婦だ。「長恨歌」に「漢王色を重んじて傾國を思ふ」とあり、「鶴林玉露」に「一顧城を傾け再顧國を傾くるは色なり」といつてゐる。

これ等の古語に基づいて、我が國でも遊女を傾城と稱する。その意味は、これが爲に家を傾け身を亡す者が多いからであらう。しかし、一たび顧みて人の城を傾るほどの別嬪はなか〳〵ない——と。

日本で、何時の頃から遊女を傾城といふやうになつたか、それははつきりしない。しかし、少くも傾城局の設けられた頃、或はそれ以前であつたことに間違ひはない。そして、その後から江戸時代（殊に初期）にかけては、專ら遊女を傾城といつた。勿論、下等な安淫賣には云はなかつた。

○

室町時代の京都遊女　室町幕府の極盛時、三代義滿の頃は、將軍すなはち公方の生活は、豪奢を極めたものだつた。殊に義滿などは、一般歴史でも叙べられてあるやうに、僭上と豪奢の代表者たる觀さへあつた。それ等の日に、公方は日々の生活に費を盡すだけではなく、また驚くほどの巨費を投じて宴をした。京洛の遊女、白拍子たちが、サービスをして席を花やかにし、そしてまた一同は田樂や猿樂などを樂しんだのだつた。さうした樂人や、女達は、散會にあたつて、すばらしい賜物を頂戴した。

幕府も漸く末期に近づいた頃は、とてもさやうなわけには行かなくて、女郎共からさへ、醜業によつて僅かに得た金を絞り取らうとした程だつた。殊に皇室に於かせられては、式微その極に達せられ、即位の大典や御大喪さへ、御中止になるといふ恐れ多い有樣だつた。附近の子供達は、「禁裡

様へ遊びに行かう」と御殿の中へ出かけて行くし、それでも尙皇室を尊崇し親しみを感じる人民が、見物に出かけたり御親筆を頂くためにやつて來たりするので、それ等を目當てに右近の橘の下へ茶店を出す者があるといふ有樣だつた。

さうした時に、京洛の遊女たちは、駕に乘つて町賣に出かけて行くのだつた。ある處には如何に不景氣でも金はあるもので、殊に人民から絞り取る階級の武士達は不景氣ではなかつたので、大いに傾城諸君と戀愛遊戯をした。で、相當な女になると、美々しいおカゴに乘つて、京の街を得意氣に往來するのだつた。公卿などは、とても遊女を呼んで遊ぶ所のセンギではなかつた。

江戸時代の芝居や讀み本には、當局の忌諱をさける爲に、時事を仕組んだものや世話物式な諷刺狂言を、鎌倉や室町の世界に取らねばならなかつた。「修紫田舍源氏」、「猿源氏草紙」などもそれだ。從つてそれ等は、果して當年の狀況を寫し得てゐるものかどうか甚だ怪しいが、「猿源氏」の中に、或は室町末期の京都遊里風景に近いものではないかと思はれるものがあるから、御紹介に及ぶことにしよう。

――宇都宮殿は、五條東の洞院にある遊女の家の前を通つてゐた。桂花、薄紫、春雨などの遊君十人ばかりがそれを見て、「素通りするとは、つれない方や」と飛び出して來て、袂にすがり、手に取りつき、とう〳〵座敷へ引上げて仕まつた。やがて盃が出る。「さあ一献召し上つて、誰なりと思ひざしをして下され」といふことになつた。宇都宮殿は、なみ〳〵と酒を受けて、飲んで、さてあちこちと並んでゐる女共を見比べてゐたが、これと定めて桂花へさした。桂花は大はしやぎで、「まあ、これは珍らしい、私がお盃を頂いた」と、取上げて飲んで、次々と他の遊女へ盃を廻し始めた。「そんな捨盃なんぞさゝれたつてしようがない」と、岡燒きしながら座敷を下つて行くのもあれば、そのまゝ居殘つて一緒に騒ぐものもあつた。やがて夕暮になつたので、桂花は宇都宮殿の宿へ出かけて行つた――

かう云ふ風に、女達が客引をやつて、お客はまた大勢の遊女を並べて、その中から氣に入つたのを選定し、遊女屋ではたゞ酒宴をやるだけで歸るが、やがて夕暮ともなれば女がやつて來て一夜のお伽をするといふことになつてゐた。後の世のチョンの間式な遊びなんぞと違つて、これはまた格別に情愛がある。この、市中の宿や邸などへ出かけて行つて淫賣をするのを町賣といつてゐた。この賣色樣式は、遊ぶものにとつては誠にいゝが、どうも風紀上面白くないといふので、江戸時代になつて、家光の寛永の末年、禁止された。

○

戰國武將と男色　女色は柔弱でいかん、といふ觀念は、戰國時代の武將の中から生れたものらしい。勿論武將とても、女色を近づけなかつたわけではない。いや、大いに近づけた話は澤山傳はつてゐるが、美人の色香に溺れた爲に國を亡ぼしたと考へられたものゝ話もまた少なからず傳へられてゐる。かくて美人は、愈々傾城傾國の妖魔と考へられるやうになり、女色に代へるに男色を以てする風が盛になつて來た。戰國時代には、源平時代以來各地到る處に名を擧げた遊君や長者や、遊里は、多く廢滅して、少數の地――新時代に於ける地の利を占め、古い傳統をもつ處だけに、漸く逆里が勃興する傾向を現はした。これは、戰亂のためにあらゆるものが破壞されたからだといはれてゐるが、一面、女色に對する考へが、往昔の武士と戰國の武士との間に相違して來た爲でもあらう。一つにはまた、野蠻粗暴の風が盛で、戰勝者たる將士は、その身分に應じ、力に從つて、被征服地の女を冒す惡風を盛にした爲でもあらう。趣味が低く、女を單に性的悅樂の具と考へて、默然專一になつた武士、雜兵共に至つては尙更、遊女を呼んで散財するなんて、そんな馬鹿々々しいことをする必要を認めなくなつたものらしい。

一體日本の武士は、敵地に侵入した場合に、譬へば支那兵や歐米の兵が餘すなく洩すなとばかり婦女をなぎ倒すやうな、蠻行はやらなかつたと主張する者がある。實際、古來の文學――近頃のものは別――には、殆ど皆無といつていゝ程、さうした事實は傳へてゐない。然し戰國時代の武將が弱い敵將の姫を掠奪したといふ話は幾らも傳はつてゐる。大將やその幕僚がそれ〳〵に淑女たちを奪つて狼藉に及ぶからには、部下の士卒が醜惡極まる暴行を遂げたことだつて想像されないわけはない。たゞ外國人のやうに、鐵面皮な獸的無神經な民族でない日本人は、さうした落花狼藉な行爲に面を背けずにはゐられないデリケートな神經をもつてゐる。從つて、左樣な記事を露骨に書いたものは、好まなかつたであらう。まして高踏的な文學者などは、左樣な醜惡な事實を文學に表現することを好まなかつたに相違ない。そこで國文學などには殘されてゐないのだと思はれる。江戸時代の末に續出した講談や讀本の類でも、さやうな蠻行は雲助や山賊輩に限つて敢行する所行のやうに傳へてゐる。ともあれ、日本武士の大部分は、たとひ一部に不心得なことをやるものがあつたにしても、支那や歷史に傳はる歐洲の兵士のやうな、慘酷極まることはやらなかつたやうに思はれる。

さて、戰國の諸將は美童を愛した。然も、その美童がやがて勇士になつてゐる。

筑前琵琶の湖水渡りで有名な明智左馬介光俊は、三宅彌平次といふ明智光秀の小姓であつた。森蘭丸は織田信長に愛された美少年だ。上杉景勝の謀臣として、智略すぐれた直江山城守兼續も、春日源五郎と呼ばれた孌童だつた。それ等に比して些か歷史的相場が落ちるが、當年の三美少年と謳